

第22回

三遠南信 サミット in 遠州

2014

～変わりゆく社会環境のなかで～

三遠南信の特色を活かした
地域発展を目指して

—三遠南信地域連携ビジョンの実現のために—

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu



第22回

三遠南信サミット
2014 in 遠州

事業報告書

平成26年10月27日(月)

会場/アクロシティ浜松

目 次

1	第22回 三遠南信サミット2014 in 遠州 プログラム	2
2	全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞	4
3	全体会 シンポジウム	12
4	全体会 報告「新 SENA について」	27
5	「道」分科会 要旨	29
6	「技」分科会 要旨	48
7	「風土」分科会 要旨	69
8	「山・住」合同分科会 要旨	90
9	三遠南信地域住民セッション 要旨	114
10	報告会 要旨	122
11	交流会	129



1 第22回 三遠南信サミット 2014 in 遠州 プログラム

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

- 日 時 平成 26 年 10 月 27 日 (月)
- 会 場 アクトシティ浜松 (浜松市中区板屋町 111 番地 1)
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)
- 共 催 三遠南信地域経済開発協議会
- 後 援 農林水産省、経済産業省、国土交通省、静岡県、愛知県、長野県
- 参加者 600 名
- 日 程
 - 1 全体会 (13:00~14:45) [場所: アクトシティ浜松 中ホール]
 - あいさつ
 - ・主催者あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木 康友
 - ・開催地域代表あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 浜松商工会議所会頭 大須賀 正孝
 - ・来賓祝辞
国土交通省中部地方整備局局长 八 焔 隆 氏
農林水産省関東農政局次長 小林厚司 氏
経済産業省関東経済産業局企画総務部長 畠山一成 氏
静岡県副知事 高 秀樹 氏
 - シンポジウム
テーマ : 「三遠南信地域の可能性を探る」
パネリスト : 遠州地域 浜松商工会議所会頭 大須賀 正孝 氏
東三河地域 新城市長 穂積 亮次 氏
南信州地域 阿智村長 熊谷 秀樹 氏
コーディネーター: 愛知大学三遠南信地域連携研究センター長 戸田 敏行 氏
 - 報告 「新 SENA について」
三遠南信地域連携ビジョン推進会議事務局長 伊藤 哲

2 分科会 (15:10～17:00) [場所：オークラアクトシティホテル浜松]

○「道」分科会

テーマ : 「中部圏の中核となる地域基盤の形成」

コーディネーター：浜松市長 鈴木 康友

○「技」分科会

テーマ : 「持続発展的な産業集積の形成」

コーディネーター：光産業創成大学院大学リエゾンセンター長 江田 英雄 氏

○「風土」分科会

テーマ : 「塩の道エコミュージアムの形成」

コーディネーター：NPO法人三遠南信アミ理事長 黍嶋 久好 氏

○「山・住」合同分科会

テーマ : 「中山間地を活かす流域モデルの形成」

「広域連携による安全・安心な地域の形成」

コーディネーター：豊橋技術科学大学副学長 大貝 彰 氏

3 報告会 (17:40～18:10) [場所：アクトシティ浜松コンgresセンター31 会議室]

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 浜松市長 鈴木 康友
- ・次回開催地域代表あいさつ : 豊橋市長 佐原 光一

4 交流会 (18:30～20:00) [場所：オークラアクトシティホテル浜松]

5 その他

- ・三遠南信地域住民セッション (10:00～12:00)
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会 (10:30～12:30)

2 全体会 主催者等あいさつ・来賓祝辞

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

○主催者挨拶

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長

浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。本日は、第22回となります三遠南信サミット in 遠州、今回は浜松が開催地ということで、SENAの会長として、また主催地の市長として、三遠南信地域の各地域からお越しの皆様を心から歓迎を申し上げます。この会も22回を重ねてまいりまして、今、さまざまな分野で三遠南信地域の連携の促進を図っているところでございます。特に最近の状況といたしましては、社会資本整備の効果が非常に目覚ましく出ていっていると、我々が期待していた以上の産業、あるいは観光面において効果が出ているということで、今日はそういう御報告もあろうかと思っております。

また、いよいよリニアの事業が本格的にスタートする時期になってまいりました。このリニアにつきましては、もちろん飯田市を中心とする南信州の皆様、待望の社会資本でございますが、これができますと東海道新幹線のダイヤが非常にフレキシブルに組めるようになって、通過交通が減る可能性がありますので、そうしますと我々にとっても、東海道沿線の東三河や遠州の皆様にとっても、これは大変に大きな社会資本整備になろうかと思

います。

これから、この三遠南信地域が、いろいろな形で社会資本が整備されることによって変化をしております。今回のこのテーマは、そうした社会資本の整備による社会環境の変化の中で、これをどうこの三遠南信地域の活性化に活かしていくか、こうしたことをテーマとして議論を進めさせていただきたいと思っております。

さて、皆様も御案内のとおり、今、日本は本格的な人口減少社会に入っております。あの衝撃的な、日本創成会議の人口問題分科会の座長でございます元岩手県知事の増田さんのレポートで、今の基礎自治体、市町村の約半分の896の自治体で20歳から39歳までの、いわゆる出産適齢期の女性の人口が、今後25年間に半分以下になるという衝撃的なレポートが出されました。当然、人口は激減をいたしますので、こうした896の自治体の多くが人口1万人以下となって、自治体としてなかなか成り立っていきにくい、いわゆる消滅可能性都市と位置づけられました。また、リストまで発表されたわけでございます。いよいよ、この人口減少という問題が現実のものとなってまいりまして、これはもちろん各自治体だけではなくて、国全体の課題として取り組んでいかなければいけないと思っております。国も「まち・ひと・しごと創生本部」というものをつくりまして、地方の創生、活性化並びに人口減少に歯止めをかけるために、今、本格的な取り組みを始めようとしています。

そうした中で、切り札の一つとなっているのが、いわゆる自治体間の連携、あるいは地域連携ということでございまして、今後は個々の自治体でいろいろな課題に当たるだけではなくて、自治体間の連携や広域の地域連携の中で、特に構造的な問題に対処していく、

そういう時代になったということでございます。既に総務省では、地方中枢拠点都市圏構想というものをつくりまして、地方にたくさん拠点をづくり、そこを中心にその地域の連携強化を図っていこうと、こういう構想もあります。そういう中で、この三遠南信地域の連携というものは国がそういうことを言い出す前から、もう20年以上にもわたりまして県境を越えた連携として取り組みが進められてきた、非常に先進的な取り組みだと思えます。

ますますこの時代、この連携が必要になってくる、そういう時代に突入したのではないかなと思います。そうした中で、平成20年に三遠南信地域連携ビジョンをつくりまして、その推進会議 SENA を設置いたしまして6年がたちましたが、その SENA をこの7月に新しくバージョンアップをいたしました。一つは、新しい構成員が増えたということ、それから幾つかあった組織、一つは三遠南信地域交流ネットワーク会議、もう一つは、三遠南信地域整備連絡会議という、この二つを統合いたしました。また、これから三遠南信地域の産・学・官連携の中でいろいろな事業を進めていこうということで、今後は皆さんも事業部会に参加いただいて、事業部会で具体的なプロジェクトを進めていこうということを、今、考えているところでございます。ぜひ、皆様におかれましても、この三遠南信地域の連携を促進するために、一層の御尽力を賜いますことを心からお願いを申し上げる次第でございます。

結びに当たりまして、第22回となります本サミットが有意義なサミットとなりますことを心から御期待を申し上げまして、御挨拶にかえさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
浜松商工会議所会議会頭 大須賀正孝



皆様こんにちは。開催地の経済界を代表いたしまして、一言御挨拶を申し上げます。

三遠南信地域の市町村及び商工会議所・商工会の皆様、そして日頃、地域おこしの文化活動を推進されている皆様には、お忙しいところ浜松にお越しいただきまして誠にありがとうございます。また平素、三遠南信地域連携ビジョン推進会議のために格段の御高配をいただいています来賓の皆様におかれましても本当にお忙しい中、ありがとうございます。

この三遠南信というのは、私はいつも思いますけれども長野県と静岡県とは隣ですが、今、非常に遠い隣になっています。長野県に行くには名古屋へ出てから行かなければならない。それで下の道を行くと、同じ位の時間が掛かっていく。これは、経済効果としては、何を置いても新東名を造るよりもこの三遠南信自動車道を早く造った方が、経済効果は素晴らしいと思います。長野へ行くにも、3時間掛かっていたものが1時間半で行けると思えます。半分の距離で行けるとということは、観光に関しても、途中で色々良い観光地、良い温泉もたくさんあり、すぐにも行ける。今は行こうと思っても、ちょっと時間が掛かるからということで、結局、敬遠されてしまう。自動車道が出来るとそこへ行くにも燃料代は半分で済む。半分で済むとCO2の削減にもなるし、経済的な支援も半分で済む、こ

これは大変なことで、これほど大きい経済効果というのには無いと思います。これは何かが何でも三遠南信自動車道を、全員で一生懸命頑張って1日も早く開通する。観光で旅行に行く人たちとか仕事に行く人たちの燃料代も、簡単に考えても年間300億円の経費が軽減されると思います。そこに観光客が増えて人の通行が増える、するとその2倍も3倍に経済効果が出てくる。何を置いてもこの三遠南信自動車道というのは、絶対にどんなことがあってもこれほど重要なものはないと思います。

今、安倍政権が地域創生と言っていますが、これがなくてできるわけがないと思います。何が何でも自動車道開通を早くしていただきたいと思います。愛知県と静岡県と長野県と一緒に、全員で力を合わせてこの三遠南信自動車道を1日も早く開通するために、それをより早くしていくことが日本の国のために、また浜松、豊橋、長野のためになりますので、一丸となって開通に向けての取り組みをしていきたいと思っています。本当に皆さん、ぜひ御協力をお願いいたします。私からは最後になりますけれども、皆様方の御繁栄と、本日お越しの皆様方の御健勝、御多幸を心から御祈念申しまして、簡単でございますけれども私の挨拶といたします。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

■ 国土交通省中部地方整備局長

八 鍬 隆 様



皆様こんにちは。本日は、三遠南信サミット2014 in 遠州が、このように盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、御出席の皆様には、日頃から三遠南信自動車道の整備を始めとしまして、国土交通行政全般にわたりまして特段の御理解、御協力をいただいております、厚く御礼を申し上げます。

三遠南信サミットは、遠州、東三河、そして南信州の三つの地域が県境を越えて連携を深め、一体となって振興を図るため、議会、行政、経済界、学識経験者、NPO、住民の方々などが一堂に会して議論をされるという、大変すばらしい画期的な取り組みであり、また、平成5年度に初めて開催されてから今回で22回目になるということで、長期間にわたり議論を重ね、しかも年々活発に活動され、大きな成果を上げられておられますことに深く敬意を表する次第であります。

御案内のとおり、第2次安倍改造内閣では「地方創生」を最重点課題の一つに挙げ、「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、長期ビジョンと総合戦略を策定することにしていきます。その総合戦略におきましても、地域連携が大きな柱の一つになっており、三遠南信サミットの取り組みは、まさに政府の総合戦略を早くから先取りした取り組みであると理解をしています。国土交通省におきましても地方創生に係る代表的な施策として、三遠南信連携について紹介をさせていただいているところであります。

また国土交通省では、こうした動きに先立ちまして長期的な国土づくりの理念、考え方を示した「国土のグランドデザイン2050」を作成しました。このグランドデザインの中で、地域のあり方として「コンパクト+ネットワーク」という概念を提示したところであります。まさに三遠南信連携は、地域間のネットワーク形成の非常に先進的な取り組みであり、それを具体的に推進するインフラの一つとして、極めて重要な役割を果たすのが三遠南信

自動車道であると理解をしています。

この三遠南信自動車道については、現在、全体約 100 キロメートルのうち、約 3 割が開通しているところです。残りの部分については、国直轄でやる部分と、地方公共団体が現道を改良する部分がありますが、国直轄の部分については、現在、飯喬道路の天龍峡インターから喬木インター、ことしの 3 月 8 日に起工式を行った青崩峠道路、そして佐久間道路・三遠道路の（仮称）佐久間インターから鳳来峡インターまでの区間について、現在、鋭意整備を推進しているところです。このうち、飯喬道路の（仮称）龍江インターから（仮称）飯田東インター間の延長 3.4 キロメートルについては平成 29 年度に、また佐久間道路の（仮称）佐久間インターから（仮称）東栄インターの間の延長 6.9 キロメートルについては平成 30 年度に、それぞれ供用開始する予定ということで公表しています。これらの区間については予定どおり開通できるよう、全力で工事に取り組んでいきたいと考えています。

また、唯一まだ事業に着手できていない区間の水窪北から佐久間間の延長約 20 キロメートルについては、ことしの 3 月に計画段階評価が終了し、さらにこの 10 月 1 日に環境影響評価方法書を公表・縦覧し、静岡県での環境影響評価の手續に着手したところであり、1 日も早い事業化に向けて、鋭意努力していきたいと考えています。

一方、新東名高速道路の愛知県側につきましては、平成 27 年度に完成する予定ですし、平成 39 年にはリニア中央新幹線が品川―名古屋間で開通し、長野県飯田市にも駅ができるということで、本当にこの地域は将来的に夢の広がる地域であると考えています。これらのインフラの高速性、利便性を生かして地場産業、観光、生活、医療、防災など、あらゆる分野にわたり地域の連携をさらに強めることにより、地域の、なお一層の活性化が可

能になるものと考えており、ぜひ今後とも、この三遠南信サミットの活動を継続、発展させていただきたいと心から期待を申し上げる次第であります。

国土交通省としましても、今後とも三遠南信自動車道の 1 日も早い全線開通を目指すとともに新東名高速道路、あるいはリニア新幹線の早期供用開始に向けて御支援を申し上げるなど、高速交通体系の整備につきまして皆様とも緊密に連携をとりながら、積極的に推進をしてみたいと考えております。また、来年早々からは国土形成計画の広域地方計画の改定作業が本格的に始まります。ぜひ、皆様の御指導、御協力をお願いする次第であります。

結びになりますけれども、本日の会議が出席された皆様にとりまして実り多きものになることを期待申し上げますとともに、三遠南信地域のますますの御発展、そして皆様のなお一層の御健勝、御活躍を心から祈念申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

■農林水産省関東農政局次長

小林厚司 様



皆さん、こんにちは。本日は、第 22 回の三遠南信サミットにお招きをいただきまして大変ありがとうございます。また、主催者である三遠南信地域連携ビジョン推進会議及び地元浜松市を初めとする関係者の皆様には、本

サミットが盛大に開催されますことを心からお祝いを申し上げます。御臨席の皆様におかれましては、平素から農林水産行政の推進に御理解、御協力をいただいていることを、この場をおかりしまして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

また、今年の大雪や台風、御嶽山の噴火などにより被災されました地域の皆様には、心からお見舞いを申し上げますとともに、被災されました地域が1日も早く復旧しますよう、農林水産省としましても全力を尽くしてまいり所存でございます。

この三遠南信サミットは、本年で22回目の開催と伺っております。この三遠南信地域が一体的圏域として発展するため、県境を越え三つの地域の皆様が一堂に会して文化や歴史、産業振興など、多岐にわたる議論を長期の取り組みとして継続して取り組んでおられることに対し、改めて深く敬意を表するものでございます。

さて、農林水産省では昨年来、皆様方にも御協力をいただきながら、農地中間管理機構や日本型直接支払の創設を初めとする四つの改革を中心に、攻めの農林水産業の推進を図っているところでございます。関東農政局としましても局長を本部長といたしまして、関東農政局「攻めの農林水産業実行本部」を設置いたしまして、地域の皆様の声を丁寧に向いながら、農政改革を着実に実行してまいりたいと考えているところでございます。また、今年9月には、政府において「まち・ひと・しごと創生本部」が立ち上がりました。農林水産省においても人口減少を克服し、農山漁村のにぎわいを取り戻すことを目指し、関係省庁と連携をして取り組むことが重要と考えており、来年3月を目途に新たな食料・農業・農村計画とあわせて、活力ある農山漁村づくりに向けたビジョンを策定することとしております。こうした計画を踏まえ、農業・農村の発展に努力してまいり所存でございます。

さて、昨年は、2020年オリンピック、パラリンピックの東京開催の決定や和食の無形文化遺産登録など、日本や、その文化に国際的な関心を集めるきっかけが生まれました。また、富士山が世界自然遺産に登録され、あるいは遠州地域では掛川市を中心として、皆様方が古くから取り組んでこられた茶草場農法が、昨年5月に世界農業遺産に登録をされました。この世界農業遺産は、伝統的な農業システムを認定することを通じて、その保全と持続的な利用を図り、次世代へ継承していくことを目的とするものでございます。今後とも地域の皆様方が茶草場農法を契機に、茶草場農法のブランド化や本地域の活性化に一層御尽力いただくことを大いに期待しておりますとともに、関東農政局といたしましても、地域の農業の振興に協力してまいりたいと考えております。

本地域では、渥美半島の菊、三ヶ日のミカン、遠州一帯のメロン、掛川や牧之原の緑茶など、全国に誇るバラエティー豊かな農業が育まれております。さらに、地域農業のブランド力を高めるべく、地元大学や企業との連携によるITを活用した次世代型園芸にも積極的に取り組み、食・農・健康を組み合わせた食の文化の確立を目指していると伺っております。本地域が目指される方向は、農林水産業の成長産業化による地域経済の活性化であり、まさに「攻めの農林水産業」そのものだというふうに考えております。関東農政局といたしましても、本地域での取り組みが全国の先駆けとして発展してまいりますよう、全力で応援してまいりたいと考えております。

今回のサミットは、「～変わりゆく社会環境のなかで～三遠南信の特色を活かした地域発展を目指して」をテーマに三遠南信地域連携ビジョンの実現に向け、市町村長を初めとする関係者の皆様方が意見を交わされる場と伺っております。このサミットが実り多いものとなりますよう、三遠南信地域のさらなる発

展につながることを祈念申し上げまして、私の御挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。

■ 経済産業省関東経済産業局総務企画部長
畠山一成 様



皆様、こんにちは。本日は、三遠南信サミット 2014 in 遠州が関係各位の御協力により、かくも盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げます。また、御臨席の皆様におかれましては、日頃より経済産業行政に多大なる御支援、御協力を賜りまして厚く御礼を申し上げます。

御承知のとおり、アベノミクスによって日本経済は、長引くデフレからの脱却の兆しを見せつつあります。

一方で、地域の中小企業、小規模事業者の皆様からは、いまだ景気回復を実感できていないという声もお聞きしております。アベノミクスの効果を全国津々浦々の地域にまで行き渡らせて、地域の中小企業、小規模事業者の皆様まで、景気回復の好循環を実感していただくということが喫緊の課題であると思っております。

本年9月には、今までの御挨拶でも御紹介がありましたが、内閣総理大臣を本部長とする「まち・ひと・しごと創生本部」が設置されまして、地域が、それぞれの特徴を生かした自立的で持続的な社会を創生できるよう、戦略の策定等に向けた検討が進められており

ます。こうした中で、三遠南信サミットは今回が22回目ということで、三遠南信地域が一体的な都市圏として発展していくために県境を隔てた3地域の皆様が一堂に会し、しかも長年にわたっていろいろな文化、歴史、交通、生活環境、産業振興等々、多岐にわたる分野で議論を積み重ねてこられたと承知しております。さらに、平成20年には三遠南信地域連携ビジョンを策定され、これまた広い分野にわたって、より具体的な成果に向けた取り組みを強化されてきているということで、まさに広域的な地域活性化の取り組みのモデルの一つであると考えております。特に、新産業の創出につきましては、これまでも三遠南信地域クラスター推進会議の皆様を初めといたしまして、精力的な取り組みがなされてきております。浜松地域における医工連携、次世代輸送機器分野の取り組み、それから飯田地域における航空宇宙分野の地域一貫生産体制の取り組み、さらには豊橋地域における植物工場、農・商・工連携の取り組みなどなど、さらに三遠南信の皆様方が広域にわたって具体的な成果をお出しいただいていると承知しております。

関東経済産業局といたしましても、中部経済産業局とともに、さらに地方整備局、それから農政局の皆様を初めとする関係省庁の皆様とも十分な連携を図りつつ、三遠南信地域における新産業の一層の発展に、ますます貢献してまいりたいと思っております。今後とも、本ビジョンの実践を通じて、三遠南信地域から多くの新産業が創出され、地域活性化のモデルとして国内経済を牽引していただけるということを強く期待しております。

最後になりますが、本サミットの開催に当たりまして多大な御尽力をいただきました鈴木会長、佐原副会長、牧野副会長を初め、関係者の皆様方に心から敬意を表しますとともに、三遠南信地域のますますの御発展並びに本日、御参加の皆様方の一層の御活躍を祈念

いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。おめでとうございます。

■ 静岡県副知事 高 秀樹 様



皆様、こんにちは。

本日は、第 22 回三遠南信サミット 2014 in 遠州がこのように盛大に開催されましたことを、心よりお祝いを申し上げます。また、日ごろから静岡県の県政全般に関しまして皆様の御協力、御尽力をいただいていることに、この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

司会の方から御紹介がありましたが、本日知事は、沼津市において、富士山を囲む山梨・静岡・神奈川の 3 知事が集う、山静神サミットに出席しております。代理で恐縮ですが、御挨拶をさせていただきます。

三遠南信地域は、古くから塩の道ということで、文化、あるいは生活文化圏、産業ということで協力してこられた歴史が積み重なっている地域だと存じております。加えて、先ほど中部地方整備局長の八鍬さんから御紹介がありましたけれども、インフラ整備が進んでおりまして、ますますこの地域が日本のど真ん中の出会いの場として発展していくだろうということを期待しております。また、静岡県といたしましては、高度成長期に多少機能重視でまいりましたので、沿岸部の防災・減災、あるいは内陸部の企業誘致等々、少子高齢化に合わせてゆとりある県土にしてい

たいと、今後 10 年かけて県土の改革をやっている最中でございます。

また、先ほど中部経済産業局長からも御紹介がありましたが、航空宇宙産業、あるいは医療産業など、ものづくり一辺倒ではなく、八ヶ岳風に強い産業を少しずつ多峰型に育てていきたいということで、産業成長戦略会議を開催しているところでございます。

固い御挨拶は別として、連携と言いますと、とかく互いに寄り合うようなことを想像しがちであります。連携の内側は各地域が自分の持てる力、強みを発揮して、互いにシナジー効果を出していくということが大事だと思います。地域間競争の時代でございますから、例えがよくないですけれども、昨日開催された国盗り綱引きで遠州地域が 4 年ぶりの勝利をおさめられました。9 月には、足柄峠において、小山町が神奈川県南足柄市に惨敗し、1メートル攻め込まれたところでしたので、1メートル勝ち戻して、ようやく県土が安泰したというような状況でございます。

また、県の境を越えてということと同じように産業の境を越えてということで、一つ御紹介しますと、昨年 6 月に国道 23 号の豊橋東バイパスが供用されまして、浜松市のものでづくりと農業生産日本一の田原市、その両方を見学できるということで韓国から高校生が教育旅行に来てくださいました。農業とものでづくりということで、大須賀会頭が進めておられる農・商・工連携というものがありますが、農業と商工業の境を越えた強い連携で、お互いにシナジー効果を発するということが大事だと思っております。そういう意味で、三遠南信地域は全国の県境を越えた連携、あるいは産業の境を越えた連携、そのモデルになることを大いに期待しております。

この三遠南信地域が、さまざまな分野において東西の大都市圏から人々を引き付けて魅力を発信していく、本日のサミットがそういった実り多きものになりますことを祈念いた

しまして、また御来場の皆様方の御多幸を祈念いたしまして私の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。本日は、おめでとうございました。



<コーディネーター>

愛知大学地域政策学部教授

三遠南信地域連携研究センター長

戸田敏行 氏

<パネリスト>

浜松商工会議所会頭 大須賀正孝 氏

新城市長 穂積亮次 氏

阿智村長 熊谷秀樹 氏

趣旨説明

○司会

この三遠南信の骨格を形成する三遠南信自動車道、それから新東名高速道路など、インフラの整備が進んできています。

そこで、遠州、東三河、そして南信州の官民の代表者がそれぞれの立場から、このインフラの整備をもとに三遠南信地域の可能性をどう見出すのか、これをお聞きするとともに、特にこの三遠南信の中央部であります中山間地域、これをどう生かしていくのか。また、今回、浜松開催でありますので、下流部の県境を越える都市圏をどう形成するのか、今後、県境地帯が目指すべき地域のありようを皆様と共有するために、今回、シンポジウムを開催いたします。

シンポジウムのコーディネーターは、愛知大学地域政策学部教授であり、三遠南信地域連携研究センターのセンター長としても活躍なさっております戸田敏行様をお願いいたします。またパネリストは、皆様から向かって左から、浜松商工会議所会頭の大須賀正孝様、新城市長の穂積亮次様、阿智村長の熊谷秀樹様をお願いいたします。それでは、よろしくをお願いいたします。

コーディネーター／

愛知大学地域政策学部教授

三遠南信地域連携研究センター長

戸田敏行 氏



皆さん、こんにちは。冒頭、鈴木会長からお話ございましたように、三遠南信のインフラが進んできました。その変化をどのように地域の中に、活かしていくのかということ、今日は議論したいと思います。三人のパネラーの方にご発言をいただきます。

論点は大きく、中山間のことと、浜松開催ということもありますので東海道の県境を越える都市圏、この2面を考えてみようということです。資料が皆さんの封筒の中に入っていると思いますが、まず簡単に状況を振り返

ってみます。道路の詳細については、この後の道路分科会ではありますが、まず広域インフラの状況ということです。リニアは随分の地域変化をもたらします。飯田は現在東京4時間が40分、名古屋2時間が20分という大変化ということになります。新東名、東名もあり、東西のインフラが進みます。大須賀会頭からもお話がございましたが、南北方向の三遠南信自動車道、これが部分的に開通してくるので、その効果を考えてみようということです。

それから、静岡と愛知の県境を跨ぐ浜松と豊橋、あるいは浜名湖といますか、この都市圏の議論があります。三遠南信ビジョンの中でも、三遠南信自動車道が核となって、新東名と東名の中のゾーンを新規にいろいろなことが起こるゾーンという位置づけをしておりました。それから三遠都市圏という県境を越える都市帯の意味づけをしていたわけです。三遠南信自動車道ですが、これは局長からお話がございました部分的開通であります。特に、浜松地区へのアクセスということを考えますと、愛知県側への影響は非常に大きいわけです。穂積市長のいらっしゃる鳳来峡から引佐、ここが一挙に開けたという変化がありました。変化の影響ということになります。例えば東栄ですけれども、金紫平という住宅地の開発で、県境を越えた動きを見ながら開発していくということが起こっております。それから、これも東栄で、新城の助産所も関係していますが、医療の動きがかなり広く選ばれるようになりました。私の研究室でも今、東栄病院の患者さんがどこに行くかという調査をしておりますが、かなり県境を越えた選択が出てきています。

それから次に、観光です。開通区間を利用した新たな奥三河行きのバスツアーという動きも出てまいりました。また、さらに長野県側にも波及がありまして、新野の道の駅の利用者が増加しているということです。

また、新東名ですが、引佐から豊田までが平成27年度に開通する。これで新東名が全通します。今ある新東名でも、開通に関連していろいろな振興事業が起こっていますが、全通で、このエリア全体に起こってくるということです。物流は、後ほど大須賀会頭にお伺いしたいですが、新東名が開通することで変化が起きた。全通すれば、当然、変化は大きくなるであろうということです。

また、鳳来峡も新東名につながることで、90分圏が愛知県の都市部、それから静岡県に広がりを持つてくる。これも全通しますともっと大きな広がりを持つてくるということです。

最後に、三遠都市圏ということですが、ほとんど道路が環状につながってきました。現在は県境で切れておりますけれども、一つの都市圏という捉え方をすると百数十万都市圏が東海道の中にある。これが三遠南信自動車道で北につながっていくという見方が出てきます。

それでは早速、パネラーの方にご発言をいただきたいと思います。最初は自己紹介と兼ねながら、インフラ整備や地域への思いをご発言いただきたいと思います。

最初に、三遠南信自動車道によって今、多分一番大きく変わっているのではないかと思います。新城市長の穂積さんからお願いいたします。

パネリスト／新城市 穂積亮次市長



愛知県の新城市長、穂積と申します。よろしくお願いたしたいと思ひます。

今、戸田先生からのご説明がありましたけれども、今日は中山間地と都市部との関係性も視野に入れるということでございますので、私ども新城市は、ちょうど東三河の中間部にありますけれども、今日は北設楽郡の3町村長さんもお見えであります。新城を奥三河と一括して言っておりますが、その地域を踏まえた発言に努めたいと思ひています。

三遠南信自動車道が開通して1年半余たったわけですが、その変化は非常に劇的なものがあると思ひます。特に、北設楽郡の東栄町、豊根村については観光交流の面での大きな変化、来場者、あるいはその範囲の広がりというものが強く見られていることは既にご承知のとおりでございます。また、私ども新城市は、北設楽郡の皆さんから委託を受けて広域消防を展開しておりますけれども、その消防、救急の出動、搬送にとっても三遠南信自動車道というものの持つ効果というものは予測以上のものと受けとめております。さらに私どもの新城市は、1年半後に新東名高速道路の愛知県側が開通をしますと、その最初のインターチェンジに新城インターチェンジができ上がってまいります。さらに、浜松引佐から三ヶ日の現東名へ抜ける渡り線、その先には浜松三ヶ日・豊橋道路というものが国直轄で調査が始まっていく。さらに、新東名の新城インターと豊川インターをつなぐ一宮バイパスの事業も進展をしていくということで、私ども奥三河地域には初めて高速道路の交通網ができ上がっていくということ、しかもそれが現東名、あるいは沿岸部との関係を強化するということと、三遠南信自動車道で飯田の方へ延び、それがリニアの線と直結をしていくこと。

それからもう一つは、現257号というものがございまして、ダム建設を抱えている設楽町の設楽ダムの脇を通して今の豊田市、さら

に恵那、中津川へ抜ける道路でございます。これを今、地域間の高規格道路としてリニア新幹線の新線の岐阜県側の中間駅が、中津川と恵那のちょうど中間あたりにでき上がってまいりますので、そこへ結びつけていく。そういう意味で、リニアで始まる新しい国土軸と、それから新東名と現東名並びに現在の東海道新幹線が支えていた太平洋ベルト地帯、そしてリニアから、さらに日本海側へ抜けて行く道の整備などを考えますと、私どもの奥三河地域にとっては全く新しい時代が到来するものと思っております。もちろん人口減少、過疎化というものは大きな課題でありますけれども、それだけに日本社会全体がいかにも移動の時間を短くし、効率的な社会組織をつくり上げていくのかということに全力を挙げていかなければならない時代だと思ひますので、従来、奥三河地域は東西日本の十字路と言っておりますけれども、今、私は、新城市は、奥三河地域は日本の新しいスクランブル交差点だと、このように申し上げております。いろいろな方面に自由に移動ができ、また集積が可能になる、そういう意味で大変期待をしているところですし、この三遠南信サミットが大きな力になって三遠南信自動車道の整備が着々と進んできたことに、関係の皆さんに心から感謝を申し上げたいと思ひます。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

穂積市長さんからは、奥三河が東西日本のスクランブルエリアになっていくというご発言でした。実際に計算してみますと、奥三河も飯田に行ったほうがリニアで東京に近いという、数字も出ています。

それでは南信州に入りまして、熊谷村長さんお願いします。

パネリスト／阿智村 熊谷秀樹村長



南信州阿智村の熊谷でございます。どうぞ、よろしくお願いしたいと思います。

まさに中山間地の悩みだとか、また今後の期待というものをしっかり今日述べさせていただきますと思ひまして参りました。

阿智村というところ、昼神温泉郷と言ったほうが皆さん御存じかと思ひますけれども、人口が6,700人という大変小さな村でございます。しかし、観光で昼神温泉には年間70万人の皆様がお越しくださいませ、そのうち約7割が中京圏のお客様が来てくださっております。こういった関係で、南信州は他にも市町村がありますけれども、各観光地にはそういった中京圏の皆様、そしてこの三遠南信の皆様が現在のところは一般国道を通過して観光に日帰り、また宿泊で来てくださっています。特に私どもの阿智村は、皆様御存じかと思ひますけれどもハナモモという花で、結構ゴールデンウィーク中は満開になりまして、また今「星」というテーマで、星空が日本一きれいな村ということで、環境省から認定をいただきまして、現在も毎晩1,000人くらいの方にお越しただいて、にぎわっている地域でございます。また、星の関係やハナモモの関係でも年間5万人くらいの方が来てくださっております。そういう中で、観光道路ということが非常にありがたいのが三遠南信だと思ひますし、また後ほど述べさせていただきますが生活のこと、そして災害に強い三遠南信ということでお願いしたいと

思っておりますので、後ほど述べさせていただきますと思ひます。

まさに三遠南信自動車道の早期開通ということは、この中山間地域にとっても本当に長年の悲願でございますし、先ほど来から出ておりますリニア中央新幹線というものが2027年に飯田市にできます。飯田から大阪圏まで、1時間圏内で結ぶ人口が6,400万人ということでございますので、この三遠南信地域の250万人と一緒に縦軸と横軸がうまく連携して結ばばいいかなと、そのように期待をしながら今日は述べさせていただきますと思ひます。どうぞ、よろしくお願いしたいと思います。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

三遠南信自動車道に期待する観光面、生活面、防災面という、3面からのお話がございました。これは、後ほどの中山間の課題というところで具体的にお話をいただきたいと思ひます。

それでは大須賀会頭、続いてお願いいたします。

パネリスト／浜松商工会議所

大須賀正孝会頭



浜松商工会議所の大須賀でございます。この三遠南信が今現在、浜松で特別何か効果があるかという、東栄町まで温泉に入りに行くとか、今のところはそれぐらいですが、こ

れが開通しますと長野まで行くことも、飯田まで行くこともコストが、半分になるといいます。今は、コストで言いますと名古屋へ行く料金と飯田へ行く料金では倍になります。要するに名古屋までと飯田までの料金が一緒になってしまうのです。そういう面の経済効果というものは、また素晴らしいものがありますけれども、今は未だそういう状態ではないですけれども、これが1日も早く開通すると、交通、観光に関しても、色々な面で非常にプラスになっていきます。全部開通した時には飯田から引佐を経由して三ヶ日を回って浜松へ来る場合、色々な効率の問題があります。引佐から浜松へ行く交通の場合、今は道路が狭いということもあります。道路をつくるのが静岡県は多すぎるけれども、不要な道路は無くして必要な道路は造っていくと、色々な面でプラスになる。要するにどっちが先かということ調べて物事を進めていくと非常に良くなっていくと思います。どうぞよろしくお願いします。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございます。

大須賀会頭は物流企業を経営されていて、日本トラック協会副会長をされているということですから、物流のスペシャリストとして、この後にご発言いただけたらと思います。

それでは、続いて内容に入っていきたいと思いますが、まずは中山間の問題ですが、中山間はこういったインフラをどう活用して、これからの展開を図っていくのか。人口減少は非常に厳しい、限界集落といいますか、消滅と最近言われますけれども、そういうことの議論が今大変されている。そういう中で、このインフラをどう活用していくのかということかと思います。二つありまして、一つは働くところ、雇用につながらなければ生活を支えていくことができないということだと思いますが、雇用面、それから生活のさまざま

な活動を支えなければならないという、この2面でご発言いただきたいと思います。それでは最初に雇用につながる具体的な変化、あるいは期待ということで熊谷村長さんからお願いいたします。

阿智村 熊谷秀樹村長

それでは生活面、少子高齢化が大変な問題になっていますが、そのことは後ほどお話しさせていただくとして、やはり雇用ということでお話をさせていただきます。

まさに、この三遠南信自動車道で観光道路として、観光で働く場所があるということの具体例でございますが、実は今日も東名高速道路が集中工事ございまして、2時間位遅れて時間が掛かったしまったということもありました。私は、一般道で来たものですからよかったです。そのようなことも含めて、この三遠南信自動車道は災害だとか観光面でも、ぜひ位置づけは高いということをお願いをしたいと思っております。

やはり、私どもの村も観光客が大勢見えますので、そういった中で山の関係だとか、色々な自然をテーマにした観光戦略というものやっております。そこで働く方もたくさんいらっしゃって、そういった面では大変ありがたいと思っております。本当に多くの方に来ていただいているのですが、逆にこちらの中山間地域、また南信州地域から言いますと、この三遠南信を通過して海辺の方に行くのが、これも夢といいますか、非常に期待の大きいところでございまして、海に憧れるということもありまして、おいしい魚を食べたいという思いもあるとは逆に、また同時にこちらの皆さんも山に行って山の景色を見たり、今なら紅葉を見たりというような、そういったつながりがすごくあるのかなと思っております。

それで、今も浜松の会頭さんから何度もお話があつて、経済効果ということもすごくあ

ると思いますが、実は3年ほど前に経済開発協議会の皆さんで、道の駅のスタンプラリーという形でやってくださいました。10万部ほど刷っていただいて、そこで配っていただいたのですが、そこでどういった方が、どういう動向で道の駅を回るかという結果が出ていたことを私も思い出したのですが、その結果が、ほとんどが50代から70代のご夫婦が、それぞれドライブがてら訪れていただいているという結果が出たようでございます。ですから、これから観光の戦略を立てている業者の皆様だとか私どもは、そういったヒントをもとに、これから三遠南信地域の観光というものをやっていかなくはいけないのかなと思っております。

ある資料の中にも道の駅、例えば阿南町の新野の道の駅にも、鳳来まで三遠南信自動車道が開通した後に結構な人が入ったということも聞いておりますし、いろいろ具体的なヒントにもなると思いますので、これからはどういった経済効果があるかということを含めて、どういう戦略を立てていくかということが非常に大事なかなと思っております。

それともう1点は、飯田線がでございます。飯田線は大事な電車でございますし、観光列車ということも、うまく持っていけば良い電車の路線になると思いますので、ぜひそういったことも道路と併せていけばよろしいかなと、このように思っております。

日本全国、自然を見に行けばいいというような観光もありますが、先ほどから申しておりますように、例えばそばだけを食べてバイクで皆さんに来ていただくとか、山の景色を見たいだけで来てくださる方とか、星を見に来たいという方とか、そういった特化した観光戦略というものは非常に必要ではないかなと思っております。各市町村とも、それぞれ自分の売りのものがあると思います。ぜひ1カ所に行ったら宿泊、また日帰りでもいいので、滞在型観光というものがしっかり連携を取っ

てできるようにと、そのように思っております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

観光面での強化ということで、飯田線をもっと活用できればいいなという感じが私もいたします。午前中に、住民サミットに参加させていただいて、その中でこの観光資源といえますか、民俗芸能の資源をつないでいく提案として「まつり街道」がありました。

静岡の中日新聞には出ていたようですが、県境で新聞は変わりますからほかでは見ていないのです。住民サミットの中では、世界遺産にというようなお話もありました。そういうことも一つの切り口かなと伺いながら、感じておりました。

続いて穂積市長、お願いいたします。

新城市 穂積亮次市長

私どもからは、雇用や産業につながるという面からいきますと、新城奥三河地域では三つの切り口があろうかと思っております。

一つは、内陸工業地帯としての立地状況を、いかに高めていくかという点でございます。二つ目は、地域のほとんどを占めている森林資源の利活用の側面でございます。三つ目は、今、お話に出た観光交流の条件をいかに整備していくか、この三つがこれからの新しい新規雇用の可能性を秘めた分野でございます。

3.11以降、私どもの新城市に立地をしている県の企業庁の工業団地、それからインター周辺に整備をしようとしています我々市の独自の立地計画でございますが、こういうものに対する引き合いが非常に強くなってまいりました。もちろん、リーマンショックとか、その時々を経済条件に合わせて大きく変わるわけですけれども、さらに私どもの新城インターの次の岡崎額田インターというところの近辺には、トヨタ自動車国内最大規模の、

5,000人規模の研究施設を造成するというようなこともございまして、新しい次世代の自動車産業のための裾野、研究開発、あるいは愛知県が今、力を挙げて取り組んでいる航空宇宙産業、さらには医療の産業面での開発、こういうところでの立地条件をいかに高めていくのかということ、この三遠南信並びに新東名高速の相乗効果の中で整備をしていかなければならないと思っています。

それから森林資源でございしますが、これは長年来の懸案でありますけれども、今回、国土交通省の建築基準も変わり、公共建築物への木材利用が進み、さらに高層建築への木材利用もだんだん解禁の方向になっていくと思います。そうしたときに木材の安定供給システムをつくるという点で、三遠南信が一つの大きな力を一体となって発揮できる大きな分野だと思っています。

いずれにしても、下流域の公共施設への木材利用が進んでいく状況の中で、山間地からの木材の搬出とその製品化を、いろいろな意味で高度化していく技術的な開発も含めて、三遠南信という南信州の森林資源、それから天竜地域の森林資源、奥三河の天然資源というものを一くくりとしてパッケージで資源開発ができていく、そういう拠点施設ができていけば、私は、これから中山間地の新しい雇用形態の芽ができてくるのではないかと考えています。

それから観光面におきましては、特に私も新城市ではスポーツツーリズムに力を入れておりまして、日本最大級のラリーの大会となりました新城ラリー、この11月1・2と2日間開催をいたしますけれども、それから自転車競技、来年は非常に大規模なことが計画されていますが、パワートレイルといって山岳を使ったマラソンといいますか、走行競技、ランニング競技でございしますが、こういうものが次々と、我々が提案するだけではなくて民間の方々、あるいはいろいろなスポーツ団

体の皆さんがかかわってこられます。ただ自然公園法ですとかトイレの設置、駐車場の整備など、いわゆる基盤になるインフラ面の整備が課題ですけれども、これも徐々に住民の皆さんが、スポーツによって若い人たちが来るということの効果を実感し始めていく中で、地域との交流、地域の協力体制を汲み上げていけると考えています。

新城市は、観光資源として旧来は長篠・設楽原合戦を中心とする歴史、それから先ほど言った伝統芸能も含めた文化、鳳来寺山や湯谷温泉という観光資源、桜淵公園などがありましたけれども、新城市の観光は、調査をしてみますと三つの大きな特徴があって、中高年が多い、日帰り客が多い、かつリピーター客が多いということが出てきています。ここから新しいマーケットを開発していこうと思えば、やはりインフラの整備、交通の環境、そしてそれに伴うアメニティーの整備は欠かすことはできないと思いますが、これは新城奥三河地域の観光資源を考えると、一つ一つではキャパシティーが小さすぎますので、やはり連携というものが大きなテーマになると思っています。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

穂積市長からは工業、特に新東名との関連、それから森林、観光産業ということでお話をいただきました。特に森林産業ということについて、そろそろ日本でも地域が集結して取り組んでいかねばならないのではないかと印象を持たせていただきました。

次に大須賀会頭、お願いいたします。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

雇用に関しては、逆に言うと東栄町ぐらいから浜松まで来るのに通勤が可能な距離になっています。そういう面で浜松へ通勤で来るということは、上から下へ下がってくるとい

うこともありますけれども、この道路ができて浜松が特別に雇用を生み出すということでも、本当に上の交通の便が良くなって、上から下へ働きに来ていただくというような環境が整えば、雇用は生み出されるそういう状況だと思います。

観光に関しては、長野まで行く途中に良い景色が色々あります。あと浜松の観光をきちんとしなければいけないということを思っていますし、浜松も非常にいいところがあります。今、掛川から新所原まで通っている鉄道も、時間的に人などほとんど乗っていないため赤字になるのは当たり前だと思います。その沿線も観光では小国神社とか、色々な神社仏閣がありますので、駅名を変えて、今の駅名ではなく森の石松なら「石松」という駅にしたりして、色々なことを地域で考えて、ものすごく特徴のある駅にして、そこには何があるよということを駅のマップを作って知らせ、観光を少しでも広げていく。この浜松の地域の観光として、最終的には防潮堤を「市民でつくった防潮堤」ということで、そこを観光していただく。観光地としてはまだまだ色々な方法はあると思います。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

なかなか厳しいご意見もありましたが、もっとアイデアを盛り込んで、石松駅ができる大変おもしろいという気がいたしました。

もう一つ、浜松は工業団地の開発が随分新東名沿いになされて、中山間からの雇用、働くエリアとなっているようにも思うのですが、いかがですか。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

それは今、県も市も内陸フロンティアとして、一生懸命で工業団地をつくっています。工場の設備をするにも緑を、今まで非常に多くとらなければいけないのを工夫して少なく

てもやれるような状態にしますから、工場が出るには非常に出やすいと思います。ですけども、内陸フロンティアばかり言っていますが、では海岸場端を捨てるのかと。海岸も捨てるわけにはいかないし、そこにもまた別の防潮堤もできますし、今度は安全ですので、そういうことで内陸フロンティアだけでなく、浜松全体が、ここはどこでも安全ですよ、大丈夫ですよということで偏らずにものの方向を決めていかないといけないと思います。海岸端、浜松駅から南側の固定資産税を半分にするのであれば、内陸フロンティアを一生懸命やっても良いけれども、そうではありませんので、全体を見て偏らずに物事をしていかないと大変だと思います。

そういうことで、まず1カ所が良くて、片方だけが良いということではなく、全体のバランスを見ながら物事をしていくと非常にいい結果が出ると思います。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

雇用面で、どのように雇用を促進していく、働く場をつくっていくかということでご発言をいただきました。

もう1点、生活面として、中山間の生活をどのようにしていくか、どう支えていくかということが大変重要だと思いますが、熊谷村長さんいかがですか。

阿智村 熊谷秀樹村長

生活という件に関しまして、少し雇用と関係はしてくるのですが、私どもの村の例を挙げますが、現在6,700人の人口でして、簡単に言いますと生まれる子が50人で亡くなる方が100人ということで、毎年50人ずつ減ってっております。逆に、社会現象等で増減もあるものですから、出て行ってしまふ、またIターンで来る方とか、簡単に言いますとそのような数字です。これは中山間地の小

さな村の切実な問題でございまして、全国的にも問題になっている少子高齢化ということは非常に、これからの最大の課題でございませぬ。若い方にどうやったら住んでくれるのかとか、そういったこと色々話をする中で、自分たちが住んでいてよかったなと思えるところにしたいとか、働く場所ということが切実な問題になっております。

その中で、そういった魅力づくりというのは、これから三遠南信自動車道ができて、それぞれの地域で頑張っってやっていかなければいけないのですが、Iターンということも非常に大切だと思っておりますので、簡単に言いますと私どもの人口6,700人の村で毎年、約25組、50人くらいの方がIターンで来てくださっています。ほとんどが中京圏の方、そして都内の方とか、全国からも来てくださっておりますが、大体50人のうち三遠南信からは、去年のデータでいくと1人の方が来ていただいたということになっております。そういった方の多くは、こういった中山間地域で農業をやりたいために来ました。また、伝統文化を見たいから来ましたとか、林業をやりたいので来たとか、そういった目的があって来た方とか、都会の生活で定年を過ぎてリタイアされた方がお見えになるとか、そういった方々がほとんどかと思っております。

南信州地域は定住自立圏構想ということで提携を結んで、どうやったらこの地域に住んでいただけるかということも一緒になって考えながらやっておりますが、またそういった方々がどうやって来てくれるかということも私どもの、今現在で言うと役場の見せどころで、相談体制がしっかりしているかということがすごく大事だと思っております。また、その中でも、例えば別荘地もあつたりしますので、週末だけ来て田舎で暮らしてみたい、過ごしてみたいという方もいらっしゃるものですから、これからはそういった農業体験をするとか、林業の体験をするというような田

舎の生活ということでも、今、徐々に取り組んでおります。

一つ、20年前くらいから私ども阿智村に名古屋市のある区の方がずっと、二、三十人くらいで週末に来て畑を借りて耕していただいて、そして地元の方と一緒に食事をとったりして、温泉に入って帰っていただくというようなプランもつくりながらツアーもやっておりますので、そういったことを考えながら人口を増やしていきたいと思っております。また、その意味で三遠南信自動車道が開通すれば、法定速度で90分でございませぬので、いろいろ交流ができるのではないかとと思っております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

今、Iターンの数を伺つていて50人ということで、そうすると生まれる数と大体同じですね。私どもの研究室でも、南信州のIターンを調査させていただいております。数が多いですね。町村によつても2割を超えているとか、2割5分ということを知りまして、随分思つていた印象と違うなという感じがします。長野県は、もともと移住したい県ナンバーワンということですけども、随分の数があるということを感じます。調査の中で、阿智村の職員さんがいいから移住したという人が何人かおられました。大変なことだと思いますが、そういう生活に密着していくところが重要になってくつと思つた。

続いて穂積市長もそういった面からのご発言もあると思つたますが、よろしくお願ひします。

新城市 穂積亮次市長

新規就労ということについて言えば、私どもでも農業や林業では圧倒的に新規就労者が増大をしております。地域の一番元気な農業者は、やはり外から来た若い人たちが新しく

始めたこと、そしてそれに対する受け入れ体制が整備されればされほど、その定着が進んでいくということで、このアピールはぜひとも全地域挙げてやっていきたいと思ひますし、信州はブランドの名前が大きいので、それを学びながら何とか追いついていきたいと思ひます。

それから生活の点では、最初のところで私ども広域消防をやっていると言ひましたが、医療の問題について少し触れさせていただきたいと思ひます。

そろそろ医療圏という考え方の大きな修正や再編が必要になっている時代だと思ひますけれども、愛知県では東三河の北部医療圏と南部医療圏という区分けをしておりますが、人口が圧倒的に違ひまして、南部医療圏というのは豊橋、豊川を含んだ約60万強の人口の方々がおられます。私どもの北部医療圏は6万程度でございます。10分の1程度の中で医療圏というものは、その中で二次医療が自己完結するということが基本の建前でありまして、非常に厳しい状態に置かれています。そして、私どもでは基幹病院が新城市民病院と国保の東栄病院というものがございましてけれども、そのほかに診療所が数軒、そして民間の昔からの開業医の方々がおられる。ところが、この民間の開業医の方が押しなべて高齢化をしてくるという中で、遠州の佐久間や信州の阿南病院との行き来というものも非常に強うございまして。県境を越えた医療システムというものをどう構築していくのか、これからの大きな課題かと思ひます。過疎地医療という言葉がありますけれども、過疎地の医療というものも、戦後の経済成長をしていく、復興・成長していくときの過疎地医療と、現代の過疎地医療ではまるで意味が変わってきていまして、昔は、衛生状態も含めていかに都会に追いついていくか、その中で医療者の皆さんは子供たちの未来を考えて、その地に骨を埋めるということに生きがいを持ちなが

ら、はだしの医者をやっておられた方もおみえと思ひますが、今の過疎地は、生活条件そのものは都会とそんなに変わらないけれども、ひとり暮らしのお年寄りがふえ、子供の数が少なくなり、地域が縮小していくということを目の前にしながら、医療者そのもののスキルアップや家族の維持をしなければならないということでございますので、ある一地点だけを捉えて、そこにいなさいというのはかなり無理が出てきていると思ひます。

そういう意味では、ある程度、広域の連携システムをつくり、そこに愛知県、静岡県、長野県の県レベルのパワーに入っただいで、一定の身分保証をしながら、ローテーションを組みながらスキルアップができるような仕組みを若手の医師に提供していかないと、地域の医療というものは維持できないと思ひます。これは、私ども新城市民病院が非常に厳しい時代を過ぎてきたときの大きな教訓であります。都市部では、病院を中心にしてまちができていくような時代ですけれども、山間地では医療機関の再編というものが、イコール集落の維持再編に直結をしていく深刻な課題でありますので、より広い視野から県境を越えた医療圏、医療の総合協力という体制が急がれるのではないかなと。そのためにも、この三遠南信自動車道の効果、さらに飯田線も含めてですけれども、その交通ネットワークの整備を、お互いに相乗効果が上がるように協力し合っしていきたいと思ひております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

冒頭の説明のときに少し私も補足させていただきましたが、東栄病院の調査をやっております、東栄病院は町営の病院、それから静岡県は浜松市の佐久間病院という市営の病院、それから南信州の阿南は長野県立病院ということになります、この医療圏も違っ

います。それが連動することができる、穂積市長がおっしゃったように一つのこれはモデルであるし、県境を越えた生活の支え方になるのではないかと思います。たまたま、3つの病院が全部飯田線の駅横につながっておりますから、駅横の医療圏ということが言えるかもしれません。それでは、続いて大須賀会頭お願いいたします。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

浜松の中は、私が今こうやって生活をしている中で、今のところは非常に生活しやすい状態だなということをつくづく思っていますけれども、浜松の駅前商店街はちょっと寂しいな、ということは非常に感じます。

そういう中で今、スマートインターにより東名から簡単に出られるようになり、後二つ出来る予定です。

今、市内では、外周工事をしていてほとんど開通していますので、信号無しでぐるっと回る道路があれば非常に良いと思います。浜松の中はこのようになっています。

色々な交通もそうで、新幹線は、今はひかりが一時間に一本しか停まらないし、後はこだまだけ。のぞみは1時間に十何本あっても浜松には一切停まらない。これもリニアが通ればひかりも停まると思いますけれども、それまではちょっと難しいと思います。そうしていくと、まず環境がいろいろ整備され、三遠南信自動車道も全部完成しますと長野とか浜松、愛知県も非常に便利になって良いです。それ以上に日本海まで抜けると新潟が非常に近くなる。旅行にしても産業にしても非常に良くなる。浜松の中の道路整備もしていかなないと、このままでいくと色々な面で不具合が出るかなと感じます。浜松の雇用もちょっと空洞化になりかかっていますけれども、ここでもう一回元気になって工場も頑張っていく、そういうような状態になっていくと思います。浜松はそういう面では、今から一生懸命夢を

持って進むといいと思います。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

以前、大須賀会頭にお目にかかったときにも、新潟から線が延びるのだと聞かせていただきました。これは、物流を実際におやりになっている立場からの見方ですね。物流の繋がり、雇用の繋がり、そういう動きができてくると、地域の生活全体を支えていくことができる。さらに浜松との近接が高まってくると効果が大きいというご指摘であったかと思えます。

以上、中山間の雇用、それから生活面ということ、広く捉えていただきました。

それでは次に、もう1点の課題であります三遠の都市圏、県境を越えて下流をどう結ぶか、ということでご発言をいただきたいと思えます。今度は大須賀会頭からお願いをしたいと思います。よろしいでしょうか、お願いします。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

私は、この三遠南信の高速道路が出来るということは、いつも思っていますが、長野の人たちも、浜松でも諏訪湖から流れてくる天竜川の水を一生懸命で飲んでいる、色々なことで長野の人と親睦がある。私は今まで本当に遠い長野だと思っていました。今度は隣の長野ということ、非常に感じまして、仕事も観光も遊びに行くにもそうで、今までは遠いから行くには大変、商売するには大変だ、今までは情報があっても遠くて無理だという話でしたが、今度は情報の面でも非常に近くなります。

くどいようですがけれども、この三遠南信道路は何を置いても1日も早く完成するべきであると。先程も、結構年数がかかる話をしていきますけれども、私もそんなに生きていませんし、本当に1日も早く完成していただかな

いと、この3県が良い結果にならないと思いますので、一生懸命ぜひ頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございます。

これが三遠の環状自動車道のような形で結ばれていくとすると、いかがでしょうか。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

今まで物流ということを考えて、実際に飯田まで直線距離は近くても、名古屋へ行って行った方が近いとか、富士を回って行った方が近いとか、そういう理由で結局どうしても、三遠南信道が外されてきました。

物流という面で三遠南信道が開通することになると、私は、企業にとってコストダウンになり、運賃が下がれば、本当に競争力でどこにでも勝てるし、この長野と浜松の間は、非常にそういう面ではものすごく大きなメリットが出ると思ひます。

その途中にも非常に良い町があるから、この町を上手く育てて観光地にしながら、色々な経済状況を見ながら進めていくと良いと思ひます。

私はこの三遠南信道路ではない新東名をなぜ先に造ったのかと。三遠南信道を先に造った方が、私は本当に経済が良くなりものすごく相乗効果があると思ひます。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございます。

力強いご発言をいただき、ありがとうございました。それでは穂積市長、いかがでしょうか。

新城市 穂積亮次市長

私どもの新城市という、あるいは奥三河という観点から見れば、先ほど最初の絵の中に出てきた環状ということ、回るということは

非常に魅力的な構想だと思ひております。先ほどスクランブル交差点というような言い方をしましたけれども、これはいかに都市間、あるいは中山間と都市間の関係性を変えていくかという課題だと思ひます。先ほど、森林資源の活用の問題を申し上げましたけれども、この間の東日本大震災以降の資材不足や労働力不足、それから名古屋でリニア関連の建設といひますか、開発ラッシュが続いていひますので、あちらこちらで入札不調というものが公共事業関連でも起こってきていひます。それで、国土交通省も含めて新しい発注や入札の仕方というものの研究を始めておられると思ひます。従来のようなものとはまた違った、基本設計段階から施工者を決めてしまうようなやり方も含めてなっています。そうしますと、ある程度、中期的な計画性を持った公共事業の発注や施工というものがかぶさってくる。

そしてもう一つは、森林、木材の場合は国内に資源がないわけではないけれども、安定的な供給力がないということや、それから木材の性質上、建設工事の工期との関係の中でぴったりマッチングしたような発注、受給体制ができないというきらいがございました。そこから今、大きく転換をし始めようとしていひて、ある程度、公共団体側が木材を山間地の側が計画的に確保し、そして下流域の木材建築、公共建築の工期に合わせて、それを原材料として支給をしていくような仕組みづくり、こういうものを私ども真剣に今、研究をしているところでありますけれども、要は何を申し上げたいかといひますと、その建設事業の問題ではなくて、自治体間の関係、あるいはさまざまな事業の契約や規制の仕方というものを、この中で大きく変えていけるような仕組みを、独創的なものをつくっていくことに要があるのではないかと思ひます。時間、距離が近づくだけではなくて、その中で経済を回していくことの利点がはっきりわかるよ

うな仕組みづくりを、我々だけでなく全体で知恵を絞っていかなければならないし、その知恵の絞り方の中に先ほど描いていただいた三遠都市圏というものが本当に生きてきて、さらに中山間地の経済の活性化にも刺激が与えられていくと思いますので、そういう点でいろいろ政策、あるいは行政施策のあり方の検討も SENA の場面で積極的にといたしますか、能動的にやっていただきたいなとも思っております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

都市圏は空間的なものだけではなくて、それを形づくっている仕組み、行政の仕組みとか、あるいは物流の仕組みといったものを、その中で変革させていくことができるというご指摘をいただいたと思います。

最後になりますが熊谷村長さん、お願いします。

阿智村 熊谷秀樹村長

私からは、災害に対して非常に三遠南信自動車道は重要だということを申し上げたいと思います。御存じのように御嶽山が噴火いたしました。また、南木曾町でも土砂災害等ありまして、本当にいつ何が起きるかわからないのが今の日本の現状でございます。そういう時に、この三遠南信自動車道は日本の縦軸を結ぶ道として、また災害道路としても非常に大切ではないかと、そのように思っております。もちろん、東海地震が起きた時に、新幹線がとまった時のためにリニア中央新幹線も作っているわけございまして、そういうことで東名高速道路がストップしてしまった時の縦道として、三遠南信自動車道のありがたさというものは恐らく痛感されるのではないかと、そういう観点から 1 日も早い早期開通を望みたいと思っております。

先ほど来からも出ておりますように、医療

という面からも非常に大切ですので、私どもが生活をしていて安心して安全な道路状況というのは非常に大切だと思いますし、災害も含めまして、これは塩の道とも言われた道でございますし、文化の交流の道でもあり、生活の交流の道でもあるし、そこができれば若者も交流して婚活、結婚にもつながるのではないかと、そのように思っております。その中でも、やはり最大の難所は青崩峠ですので、峠がありますと、なかなか人間も越えたくても越えられない壁もございまして、着工も始まっておりますので、ぜひ青崩峠が 1 日も早い開通をしてうまくいけばいいかと思いません。

先日も綱引きが行われた場所でもありますし、そういう中で青崩峠の 1 日も早い開通を望みたいと思います。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

時間が参りました。中山間の問題、雇用と生活、それから下流の三遠都市帯ということで、そこにも話を進めていただきました。

それでは最後に一言ずつ、では何をすべきかということ、一番これが気になっているということを熊谷村長、穂積市長、それから大須賀会頭の順で一言いただきたいと思えます。

阿智村長 熊谷秀樹村長

先ほども雇用の面、そして災害だとか生活の面でもお話をさせていただきましたが、やはり何といたしても三遠南信自動車道の起点と終点、終点と起点が結んでこそ初めて道の効果というものが発揮されると思いますので、1 日も早く開通するように、それには私どもの運動とか、住んでいる我々の機運を高めるということが非常に大切だと思いますので、このサミットの重要性というものはあるのかなと、そのように思っております。

先ほど来からも言いましたように、リニア中

央新幹線が13年後にできますので、できると縦軸の道が法定速度90分で結ばれます。浜松の駅、飯田の駅にまん中からからも30分、40分圏内で、自動車で行けるといって大きな効果はあると思いますので、そういったことから日本全国の皆さんがこの三遠南信に注目をして、そして住んでみたいと思わせたり、そして観光に行きたいと思わせたりするような地域に、今から我々が発信していくことが大事だと思いますので、これからSENAの構成も変わるということでございますので、各部会ができて具体的に動き出すということでございますので、ぜひこの第22回の今までの歴史が、うまく今後に生かしていけるような政策を打っていければと、そのように思っております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。続いて穂積市長さん、お願いします。

新城市長 穂積亮次市長

大きな人口減少時代にどう立ち向かっていくのかという日本全体、また地域全体の課題の中で、三遠南信連携という新しい課題に挑戦をしていかなければならないと思っています。その点では、先ほどどなたかお話があったかもしれませんが、自治体間の競争というのが、逆に人口の奪い合いになるような競争のやり方というのは絶対に戒めなければならず、自治体の体力の消耗に帰結するような政策というものは、お互いが損をするだけだと思います。そういう意味では、広域連携体制の中で役割の分担、そしてしっかりとした機能構築をお互いの連携の中で議論をし、資源配分をみんなで分かち合っていくような仕組みを、この広域連携体制の中で構築する必要があるということが1点と、それからもう一つは、国の施策の転換を求めていくということ。特に、東京一極集中化の是正というこ

とが言われておりますが、既に国会での議論も少し始まり、各県やブロックの市長会でもそろそろまた話題となって出ていますが、いわゆる首都移転の問題ですが、これは既に国会において全会一致で決議をされていながら、一旦宙に浮いてしまったわけですが、首都機能移転か首都移転か遷都かいろいろな選択肢はあると思いますけれども、東京オリンピックの後に、その首都移転を計画の中に織り込んでいくような大胆な転換を、国もしていただかなければ地方の努力は実らないと思います。浜名湖の上あたりに首都が来るのか、それでもいいと思いますし、内陸工業地帯、内陸の新城でも結構ですし、あるいは北関東か愛知・中部圏というものが従来の首都移転の構想でありましたけれども、これをもう一度復活させるぐらいの強い声が地方から上がっていかねばならない時代かなど。そういう意味で、三遠南信が一体となって大きな声を上げることはかなりのインパクトもあると思いますので、ぜひご検討をいただきたいと思っております。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。それでは大須賀会頭、お願いします。

浜松商工会議所 大須賀正孝会頭

私は、この三遠南信自動車道は1日も早く開通して欲しいし、開通して初めて全部の効果が出るし、3分の1ならそれだけの効果になると思います。

これに関しては長野県、愛知県、静岡県全員が一緒になって全員参加で真剣になって取り組んで一生懸命でやれば、私は、国も動くと思いますので、全員で一生懸命でいこうということが私の願いでございます。ぜひ皆さん全員参加でよろしくをお願いします。

コーディネーター／戸田敏行氏

ありがとうございました。

以上で、各パネラーの皆さんのご発言を終わりとさせていただきます。

まだ未消化の部分は当然ありますが、それはこの後の分科会にご反映をいただければと思います。

インフラが変わってくることをどのように活かしていくのかということですが、連携を、より具体的な形で行動に結びつけていくということだと思いますし、その核として三遠南信自動車道への期待が改めて確認できたように思います。

また、最後の首都機能バックアップの提言など、新しいご提言も出ましたので、この後の分科会にご反映いただければありがたいと思います。

どうもパネラーの皆さん、ありがとうございました。

司会

戸田様、そしてパネリストの皆様に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

それでは、続きまして報告に移ります。

4 全体会 SENA 報告「新 SENA について」

三遠南信地域連携ビジョン推進会議

事務局長 伊藤 哲

SENA 事務局長の伊藤と申します。よろしくお願いたします。

私からは、お時間を 5 分ほど頂戴いたしまして、本年 7 月に移行いたしました新 SENA について、ご紹介をさせていただきます。

平成 20 年 3 月に三遠南信地域連携ビジョンが策定されまして、同年 11 月に私ども SENA が発足をいたしました。平成 24 年 9 月以降、その SENA について、より力強い連携のあり方について検討を重ねてまいりました。そして、平成 25 年 10 月に SENA の体制や機能を強化した新 SENA へ移行することを決定いたしました。そして、本年 7 月 1 日に新 SENA への移行を果たしました。新 SENA では、主に次の三つの方針に基づき、今後、ビジョンを推進してまいります。

一つ目ですが、連携体制の強化。構成員が一丸となって、地域連携ビジョンの推進に取り組んでまいります。二つ目は、事業推進体制の強化。構成員の主体的な参画により、力を合わせ実効的なビジョンの推進を目指します。三つ目が、広域連合等との協力体制の構築。自治体により構成される広域連合等と、将来的に協力体制の構築を目指してまいります。

一つ目の方針、連携体制の強化といたしましては、既存の広域連携組織の統合による一本化と、住民組織等のオブザーバー化を行いました。既存の広域連合組織の統合による一本化でございますが、従来からありました三遠南信地域交流ネットワーク会議、そして三遠南信地域整備連絡会議、この二つの団体を SENA と統合したものでございます。両団体とも、三遠南信地域圏域の情報発信などを行っ

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

てまいりました。成果を積み重ねてまいりましたが、新 SENA に統合することで SENA との事業の重複の解消や、SENA が事業を引き継ぐことで事務の効率化を行いました。住民組織等のオブザーバー化につきましては、新たに市民団体、住民団体であります三遠南信住民ネットワーク協議会、それから中部経済連合会を新 SENA のオブザーバーとして位置づけ、両団体からアドバイスを受けるなどして、SENA とオブザーバーが協力しながら事業を実施できるようにいたしました。

連携体制の強化として、ほかには旧オブザーバー団体の正規構成員化を行いました。SENA において、6 月までオブザーバーでした遠州地域の掛川市、菊川市、御前崎市、牧之原市が正規構成員として参画していただくことになりました。また、南信州の駒ヶ根市、飯島町、中川村、宮田村、飯島町商工会、中川村商工会、宮田村商工会を新たに新 SENA の正規構成員としてお迎えをいたしました。新 SENA となり、合わせて 87 団体が一丸となって地域振興に取り組んでまいります。構成員は、ここに掲げたとおりでございます。東三河地域は 23 団体、遠州地域は 27 団体、南信州地域は 37 団体でございます。

二つ目の方針、事業推進体制の強化といたしましては、事業部会を新たに設置いたします。ビジョンでは、とりわけ重点的に進めるものとして 18 の重点プロジェクトを定めておりますが、その中でも特に構成員の皆様からご意見、ご要望、必要性が高いということでございました三つの重点プロジェクトを推進するため、道路、産業、安全・安心の三つの部会を設置いたします。各部会では構成員の参画のもと、具体的な事業を企画・立案し、実施してまいります。道路部会では平成 26 年度、飯田市が部会長を担います。構成員は 30

団体となります。取り組む事業は、今後、部会で検討を進めてまいります。イメージといたしましては、三遠南信自動車道の高規格幹線道路としての全線にわたる早期整備を働きかける活動として、要望、提言活動や調査などの実施等が想定されます。産業部会は、浜松商工会議所が部会長を担います。構成員は42団体となります。想定される事業といたしましては、ビジネスマッチングイベントの開催等が想定されます。最後の、安全・安心部会でございます。豊橋市が、平成26年度の部会長を担います。構成員は24団体となります。イメージといたしましては、大規模災害時における三遠南信地域の総合応援実施のために必要な調査の実施等が想定されます。

以上、新たな三つの事業部会により、重点プロジェクトの一層の推進に努めてまいります。

最後になりますが、三つ目の先ほど申し上げましたが、自治体間では広域連合と行政間での一層の連携のあり方につきまして、調査に取り組み始めているところでございます。これについても、各団体の意向を踏まえて議論をさらに深めてまいりたいと考えております。私から新 SENA の報告は、以上でございます。ありがとうございました。

5 「道」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

「道」分科会では、「中部圏の中核となる地域基盤の形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	浜松市	市長	鈴木 康友
報告者	国土交通省 浜松河川国道事務所	所長	加藤 史訓
議会	浜松市議会	議長	大見 芳
議会	豊橋市議会	議長	藤原 孝夫
議会	飯田市議会	議長	林 幸次
行政	東栄町	町長	尾林 克時
行政	豊根村	村長	伊藤 実
経済	浜松商工会議所	会頭	大須賀 正孝
経済	奥浜名商工会	会長	手塚 二八郎
経済	天竜商工会	会長	平賀 丈太郎
経済	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
経済	駒ヶ根商工会議所	会頭	山浦 速夫
住民	NPO 法人三遠南信アミ		小粥 康正
住民	祭り街道の会	会長	伊東 直幸

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／浜松市 鈴木市長



それではコーディネーターを務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

本日の進行でございますが、前年度サミットでの分科会の議論の要点と本日の分科会の意見交換のポイントに関する事務局からの説明の後、国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所長の加藤史訓様から、三遠南信自動車道の整備状況についてご報告をいただきます。それを終えた後に意見交換に移ってまいりたいと思います。

それでは、まず事務局から、前年度サミットでの分科会の議論の要点と本日の分科会の意見交換のポイントについて説明をお願いします。

事務局

それでは、前年度の議論について確認させていただきたいと思えます。

昨年 10 月 30 日開催の三遠南信サミット 2013in 南信州のこちら「道」分科会では、「三遠南信自動車道一次道を拓く交通基盤」をテーマに意見交換をいただきました。こちらの意見交換の内容をまとめますと 3 点ございます。

1 点目としまして、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線などの広域的ネットワークの形成により、交流人口の増や産業活性化などが期待されるというものでございました。

2 点目としまして、三遠南信自動車道を救急医療や災害対策などに有効な命をつなぐ道として、早期の全面開通を強く求めるというものでございます。

最後、3 点目ですが、三遠南信地域の行政、企業、住民などが一丸となって、国や県にしっかり要望していくことが重要であるというものでございました。

以上 3 点が、昨年の分科会の概要でございます。

一方で、先ほど全体会でのお話でもありましたように、この 1 年で私たちを取り巻く環境が大きく変化しつつございます。主なものといたしましても、1 点目としましては、国の国土強靱化にかかるインフラ整備等の取り組み、2 点目としまして、いわゆる増田レポートにより注目されました人口減少と都市の消滅可能性、そしてこれに対応する地方創生の取り組み、さらには 3 点目としまして、圏域の境界を越える都市間連携を視野に入れた新たな広域連携制度の創設に関する法改正などがございました。

こうしたことを踏まえまして、本日は取り巻く環境の変化をチャンスとしてとらえ、三遠南信自動車道等の効果を地域全体で実感しながら、分科会の基本方針でございます中部圏の中核となる地域基盤の形成をいかに実現

していくか、加藤所長からのご報告の後に皆様で意見交換をお願いしたいと考えます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。

それでは、三遠南信自動車道の整備状況につきまして、国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所長の加藤史訓様よりご報告をお願いいたします。

■報告

国土交通省中部地方整備局

浜松河川国道事務所 加藤所長

浜松河川国道事務所の所長をしております加藤でございます。平素より三遠南信自動車道を初めとしまして国土交通行政全般にわたりご支援賜りまして、誠にありがとうございます。

本日は、三遠南信自動車道の整備状況につきまして説明をさせていただきます。

本日報告させていただく内容は、この 3 点でございます。1 点目は、この三遠南信自動車道の概要でございます。そして 2 点目が、整備状況でございます。3 点目は、現在開通している部分の整備効果のご報告でございます。

まず概要についてご紹介させていただきます。

こちらの右側に地図がついておりますが、三遠南信自動車道、一般国道 474 号は、長野県の飯田市山本から静岡県浜松市北区引佐町に至る延長約 100 キロメートルの高規格幹線道路でございます。この道路は、北では中央道、南では新東名と連絡をいたします。地域間の連携強化や奥三河、遠州、南信州地域の秩序ある開発発展に大きく寄与する重要な路線でございます。

この地図の中では、黒線の部分が開通済みの区間、そして赤線の部分が事業中の区間、そしてこの丸で示されている部分が未事業化の区間をお示しさせていただいております。

この後、起点となります飯田から進捗状況をご紹介しますので、ご紹介します。

まず、飯橋道路の状況でございます。飯橋道路は、長野県飯田市山本から喬木村氏乗までの延長 22.1 キロメートルの道路になります。このうちの飯田山本インターから天龍峡インターの間、延長 7.2 キロメートルにつきましては平成 20 年に開通しております。現在、天龍峡インターから喬木インターまでの 14.9 キロメートルが事業中となっております。さらにこのうちの龍江インターから飯田東インターの間、こちらが 29 年度に開通する予定となっております。この部分の写真が、この右下の写真になります。

続きまして、青崩峠道路の整備状況でございます。青崩峠道路は、飯田市南信濃八重河内から静岡県浜松市天竜区水窪町奥領家までの延長 5.9 キロメートルの道路となります。この区間につきましては、平成 26 年 3 月 8 日に起工式が行われました。現在トンネル調査坑の工事に着手をしているところでございまして、静岡県側でございますが、8 月より調査坑のトンネル掘削を行っております。この右下の写真がその調査坑の写真となります。

この区間までは飯田国道事務所が事業を担当しておりますが、このあと浜松河川国道事務所が担当している区間について紹介させていただきます。

続きまして、こちらは佐久間道路の佐久間インター周辺の整備状況になります。佐久間道路は、北から浜松市天竜区佐久間町川合から東栄町三輪までの延長 6.9 キロメートルの道路となります。右上は、インター周辺での橋梁工事を行っている部分でございます。右下の写真、こちらになります。佐久間インター予定地での盛土の状況となります。

続きまして、佐久間インターのお隣、浦川インター周辺の整備状況になります。こちらになります。浦川インターは国道 473 号線に接続いたします。また、この右下の写真で

は川がございまして、この川が大千瀬川と申しますが、この川の奥側、右側にオフランプが設置されまして、この左岸側にオンランプが設置されます。右上の写真は、右岸側の大千瀬川の橋梁工事を行っている状況でございます。この右下の写真は、左岸側から東栄インター側を見たところでございます。今、大千瀬川に仮橋を設置している状況でございます。

続きまして、佐久間道路の東栄インター、こちらになります。周辺の状況になります。東栄インターは、国道 151 号に接続されます。この右上の写真において、この赤い破線の部分に道路が設置される予定でございます。現場では、道路の形がかなり明確になってきている状況でございます。また、右下の写真は、国道 151 号から進入する部分でございます。この奈根川という川がございまして、そこを横断する橋梁が完成してございまして、現在、工事用の進入路として使用されているところでございます。

ただいま紹介させていただきました佐久間道路の佐久間インターから東栄インターにつきましては、平成 30 年度を開通目標として工事を推進しております。

また、この佐久間道路の南側にあたります三遠道路の東栄インターから鳳来峡インターにつきましても、現在、工事と用地買収を推進している状況でございます。

続きまして、現在開通しております鳳来峡インターから浜松いなさジャンクションまでの間の整備効果について、幾つかの観点で見たいと思います。

このスライドは、交通量をお示ししているものでございます。この区間は、平成 24 年、2 年前の 3 月 4 日に鳳来峡インターから浜松いなさ北インターの間が開通して、その翌月の新東名の開通と合わせて、新東名との間の接続する部分が開通している状況でございます。それ以降の 1 日当たりの交通量を月

ごとの平均値でお示ししているものが、この棒グラフとなっております。青い棒が平日の交通量、オレンジの棒は休日の交通量となります。これを見ていただきますと、平均的には、平日では1日当たり1,700台、休日では3,100台で推移している状況でございます。

また、このオレンジの棒をよく見ていただきますと、5月、8月、11月、そういった月の休日の交通量が多く出ております。5月はゴールデンウィーク、8月はお盆、11月は紅葉シーズンでございます。こういった期間に沿線地域の観光振興に寄与していると考えられます。

また、そういった交通量の増加による効果でございますが、まずは観光交流の観点でございます。愛知県東栄町にはとうえい温泉がございます。このとうえい温泉での入浴者数をこちらのグラフではオレンジの棒で、また年間の売上高を平成23年度の売り上げを100とした場合の変化率というかたちで青い線でお示ししておりますけれども、三遠南信自動車道の開通以降、売り上げ、入浴者数とも増加傾向にあるのが見ていただけるかと思えます。また、とうえい温泉では、開通に伴う入浴者数の増加を契機に、温浴施設のリニューアルを実施されておりますので、そういった相乗効果による地域活性化が促進されている状況と考えられます。

また、観光交流の観点でもう1つの事例でございますが、愛知県の豊根村の茶臼山高原で開催される芝桜まつりの来場者数についても整理させていただいております。こちらがそのグラフでございますが、平成23年から26年を比べてみますと、来場者数が増加傾向にあるのがおわかりになるかと思えます。例年多くの来場者数でにぎわっているところですが、三遠南信自動車道の開通後にさらに増加傾向にあると、そういった状況でございます。

次に、医療福祉の観点で効果をお示した

ものがこちらでございます。こちらは、東栄町の東栄病院から二次救急医療施設である豊川や豊橋への病院、あるいは三次救急医療施設である浜松医大病院への移動時間、所要時間を整理したものでございます。開通前におきましては、東栄病院から豊川あるいは豊橋、浜松に1時間程度の時間がかかっておりますけれども、その時間がこの鳳来峡インターまでの開通によりまして、豊川・豊橋方面であれば10分程度、浜松医大病院ですと17分間短縮するような効果が出ております。

また、三遠南信自動車道は高規格道路ということもございまして、走行性自体が向上しているということもございまして、搬送される患者さんの負担軽減にもつながっているというご意見をいただいているところでございます。

次の観点でございますが、産業の観点でございます。

こちらは、東栄町にある企業におけるものを整理したものでございますが、こちらの工場から湖西市や磐田市等の太平洋岸の企業と取り引きが行われている中で、所要時間や走行性といったところに課題を抱えていると伺っております。例えば、11トン車で湖西方面へ運ぶ場合、開通前の状況ですと荷づくり4時間、走行時間が2時間15分、余裕時間を1時間みて、合計で7時間15分みなければいけない状況だったものが、開通後になりますと、走行時間が短縮するのはもちろんのこと、荷崩れの心配が減るということで梱包にかかる時間も削減できるという効果から、荷づくりの時間も減少しているということもございまして、全体の予想時間が減少する効果が見られております。こういった面では、輸送の大幅な効率化に貢献しているものと考えております。

最後に、生活面での効果をまとめたものがこちらのもになります。この鳳来峡インターと浜松いなさ北インターの間にあります渋

川寺野インターの近くでございますけれども、こちらは渋川の寺野地区でございます。こちらは、三遠南信自動車道の開通後に住民の方の約9割が三遠南信自動車道を利用されておまして、買い物や通勤などの日常生活の道路となっているという状況でございます。

また、この寺野地区の住民の方を対象としたアンケートで把握されたデータでございますけれども、開通後に感じた効果としてどのようなものがあるかといったところでございますが、上の3つにありますような、走りやすくなったとか、生活が便利になったとか、あるいは所要時間が短縮された、こういった効果とまた別に、急病の際、病院までの時間が短縮され、安心感が向上したとか、あるいは災害に強い道路ができ、不安が解消、減少した、こういったような緊急時の安心感が向上するような効果が、こういう声をいただいております。そういった面においては、沿線住民の安心で快適な生活環境づくりに貢献していると考えております。

以上のようなかたちで三遠南信自動車道、今、すべての区間開通に向けて鋭意進めているところでございます。ぜひ引き続きご支援のほどよろしくごお願い申し上げて、報告を終わらせていただきます。



■意見交換

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

加藤所長様、ありがとうございます。
今、報告がございましたが、今までの報告

に対しましてご質問等ございましたらお願いいたします。よろしいですか。

それでは意見交換に移らせていただきます。時間が限られておりますので、ご発言につきましてはお一人様5分程度でお願いをいたします。

今、三遠南信自動車道の整備状況につきまして、加藤所長からご報告をいただきましたが、24年3月の鳳来峡インターから浜松いなさ北ジャンクションまでの供用開始によりまして、今、加藤様からもご報告がありましたけれども、今、さまざまな効果があらわれてきているということでございます。

そこで、こうした交通基盤整備による効果の具体的内容をご紹介いただくとともに、今後整備が予定されている地域の皆様におきましては、どのような効果を期待するのか、まずはそうしたポイントでご意見をいただきたいと思っております。

まずは7名の方から順次ご発言をいただきまして、その後、ご意見がある場合は、挙手にてご発言をいただくことにしたいと思います。

それでは、まずお1人目といたしまして、浜松市議会議長の犬見芳様からお願いいたします。

浜松市議会 犬見議長

よく言われるわけですがけれども、日本も人口減少、また急激な高齢化ということで、一方では東京への一極集中が進んでいる。こうした中で今、安倍政権が地方創生ということの一つの大きな旗印にしているわけで、我々地方の人間といたしましても追い風だとも思うわけですが、本日サミットの冒頭、鈴木康友浜松市長も言われましたとおり、増田レポートという衝撃的な報道もございました。

そうしたものをあわせて考えてみますと、今後、地方といえでもやはり自己研さん、自

助努力というものをしっかりやったところが生き残っていくと。何もせずに座していたところは消滅していくとも思うわけで、この三遠南信地域全体といたしましても、ハード・ソフト両面で連携を強化していくということがやはり求められているのではないかと思います。

先ほど加藤所長からもいろいろとご説明いただきまして、部分供用でありますけれども、三遠南信自動車道も部分的に供用開始している中で非常に効果が大きいと私も思っております。産業や観光交流、また医療というようなところでの効果が出ているなと思っております。ですから、全線開通ということを早く求めていきたいとも思います。

具体的に申し上げますと、数字にはあらわれないわけですが、さっきもちょっと出ましたけれども、二次救、三次救への患者の搬送というような中で、瀕死の状態で救急車で運ばれるわけで、あの地域、カーブや上り、下りと非常に道が悪いわけで、そうした中でこうした三遠南信道というようなもので患者の負担がものすごく少なくなっているのではないかなとも思いますし、これまで我々が経験してきた災害に対しても、災害に強い幹線道路というものが、孤立集落、そうした問題も解消していくのではないかなとも思っております。

そもそもこの三遠南信地域の連携というのは、トライアングル構想というところから発しているのではないかなとも思うわけです。三角形がそれぞれ交流、連携を図って強化していくということでございますけれども、その中身であるところは、広大な中山間地域ということであり、この地域の振興をどういうふうに行っていくかというのも、この三遠南信地域の大きな課題でもあると思っております。

もちろん三遠南信自動車道の整備促進を進めていくということも大事でございますけれ

ども、それと同時にそれにつながるアクセス道路の整備ということもしっかりとやっていかななくてはならないのではないかなとも思いますし、いよいよ新東名の愛知県側供用開始というものも控える中で、我々中山間地も含め、三遠南信地域が受け入れ態勢というものもしっかりつくって、次の時代というものに備えていかななくてはならないと思います。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。

大見議長は、ご存じのとおり佐久間町のご出身でございますので、活動の舞台もそこでございますので、特に三遠南信の部分供用にしろ、供用開始による効果は肌身で感じていただいているのではないかなと。佐久間道路まで完成しますと、大変、さらにすばらしい効果が期待できるということだろうと思います。

さて、続きまして、豊橋市議会の議長の藤原孝夫様からご意見をいただきたいと思えます。

豊橋市議会 藤原議長

まず交通基盤の整備状況ということでございます。隣に浜松市さん、そして飯田市さんの議長さんがおいでになりますけれども、高速道路のインターチェンジがないというのは、私ども豊橋でございます。全国でも38万人都市になりますと、実は大体高速道路のインターチェンジがあるわけでございますが、豊橋にはそれがありません。そうすると、今、私どもの産業の一番中心であります三河港がございませぬけれども、そこと高速道路とのアクセスが非常に悪いということで、大変大きな問題意識がございます。

そこで、三遠南信地域連携ビジョンの重点プロジェクトとして幾つか記載されております。1つ目は、国道23号名豊道路でございます。豊橋・浜松圏と西三河・名古屋圏とを結ぶものでございます。一昨年の10月には豊橋

なりましたように、浜松三ヶ日・豊橋道路はぜひ必要だということでもあります。そのためにこの浜松三ヶ日・豊橋道路の調査実施や三遠南信自動車道の整備を促進するために、今後、行政や経済界が一体となって国への要望を取り組んでいく必要があるかと思っておりますし、毎年でございますけれどもこの3市の議長が国へ三遠南信、浜松三ヶ日道路について陳情をいたしております。今年も既に10月に行ってまいりまして、大臣にお会いして要望をしてまいりました。

また、最近では浜松三ヶ日・豊橋道路につきまして、その当該地であります湖西市さん、豊橋市、それから田原市の3市議会の議長が一体となって取り組んでいこうということで、今、運動を開始いたしておりますが、これから当該組織と連携しつつ、そして既存の促進団体とも連携しながらしっかりと運動を展開していく必要があるかと思っておりますし、行政、産業界、あるいは我々議員が一体となって国への要望を積極的に取り組んでいく必要があると考えております。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございます。主に23号の整備状況等についてご報告いただきましたけれども、私もときどき名豊バイパスを通るものですから、潮見バイパスとつながって大変便利になりました。これは接続すると非常に整備効果が高いなと思えました。

今、問題として指摘されました東西はいいのですけれども縦が、特に豊橋の場合は東名、新東名へのアクセスが悪いということですが、この浜松三ヶ日・豊橋道路ができますと、三河港は一気に東名、新東名、そして三遠南信とつながりますので、これからあれもこれもというのは難しい時代ですけれども、この縦の接続道路だけは非常に整備効果が高いと想定されますので、ぜひみんなでやっつけていかなければいけないと思います。

続きまして、東栄町の町長の尾林克時様にお問い合わせいたします。

東栄町 尾林町長

今まで余り注目をされたことはないのですが、今日のスライドでも、ここでも東栄、東栄と名前を言われまして、私ども、三遠南信自動車道につきましては、大変最も恩恵を受けている町村ではないかなと、本当に心から感謝をいたしております。

少し具体的に申し上げたいと思いますが、皆様方ご承知のとおり今から2年半前に三遠南信自動車道鳳来峡インターからいなさジャンクションとの間と、新東名高速道路が三ヶ日ジャンクションまで開通をいたしまして、それまで私どもの生活圏は、主に151号を基幹といたしました東三河、いわゆる豊川、豊橋、新城と、それから名古屋方面が主にあつたわけでございますが、これが大きく変わりました。

時間的にも豊橋までは約1時間30分掛かり、また名古屋へも2時間30分掛かっておりましたが、この三遠南信道を使うことによりまして、豊橋へは20分ほど短縮ができました。名古屋へは約45分から1時間短縮されたということで、本当にありがたく思っております。また、浜松市へも2時間ほど掛かっておりましたけれども、これも30分短縮されて1時間半で行けるようになったということで、私どもの地域からは、買い物あるいは病院、あるいは電車も、浜松はひかりが1時間ごとにとまりますので、私どもは浜松駅を使うことが多くなっております。

現在では、時間の短縮とともに経済、観光、医療の面でもその選択肢が浜松方面へ大きく広がり、生活がさま変わりしているというのが現状でございます。

2点ほど申し上げますが、三遠南信の整備状況でございますが、先ほどもお話がございましたように⑦のところでございますが、東

栄インターから佐久間インター間の佐久間道路につきましては、佐久間の第一トンネルの掘削工事が着々と進められておりまして、既に436メートル、12.7%が掘り進められております。

また、東栄町につきましても道路整備が進められており、東栄インターにつきましても道路整備が進められており、平成30年には開通の予定となっております。

また、懸案でございました東栄インターから鳳来峡インターの三遠道路、これがおくれていたわけですが、本体工事を行うための仮設橋の整備、あるいは橋脚工事が、あるいは進入道路の工事が進められておりまして、大変目に見えたかたちで今、進捗をいたしております。予算的にもこの3年間で87億というような本当に驚異的予算をつけていただいて、少しおくれて開通をされるのではないかと思います、できれば30年に同時開通ということで、私も強烈にお願いをいたしているところでございます。

また、三遠南信自動車道はほとんどがトンネルでございまして、私ども多くの残土が発生します。東栄町では、昨年度は約100万立米の土量を処分できる処分地を町有地として確保いたしまして、工事の進捗に協力をいたしております。さらに鳳来峡インターに向かっても大量の残土が発生するから、今後も同様に処分場の確保をし、全力を挙げて私どもも対応をしていきたいと思っております。

2番目に整備効果についてですが、これについては⑨で先ほど話がございましたが、東栄町には温泉がございまして、そこに花まつりの湯というとうえい温泉がございまして。先ほど話がございましたように20%売り上げ、あるいは来客者数も増加いたしております。東栄インター開通の折にはさらに増加することなどを期待しているところでございまして、本年度は温泉の横に、天然療養泉という

温泉の効能を生かして湯治あるいは宿泊滞在をしながら健康体験プログラムを提供するとうえい健康の館という施設を1億8,000万円かけて、今リニューアルをいたしております。

また、周辺には廃校になった木造の小学校がございまして、現在、県でのき山学校というところで助成をいただきながら、新たな居住拠点の整備をいたしております。これは志多らという太鼓がやっておりますNPOのてほへに委託しまして、今、その廃校舎にカフェと図書室等々を設置いたしまして憩いの場の提供をするのと同時に、ワークショップ等を開催して、くつろげる場所、あるいは町外の皆様方との交流の拠点として今後整備をしていくということでございますので、よろしく願いいたします。

さらには、東栄町は、チェーンソーアートが発祥の地でございますので、チェーンソーアートの大きな作品を2体ずつ今、製作いたしております。また国の重要無形民俗文化財の花まつり、イベント等についても積極的に取り組んでいきたいと思っております。

来年度末までには、いなさジャンクションから新城インターを通過して豊田東まで新東名高速道路が開通する見込みでありまして、道路部門が整備され、こうした取り組みを進めることによって多くの皆様方が東栄町に訪れていただき、町のことをもっともっと知っていただくことで定住にもつながっていくことを期待いたしております。どうぞよろしくお願いいたします。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございます。先ほどの加藤所長の報告にもございましたけれども、整備効果のシンボルとしてよく引用されるのが東栄町様でございまして、町長はじめ皆様、三遠南信自動車道の整備による効果が一番ご実感いただいている地域ではないかなと思います。どうもありがとうございます。

続きまして、先ほどパネラーとしてもご登場いただきましたけれども、浜松商工会議所会頭の大須賀会頭様からお願いいたします。

浜松商工会議所 大須賀会頭

浜松商工会議所会頭の大須賀でございます。

私は、道路をどんどん造るということは余り賛同していないのです。あれば便利だという位の道路はあまり賛同しない。造れば必ず維持費が掛かります。絶対に必要な道路だと、この道路はすぐに造らなければいけない道路には賛同します。私は、この三遠南信道路というのはもう絶対になくてはならない道路だということを真剣に思っています。これを一日も早く開通していただくために、三遠南信地域経済開発協議会の関係諸団体、協議会のメンバーである 49 の商工会・商工会議所と、その地域の 11 の農業協同組合を構成員として平成 17 年に設立され、皆で 12 月にも政府に陳情に行き、一日も早い開通をお願いするというので、今までの計画以上に、経済の効果がありますよということを一生涯懸命お願いしたいと思います。また、現道活用区間であった水窪北から佐久間間の区間については、昨年、ルート案が定まり、三遠南信自動車道の全線ルートがかたまったことは非常にいいことだと、私も本当に感謝いたします。

そういうことで、私は全員参加で、みんなで行えば、みんな全員がプラスになる道路。これはとんでもなく大きな、計算したら本当にもものすごい金額の経済効果だと思いますので、一生懸命頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。大須賀会頭からは、新東名より先にこっちを整備しなければいけないぐらいの道だと、大変力強いお話をいただいております。また一致団結をして、一日も早い整備促進に努めていきたいと思

います。

続きまして、飯田商工会議所会頭の柴田忠昭様からご発言をお願いします。

飯田商工会議所 柴田会頭

先ほど浜松の河川国道事務所の加藤所長さんより、工事の進捗状況については詳しくお話がありましたが、それと多少ダブりますけれども、今日、実は私ども、飯田からこちらまで参ったわけでありましたが、その辺のところと重ねながら現在の状況についてお話をまずさせていただきたいと思っております。

今年の 2 月に新しい飯田商工会議所の会館ができましたが、その前に、今日、飯田から来ている者十数人が集まりまして出発をいたしましたのが 6 時 15 分でした。飯田インターチェンジから中央自動車道の飯田山本インターチェンジを経由いたしまして、三遠南信自動車道の今、開通をしております飯田山本インターチェンジから天龍峡インターチェンジまでを通過して、そこから一般国道に出ました。三遠南信自動車道というのは、皆様、この三遠南信ロードマップを見ていただくとわかりますが、基本的に国道 152 号ですが、この道は事実上、青崩峠で通行不可能ということになっております。昨日、峠の国盗り綱引き合戦が行われました浜松と飯田市の境は、この通行不能区間で行われているものであります。

話を元に戻しますと、私どもは、天龍峡インターチェンジで降りまして国道 151 号をどんどん下りてきました。愛知県を通り、それから静岡県に入ってきたと、こういうルートであります。何ともおかしな話ではありますが、ロードマップを見ていただくとおわかりいただけると思います。そして鳳来峡インターチェンジで再び三遠南信自動車道に乗りまして、浜松いなさジャンクションを新東名高速道路に抜けて、そしてこの会場に着いたのが 9 時 59 分、まさに 10 時というところでございました。実に 3 時間半を超える長旅であ

りました。そういうのが長野県の状況でありまして、とにかく一日にも早い整備、完成を願っているところであります。

ちょっと話がずれるかもしれませんが、実は今月の24日に長野県から、リニア中央新幹線にかかわる地域の道路についてどこが主体をもって整備していくのかというリニア関連道路整備について発表がありました。飯田市がやるのか、長野県がやるのか、国がやるのか、あるいはそれらが協力しあってやるのかということが発表になったわけでありまして、これについては、いずれにしましても2027年が開通の期限ということで決められているわけでありまして、そこに向かって着実にこれから先13年にわたって工事が進んでいくことだろうと思っているわけでありまして。

一方、その点では、先ほども三遠南信地域経済開発協議会で発言をさせていただきましたが、三遠南信自動車道については、こういう会議があるたびにあと10年、あと10年、開通まではあと10年と掛け声だけではできませんが、10年経っても、20年経ってもいまだに全通ができない。今日現在でも完成の目途が、最終的には何年という目途が立っていないというところについては、具体的などころを一日も早く、佐久間 - 水窪間の道路の直轄が決まったこともあわせて、完成の目途をぜひつけていただきたいなと思っております。

それから、開通した場合の効果のお話でありますけれども、私どもはリニアとあわせて、何かというとりニアだ、三遠南信だということを題目に地域の発展をいろいろ考えながら運動しているのですが、いわゆる伊那谷だけではなくて、経済団体といたしましては、今日、駒ヶ根商工会議所さんもおいでいただいておりますけれども、リニア中央新幹線伊那谷・木曾谷経済活性化協議会というものを立ち上げまして、経済団体としては、三遠南信もリニアも含めて、それぞれの商工会、商工会議所が運動するのではなく、もう1回言い

ますとリニア中央新幹線伊那谷・木曾谷経済活性化協議会で一つになって考えて、この利便性、経済効果を考えていこうじゃないかということで去年の11月に発会をして、現在、年度としますと4月の新年度が新たに第2期目として始まったところであります。

大変大きな経済効果を当然のことながら期待をしているわけでありまして、何といたしましても道路ができるためには、予算確保の要望をしっかりとしていかななくてはいけないというのが一番大事なことだろうと思っております。何度も何度も要望活動を行っておりますが、しかるべき方のお話を聞きますと、この三遠南信自動車道には去年160億円を超える予算がついております。それだけ大きな予算がついているのですが、まずそれは補正予算ではなくて本予算でどこまで取れるかが一番に大事なことで、それから補正予算を上乗せしてもらって一日も早く開通を目指せと言われておりますので、とにかく予算確保を。まもなく来年度予算、概算要求も終わりました、ぼつぼつ数字が出てくるのかなと期待をしているところでありますけれども、この要望活動をしっかりと継続していかななくてはいけないと思っているところであります。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。飯田市さん、南信州では、三遠南信に加えてリニアというのは大変大きな取り組み課題になっているわけですが、この予定でございます2027年に向けて、できれば三遠南信自動車道全線開通となればいいのかなど。懸案だった水窪から佐久間までが、これは国が直轄でやっていただけるということで、非常に不透明だった全線開通へのめどがつかまりましたので、あとは会頭おっしゃるようにしっかりと予算要望して、一日も早く供用開始をめざそうということだろうと思っております。

続きまして駒ヶ根商工会議所会頭の山浦速

夫様からご意見をいただきたいと思います。

駒ヶ根商工会議所 山浦会頭

私からは、駒ヶ根地区の国道 153 号の整備の状況とその効果について説明をさせていただきます。

私どものところは伊南地区といわれる長野県上伊那郡南部地域でございまして、日本全国にある地方都市の同じ共通する悩みの少子高齢化、そして人口減少の進んでいるところでございます。

その中で 153 号の通称伊南バイパス駒ヶ根 - 飯島間でございますが、駒ヶ根市内はほぼ完成がなされているわけでございます。飯島地区も順調に工事を進めていただいております。また駒ヶ根から北の伊那市までの間の生駒アルプスロードにつきましては、路線計画の検討が大詰めにまいっております。また、中央道の駒ヶ岳サービスエリアに駒ヶ根スマートインターが平成 29 年 1 月に開通する予定で今、進んでいるところであります。おかげさまで駒ヶ根地区、5、6 キロの距離のバイパスの完成でございますが、地域に大型店舗が進出するとか、有名専門店が進出してくるとか、また市内から店舗が出てくるとかということもございまして、大変にぎわいを見せております。特に周辺の住宅地の南田区画整理事業をやりまして、大変まちなみのいい住宅地が形成されまして、若い方たちがそこに定住するというような非常にきれいなまちなみができてきております。

国道 153 号とリニアの連結による観光と産業の効果につきましては、名古屋とリニア長野県駅が結ばれますと 20 分間で到着することになっております。平成 39 年の開通でございますが、リニア駅から 153 号を利用する、ないしは中央自動車道にアクセスして駒ヶ岳スマートインターまで来たとしますと、名古屋から 35 分か 40 分ぐらいで駒ヶ根の観

光地に着くわけでございます。セントレアからも全体的には 1 時間 40 分、2 時間以内で駒ヶ根の観光地に到着するというところでございますし、東京、品川からリニア長野県駅までは 40 分と。そのリニア県駅から 153 号、ないしは中央自動車道にアクセスして駒ヶ根スマートインターまでは 15 分でございますから、品川から駒ヶ根までは 1 時間で到着すると基本的にはなるわけでありまして。羽田からも 1 時間 15 分くらい、1 時間 30 分ぐらいで駒ヶ根に来るのではないかと期待をしているところであります。

このことによりまして、私ども駒ヶ根地区の基幹産業であります製造業の主力は精密電子、自動車部品の製造の産業界でございます。三遠地区は自動車産業を中心とした日本を代表する産業立地の場所でございますから、そのところとの取り引きが多いわけでございますので、輸送コストの削減や輸送時間の短縮にもつながってきますし、また今後のビジネスの拡大にも期待が大いにもてるところでございます。

また、大都市からの観光客はもちろんのこと、海外からの観光客の流入も大変多くなってきているのではないかと期待をしております。中央アルプスには東洋一というロープウェイがかけられておりまして、駒ヶ根の観光産業が一層活性化するのではないかと考えているところであります。

特に今、駒ヶ根市では第 4 次構想を発表しております。その中で、今現在 120 万人の観光客の方に来ていただいておりますが、200 万人の観光客に地元に来ていただく、駒ヶ根に来ていただく。そして一人当たり 1 万円のお金を地元で使っていただくというような計画も組みながら観光地づくりもやっております。

特に伊那地区は災害に強いところであります。大きな台風にもあいませんし、津波もございません。地震にも強いところでござい

ますので、大変住みよい場所でございます。これからそういう交通網ができてきますと、都会からの定住の方たちも増えてくるのではないかと思います。伊那谷という言葉がそうなってくると地域と合わないような感じがするので、私な伊那バレーと呼ぶことの方がふさわしいのではないかという気がしております。特に三遠南信自動車道が開通しまして浜松までつながりますと、私どもは静岡の温暖なところ、ミカンの里というのは大変夢があるのです。当然ミカンの里の静岡の方たちも長野県の寒冷地のリンゴがたわわに実った風景というものに大変あこがれてくれると思うのです。そういう意味において、私は大変観光の上でも相乗効果が、三遠南信自動車道ができて全面開通ができれば、すごい効果が出てくると期待をしております。ぜひ早期全面開通をやっていただくために、私はいずれにしても連携を周辺の商工会議所、飯田商工会議所さんはもちろんのこと、伊那市の商工会議所さんとも連携を深めておりますし、周辺の商工会の方々とも連携を深めながら、一層早期開通に向けて一致団結をしながら進めてまいらなければならないと覚悟を決めております。ぜひとも皆様とも協力しあいながら進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。山浦会頭からは、153号線の整備によって地域の開発が大いに進んでいるとのご報告をいただきました。

それでは、続きまして祭り街道の会事務局長の伊東直幸様からご発言をいただきたいと思ひます。

祭り街道の会 伊東事務局長

私たちの地域は、三遠南信道から少し離れた151号の県境のところの地域ですけれども、最近、三遠南信道、新東名が整備して、延長

されてきまして、三遠南信を使った人たちの入込客がすごく増加してきております。おかげさまでそういうことで新野にある道の駅もすごくにぎやかなところになってきたわけですが、そこに至るまで151号、県境のところのわずか2キロという未改良区がありますので、そこはまた冬に大変なときがあるということですので、ぜひそれを解消していただければありがたいと思ひております。

祭り街道が制定されて一応15周年ということで、151号へそういうネーミングをつけて地域の活性化について活動をしてきたわけでありまして、先ほども昼前、住民セッションの中で、住民の皆さんと一緒にこれから祭り街道をどう生かしていったらいいかというようなお話をさせていただきました。三遠南信道がだんだん延びてきて開通し、またそこへいかに私たちの地域がアクセスして皆さんにそこへ来ていただくかということ、これからまた真剣に考えていかなければならないと思ひますし、三遠南信道が開通した暁には、行きは三遠南信道、帰りは151号の祭り街道よと。またその逆をまわってもらおうよと、そんな形で地域に元気が出ていったらいいかなと思ひております。

151号の沿線にはすごい祭り文化の集積地みたいなところで、祭りの宝庫みたいなことをいわれていますし、訪れる人たちがすごくそれを楽しみにしております。また、151号、それぞれの地域と密接な近隣の町村とつながりがあって、その人たちの生活を支える大事な道路ですし、ただ高速の道があいて、地域が通過点になるということではなく、中身の中山間地が潤って力がついてくれば、三遠南信の全体の力にもなるのではないかなと思ひております。現時点では、151号は三遠南信の中軸として大事な路線として活躍をされていますし、またそのもとになる道路から支線がいっぱい延びて、各地域まで血液がいきわたるような地域づくりをしていけたらありが

たいのではないかなと思っております。高速道路があいて通過点になるのではなくて、地域全体が潤えるような道の整備もぜひお願いをしていきたいし、そういう地域であることこそ力強い地域になっていくのではないかなと考えております。よろしく申し上げます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。我々も飯田へ行くときには、今、三遠南信の供用部分と151号を使って飯田へお邪魔していますけれども、これは三遠南信とうまく連携ができることでも地域にとっていいのではないかと。2キロほどまだ未改良部分があるというお話でございましたけれども、こういうのは早く改良工事をしていただければと思います。

さて、今、こうした道路等の交通基盤の整備によりましていろいろこういう効果が出ていますよという具体的な話につきまして、7名の方からご意見をいただきましたけれども、発言をいただかなかった方から、これだけは言っておきたいというようなことがございましたら、挙手によってご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。特によろしいですか。

続きまして、少し論点を変えまして、次は、先ほど事務局からも説明がございました環境の変化をとらえつつ、こうした効果をより高めるために取り組むべき課題です。こうして交通基盤が整備されて、いろいろな効果があるわけですが、それをより高めるために取り組むべき課題につきましてどうしたらいいかということについて、今から5名の方からまずご意見をいただきたいと思っております。

まず、飯田市議会議長の林幸次様からご発言をお願いしたいと思います。

飯田市議会 林議長

これから取り組むべき課題についてでござ

いますが、今後、三遠南信自動車道の整備によりまして、先ほど来出ておりました医療サービスの向上とともに災害に強い地域ネットワークが構築されていく。また、三遠南信地域の災害時の相互応援協定に伴う連携促進が可能となってまいりまして、災害時の安全、あるいは信頼性の強化が期待されるところでございます。

こういった期待される効果が一日も早く発揮されるためにも、ミッシングリンクと呼ばれております未整備区間が存在するこの三遠南信自動車道の早期全線開通が何よりも望まれるところでございます。

私、今日、朝早く飯田をたつてこちらにまいったのですが、行きは高速道路を使おうということで中央道、東海環状、東名を走ってまいりました。ところが岡崎あたりで大渋滞に遭遇しまして、これは間に合わないぞということで急きょ蒲郡インターでおりて国道1号へ出て、来ました。これも間に合わないぞということで、豊橋の駅から東海道線でここまでたどり着いた。飯田市のお隣さんが浜松市さんでございましてけれども、実に4時間近く掛かってしまいましたので、今日も改めてこの三遠南信自動車道の必要性、重要性をしみじみと実感したところでございます。

この三遠南信圏域の市町村議員は、三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会を構成いたしております。この2つの道路の建設の促進のために調査研究、あるいは関係議会の要望活動を28市町村の議員の総意によって行っているところでございます。今年も今月9日には、浜松市、豊橋市、飯田市、私ども3人の議長が代表いたしまして、国土交通省を訪れて、三遠南信自動車道の早期整備促進、あるいは浜松三ヶ日・豊橋道路の早期事業化を要望いたしまして、そのために来年度以降の予算確保の要望を太田国土交通大臣に直接要望してまいったところでございます。

今年の7月からこの SENA が新体制になったことによりまして、南信地域からは駒ヶ根市、飯島町、宮田村、中川村の4市町村、また遠州地域からは4市の合計8つの市町村議会がこの道路協議会に新たに正規構成員に加わっていただいたところでございます。大変広大な面積を有することになったわけですが、この三遠南信地域におきまして産業振興や交流人口を拡大させるための地域間を結ぶ骨格となる三遠南信自動車道の整備がますます重要となってまいります。

さらにこの整備を推進させるためには、SENA を構成いたします地域住民、経済界、そして行政が一丸となって国や県に対して要望を強めていくことが、三遠南信自動車道の早期全線開通、そして浜松三ヶ日・豊橋道路の早期事業化、さらにはリニア中央新幹線の早期開業につながっていくものと考えているところでございます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございます。議会の側から力強いご支援をいただいているというご発言をいただきました。いずれにしましても早期全線開通に向けまして、一致団結をしてやっていかなくてはならないと思います。行政側というのは、往々にしていろいろ温度差があったり、動きにばらばら感があったりするのですが、こういうのを叱咤するためにもぜひ議会の皆様が一丸となってご支援をいただければと思います。ありがとうございます。

続きまして、豊根村村長の伊藤実様からご発言をいただきたいと思います。

豊根村 伊藤村長

今、先ほど7名の皆さんから、この道路に対する思いだとか、期待だとか効果、いろいろなものを聞かせていただきましたけれども、私どもの村も大きな効果が上がっている一つの村でございます。

私どもの村は、ご案内のように三遠南信の話を見せていただきますとちょうど真ん中にありまして、北が長野県と接しておりますし、東が天竜川を境として静岡県と接しております。ただ、そういった中で私ども地域を見ておりますと、この道路へのアクセスというのは151号一本なのです。飯田へ行くにも、浜松に行くにも、豊橋に行くにもこの道一本が主軸の道ということになっております。

私ども、先ほど加藤所長さんからも茶臼山のことを触れていただきましたけれども、観光と交流で村づくりをやっておりまして、今、茶臼山高原には60万人ぐらい来ていただいておりますし、春の芝桜では20万から30万人。分析をいたしますと、この道路が一昨年開いてから、2割ぐらい関東方面が増えたなと思っております。私どももご多聞にもれず大きな効果が上がっておりますし、またこれ以上期待をしているところでございます。

そんな中で、今、効果を高める課題ということですが、私ども、3年前にただ唯一の国道の太和金トンネルが、内部崩落がありまして、半年以上通行止めになりました。それは、私どもにとっては生活だけでなく、医療から福祉から通学からすべてのものが止まったという感じで大変苦勞したわけですが、私どもだけでなく、このことが南信地域の方々にも大きな影響が出たなと思っております。

そういったことを考えますと、やはりいろいろな地域開発、地域振興を図っていくときに三遠南信自動車道、新東名に合わせて、そこに到達するアクセス道路、それも並行して進めていかないと、やはり大きな効果が出てこないのかなと思っております。そのことを地域全体としてとらえていかないといけないのかなと思っております。

先ほど浜松市の街頭さんが言われました。本当に必要な道はしっかりつくっておかないといけない。私はやはり幹線的なもののはし

っかり、災害のことも含めて、そこにアクセスする道路も並行して進めていくことが効果の上がることになると考えております。

そんな中で私どもは、今、観光と交流と言ったわけですが、飯田市まで1時間ぐらいです。浜松の駅までも1時間半ぐらいで行ける。そんな中で私どもは、生活しやすい地域と働く地域が別にあってもいいのかなということで、今、私どもは定住促進をしながら、通える地域づくりもいいたらうということで、都田の工場まで1時間ぐらいで行けるのかなと考えております。まさに東栄のインターができれば、さらに20分くらい近くなる。そんなことで地域のあり方というのは、そういった機能分担をしっかりとみんなで認め合う、かばい合う、支え合う。そういったことで三遠南信地域が素晴らしい地域になることが一番いいことかと思っております。

私どもだけのことを言いますと、やはり地域が変わっていく。このパンフレットにもありますけれども、変わりゆく社会環境の中でタイトルがうたってあるわけですが、こういうことをいち早く察して、やはり受け皿、地域のあり方をしっかりとつくっておかないといけない。そんなことで私どもは、今、道の駅をしっかりと整備をしながら、100万人をめざそうということで、100万人突破アクションプランというのをつくらせていただいております。やったことに足跡が見えていく、そういった地域づくりもやっております。そのためにはやはり地域が一体となった取り組みと、もう一つは道を媒体とした地域連携、そのことがますます強くなっていくことが、地域の発展につながると思っております。

やはり生活道路もしっかり守っていかないといかんなどということをお願いしたいと思っております。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。豊根村さんもか

なり三遠南信自動車道の部分供用によって観光客が増えているとか、いい影響が出ているということでございますが、今、村長からお話がありましたとおり、三遠南信自動車道だけでなく、それに連なるアクセス道路、幹線道路の整備強化、これが地域の皆様のより生活、産業等を高めることにつながるということで、それが大事だというご指摘をいただきました。ありがとうございました。

続きまして、奥浜名湖商工会会長の手塚二郎様からご発言をお願いします。

奥浜名湖商工会 手塚会長

奥浜名湖商工会といっても浜松市でございますが、私のところは、浜松市の中でも豊橋市、また南信地域に全部接しているところですから、この三遠南信が開通することによって、本当に恩恵を受ける、またいろいろ利用しやすい地域だと思っております。

先ほどいろいろな話、飯田の人、豊根村の人でも浜松駅まで行くと言って、浜松駅まで行ってもらっては困るものですから、ぜひともこの奥浜名湖地域というのを忘れないで、私のところへ止まってほしいと思っております。そのためにもいろいろな産業、商工会全体、県全体がそうですが、いろいろな新規の事業とかをやる人にも応援しているものから、近いですので、豊橋、また飯田の方からも若い人にどんどんこちらに来てもらいまして、できれば娘さんでも、旦那さんでも結婚してもらいまして、新しい事業をこの地域で起こしてもらいたいと思っております。

そのためには、私たち商工会自体も全面的に応援する体制はできております。そのためにも我々地域の住民は非常に丸いというか、非常にみんないい人ばかりなので、来れば全面的に応援して、一生懸命やってくれると思うものから、ぜひともこの開通後、また開通の見通しができたということで大いに期待をしております。開通後、またこの奥浜

名地域を忘れないように大いに宣伝したいと思うものですから、また交流のほどをよろしくお願いします。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございます。奥浜名湖地域もちょうど新東名と三遠南信の結節点にありますし、湖北五山なども観光客もふえていますし、竜ヶ岩洞なども観光客がずいぶん増えたということで、いい効果が出ているのではないかなど。地域住民がしっかりと味方になるということでございますので、またよろしく申し上げます。

それでは、続きまして天竜商工会の平賀会長からご発言をお願いします。

天竜商工会 平賀会長

私どもの三遠南信道路、佐久間地区においては、非常に順調に今、工事も進んでいて、本当にありがたいなという思いであります。

また、地域住民の声を味方にする必要があるということで、交通基盤の整備要件について述べたいと思います。

国道 152 号は 1 車線道路であります。また春野町の地すべりや 8 月 16 日の 152 号線の龍山地区のがけ崩れ等、区内には多くの危険箇所があります。道路や橋梁施設等も含め、パトロールの強化や災害予防工事が必要と思います。災害発生時に迂回道路がまだ整備が余りしていないところもありますので、これも進めていただきたいと思います。

また 2 つ目として、整備効果についてでございますが、私たちの道路は北遠住民にとって生活道路であり、2 車線化が急務であります。道路やがけ等の未整備は、災害発生時に命にかかわる問題でもあり、三遠南信道路の整備と並行し、周辺道路及び周辺環境整備が必要でもあります。迂回道路の整備が整っていないと、自然災害や事故発生時には、生活そのものが寸断されてしまいます。

また 3 として、整備効果を高めるために取り組むべき課題につきましては、アセス報告書の調査項目に関連して、周辺の道路整備、橋梁整備、がけ、路肩整備等の整備を行うことが重要と考えられます。生活基盤の安定、観光誘致に向けた安全性の確保等を実現するためにも、周辺環境整備の計画的実施についての検討が必要と思われれます。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。平賀会長からは、骨格となる幹線道路だけではなく、それに連なる生活道路等、あるいは橋梁等の整備が必要だというご発言でございました。

実は佐久間のところには原田橋という、これは老朽化インフラの代名詞になっているような橋がございまして、調べたらワイヤーが切断をされているということで一時通行止めにして、佐久間町の皆さんに大変ご不便をおかけしました。これは佐久間の中の唯一の道で、なかなか迂回路がないものですから非常にご不便をおかけしまして、今は大型車を除き通行可能で、今急ピッチで新しい橋の新橋の整備を進めておりますけれども、そういった具体的な事案がございまして、そうした迂回路も含めた生活道路の整備ということであったのではないかなと思います。大事な視点ではないかと思います。

さて、続きまして NPO 法人三遠南信アミ小粥康正様よりご発言をお願いします。

NPO 法人三遠南信アミ 小粥康正

浜松の人間です。もともと岩登り、ロッククライミングをやっています。愛知県の鳳来町で 30 年来ずっと岩登りをやってきました。旧鳳来町、今の新城市に 20 年以上家を借りて、最近はおぼとかも借りて行き来しながら生活しております。

皆様が今まで言ってきた道の情報とは少し異なる内容かとは思いますが、どうしても

話をさせていただきたいということで、道の分科会で話をさせていただくことになりました。

皆さん全員には渡っていないのですが、1枚、地図の入った資料が置いてあった方がいるかと思いますが、そのことについてお話をさせてください。

三遠南信で実際、主に中山間地域の方だと思いますが、実際生活にかかわっている中で一番関係している、実際に生活に関係している広域でやっている事業は、空を飛んでいるドクターヘリだと思います。どうしても救急で、下の道で間に合わない場合、ドクターヘリが三方原聖隷から飛んできていただいて、何とか一命を取り留めた場面が多々あるとお聞きしております。

運ばれた方は命が助かってとてもいいことだと思います。この前の全体会で新城の穂積市長が言われていた東三河北部医療圏というのがありまして、そこのホームページを5、6年前につくった設楽町の友人と話していたときに、ドクターヘリで三方原聖隷に運ばれる。そうすると命は助かります。ただおじいちゃんが運ばれた。交通手段のないおばあちゃんは どうやって三方原聖隷まで行くかです。旧浜松の方は関係ないのですね。運ばれませんから。新城の方も運ばれることはありません。市民病院が近いので。実際に運ばれて困っているのは北設の方、あと北遠、佐久間、水窪の方、あと南信濃の方です。三方原聖隷に運ばれた場合、どうやって見舞いに行くかです。また、反対に、退院されたとしても通院しなくてははいけない。どうやって通院するかです。

この東三河北部医療圏のホームページをつくった友人が、回ってヒアリングをして、何とかしてあげたいと思うと彼が言っていました。皆さん、最寄りの飯田線の駅まで行きます。三方原聖隷は、三方原台地の北側にあります。北区にあります。しかし飯田線で豊橋

駅まで出て、東海道線に乗って浜松駅まで行き、さらに30分以上バスに乗って、また北に戻って行きます。とても日帰りできない。何とかできないかと彼がずっと言っていました。

私は、その後調べました。実際、全然方法がないわけではありませんが、今はこの方法しかありません。北区の引佐町田沢という場所があり、ここに渋川の方に向かうバスが通過しています。今度反対に新城の市営バスが田沢まで行っています。ここの連絡を合わせれば、ずいぶん早く行けますが、これが全然合っていません。

ドクターヘリを調べてみましたら、聖隷病院の創始者の長谷川保先生が言いだしてから実際に運用されるまで20年以上かかったと聞きます。1999年の4月に浜松救急医学会の研究事業として運用を開始して、2001年10月からに正式にドクターヘリ促進事業として定着したようです。20年以上かかったそうです。長谷川保先生は94年に亡くなられているので、ヘリを飛ぶのを見ずに亡くなりました。

実際、長野、静岡、愛知の3県のドクターヘリを調べると、長野県は佐久と松本、静岡県は浜松とあと伊豆の国市、伊豆の方です。愛知は長久手しかないのです。やっぱり三遠南信の地域で運ばれる場合は、三方原聖隷に運ばれることが多い。

もともと遠鉄バスが長篠まで行っていたが、2004年に採算が合わないということで廃止されています。その後、鳳来町のバスになって、今は新城市営バスになったようです。

実はこの話を5、6年前に聞いてからずっと私も思い悩んでいました。浜松が合併して、浜松市の北区内でも三方原聖隷や浜松医大に行くのに、浜松から南北に走る路線ばかりで、三方原聖隷とか医大に行きにくいということで、北区内のバスは編成されました。しかし、ドクターヘリで運ばれた人たちのことは考慮されていませんでした。

その後、新城は新城市の市営バスなので、相談をもっていきました。ただ設楽線のとの調整が優先順位は高いということで、話は進んでいませんでした。浜松の北区役所に知り合いがいるものですから、相談をもっていったのですが、ああそうなので終わってしまいます。

いろいろやってきたのですが、そういう問題があるよということ、この場でお話をさせていただいて、広域ですることですので、本当に必要であれば浜松と新城で調整していただいて、ぜひそういう方が、その後困らないようになってくれるといいなと思い、今日はお話をさせていただきました。

コーディネーター／浜松市 鈴木市長

ありがとうございました。救急搬送された後の患者さんの、あるいはご家族の足としてご不便があるということで、その解消をというご提言でございました。また、これは、今日は課題として出ささせていただいたということで、研究する必要があると。ただ路線バスというのはなかなか難しいと思います。とてもたくさんの方を運ぶという事業ではないので、今の過疎地有償運送事業とか、そういう特殊な事業も認可をされますので、そういうデマンド運送で対応することしかないかなと、直感的にはそう思いました。また研究してもいいかなと思います。ありがとうございました。

今、5名の方から、こうした交通基盤が整備された後、その効果をより高めるために取り組むべき課題についてご発言をいただきましたけれども、この5名の方以外でも、まだ少々お時間がありますので、ご発言がある方は挙手にてお願いができればと思います。特によろしいですか。

ありがとうございました。今日、「道」部会におきましては、三遠南信自動車道等交通網の整備、これが地域に大変大きな経済波及効

果をもたらしているということ。さらにそれをもっともっと効果を発揮させるためにはどういう課題があるのか、どうしたらいいのかということにつきまして、皆様からさまざまな貴重なご提案、ご意見をいただくことができました。

それでは、以上のご発言をもとに本日の「道」分科会の結論として、次の3点にまとめさせていただきます。

1点目は、三遠南信自動車道等の整備が進み、救急体制の拡充や生活圏の拡大、観光・産業の活性化など、本地域の活性化が徐々に図られつつある。これは現状認識でございます。

2番目、一方で、今なお整備が途上であったり、一部遅延するものがあったりなど、交通基盤の整備における課題は依然として存在する。

3番目、人口減少時代における三遠南信地域のさらなる活性化の基盤づくりとして、三遠南信自動車道を初めとした基幹道路の早期整備をめざし、地域全体が一丸となって国及び県に強く要望する必要があるという3点にまとめさせていただきました。

基本的には、これまでの方針を踏襲するものであらうと思いますが、それをより一層具体化する取り組みとして、今後、こうした基盤整備の促進に向けまして、一層スピードを加速していきたいと思っております。

皆様のご協力によりまして円滑かつ内容の濃い意見交換を行うことができました。ありがとうございました。

以上をもちまして「道」分科会を閉会させていただきます。

6 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

「技」分科会では、「持続発展的な産業集積の形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	光産業創成大学院大学	リエゾンセンター 長	江田 英雄
報告者	浜松市	産業部長	安形 秀幸
行政	湖西市	市長	三上 元
経済	磐田商工会議所	会頭	高木 昭三
経済	浅羽商工会	会長	大石 重樹
経済	菊川市商工会	会長	鈴木 正太郎
経済	御前崎市商工会	会長	阿形 好男
経済	豊橋商工会議所	会頭	吉川 一弘
経済	田原市商工会	会長	河合 利則
経済	新城市商工会	会長	本多 克弘
住民	奥三河自然と歴史にふれあう会	代表	加藤 博俊
住民	一般社団法人南信州ここに	代表理事	木下 利春

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長



皆さん、こんにちは。光産業創成大の江田と申します。どうぞよろしく申し上げます。

今日は、豊橋商工会議所の吉川会頭はじめ、皆様、どうぞよろしく申し上げます。

本日の進行ですが、最初、事務局から前回の議論のおさらいと今回のテーマについてご説明いただこうと思います。次に浜松市産業部の安形秀幸部長から遠州地域のものづくり産業の現状と中小企業支援についてと題してご報告いただこうと思います。その後、意見交換を行いまして、今後推進する事業等につきまして議論していきたいと思っています。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論について、おさらいをしたいと思います。

前年度の議論のまとめということで、前年度、飯田での「技」分科会では参加者により

まして事例報告をもとに議論をされました。

まとめますと、以下の3点となります。

一つ目、「ヒト・モノ・カネ」が集まる魅力的な新産業を積極的に生み出していく必要性がある。経済・社会環境等の状況が急速に変化している中で新産業の創出に向けた集積化と連携した展開を具体的に進めていくべきである。

二つ目、集積産業をさらに発展・拡大させていくために必要な人材は大学だけに偏ることなく、行政・企業あるいは諸団体間での相互連携に踏み込んで、より自主的な仕組みを構築していく必要がある。

三つ目、技の分科会で議論された内容に係る組織体にフィードバックし、新たな視点で結果と結びつく具体策を検討し、実務としてどう進めていくのがよいかという提案型の議題に上げていきたい。これが前回までの三つのまとめということになります。

今回の議論のテーマでございますが、地域の強みである産業基盤を最大限に生かし、三遠南信地域基本計画や地域イノベーション戦略推進事業、国際競争力強化地域による広域連携による産学官連携を一層強化し、国際的視野に立ちオープンイノベーションによる技術革新、成長市場へのチャレンジ、人材育成を推進し、地域産業の協力強化、新産業の創出を目指すなどの重点プロジェクトへの推進状況の確認・評価を行い、次年度以降どのように進めるか議論するという事で、ビジョンの「技」分野の基本方針である持続・発展的な産業集積の形成というテーマを今回設定しました。

以上でございます。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございます。事務局より説明いただいた3つの点について、第1に地域としてどのように取り組んでいけばいいか議論を

したいと思います。

第2に、人材育成の点に関して、第3に、これからのものづくりという点に関して進めていきたいと思います。

それでは、それに先立ちまして、遠州地域のものづくり産業の現状と中小企業支援についてと題して浜松市産業部長の安形秀幸様、お願いいたします。

■報告

浜松市 安形産業部長

皆様、こんにちは。ようこそ浜松へお出でいただきまして、ありがとうございました。

私は浜松市の産業部長の安形と申します。15分間お時間をいただきましたので、遠州地域のものづくり産業の現状と中小企業支援についてというテーマでご報告を申し上げたいと思います。

遠州地域とここには書いてございますけれども、どちらかと言いますと、遠州地域全体を私は全部把握しているわけではございませんので、浜松地域のものづくり産業の現状、それから、中小企業支援につきましては浜松市の中小企業支援、それから三遠南信地域が広域連携で実施している現状の産業支援につきまして、ご報告を申し上げたいと思います。

最初に、この浜松地域の産業発展の系譜ということで、よくこういう図はお示しさせていただいているわけですが、浜松地域というよりも遠州地域全般の産業発展の系譜ということで、これは簡単に申し上げますと皆さんご承知のとおり、江戸時代から綿織物、それから製材、これが産業発展の一番の基盤になっておりまして、それが現在までこういう経緯を踏まえて、輸送用機器、それから機械、楽器、それから先の光産業というところも発展をしてくれているということでございます。遠州地域というのですか、特徴的なことはやはり常に、例えば楽器にしましても輸送用機器にしましても、ライバル企業が

常に競い合って成長・発展を遂げてきたということが一つの大きな特徴かなと。常にライバル企業があったということ。

それから、この発展の系譜を見ますと、常に途切れることのない技術革新という、最近の言葉で申し上げるとイノベーションということになると思うのですが、途切れることのないイノベーションが継続してきたというようなところが特徴ではないかと思っています。

次は遠州地域ですけれども、全体の、ここにお示ししてあるのが製造業の事業所数とか従業員数、それから製造品の出荷額等について、平成 24 年度の工業統計調査、あるいは 25 年度の速報値をもとにお示しをしております。この中でご注目いただきたいのは製造品の出荷額ということで、遠州地域の 8 市 1 町がごございます。累計で製造品出荷額の合計を足しますと、一番下でございまして、8 兆 2,049 億円ということで、右側の日本のそれぞれの市町村の順位づけからいくと、1 番は圧倒的に豊田市さんですけれども、14 位浜松市、21 位が磐田市さん、それから 23 位は湖西市さんというようなことで、遠州地域全体では 8 兆 2,000 億円。ちなみにここには書いてありませんけれども、日本の県別の製造品出荷額を見ますと、広島県が大体 8 兆 3,000 億円ぐらいでございまして、これは全国都道府県で第 10 位ということです。ですから、遠州地域合計をいたしますと広島県の製造品出荷額に匹敵するぐらいというところでございます。

それから、少し調べてみましたけれども、豊橋市さんが約 1 兆 1,000 億円、田原市さんが 1 兆 4,000 億円、それから新城市さんが 3,000 億円弱、それから飯田市さんも 3,000 億円弱ということで、恐らくこの全体を合計しますと 12 兆円ぐらい。三遠南信地域の製造品出荷額が約 12 兆円になるのではないかと、思うように思っています。これは全国の県別

の順位でいきますと、茨城県が第 8 位で 11 兆円でございますので、茨城県を抜いて、これが仮に一緒になるとすると全国第 8 位の規模ということで、日本の中でも大変に大きなシェアを持つ製造業の集積地だということに思っています。

そんな中で、非常に製造業はこれだけの大きな金額の出荷額がございまして、ご承知のようにグローバル化ということで空洞化など、いろいろ問題を抱えております。遠州地域の企業の海外展開、これは昨今特に海外へ進出する企業が多いわけですね。1993 年から 20 年間の海外展開をしております累計、数でございます。中小企業が赤、大企業が青にグラフで示させていただきました。大企業については、数も限られておりますからほとんど変わりありませんけれども、中小企業が圧倒的に、バブルの崩壊以降、相当海外へ進出を始めました。その後やはりリーマンショック以降も増えているというような状況で、これは大企業が当然海外生産比率を年々、年々高めておりますので、当然中小企業もそこ一緒に海外に進出するというような流れがございまして。

しかしながら、最近では皆さんご承知のとおり、振興国、特に東南アジア、ASEAN の振興国の成長市場をどうやって取り組むかというようなことが大企業、中小企業含めて大きな課題でございまして。この成長市場に取り組むことが企業の課題だということで、コスト削減から市場の拡大、そこで現地生産というようなところが最近の特徴だと思っています。

特に平成 25 年度におきましては、中小企業の進出企業数が一挙に 38 社ほど 1 年間増加をしております。非常に顕著な実績を示しております。この中ですが、これは県の統計で見えておりますけれども、例えば浜松市の企業はどのくらいかという、このうち 136 社ぐらい。磐田市さんが 25 社、袋井市さんが 14 社、湖西市さんが 13 社というような数字だと伺

っております。これは県の統計ですので、実態はさらに多いのではないかなと思っております。

次は、これは今申し上げたようなことがここにちょっと書いてあるだけですけれども、やはり長期的に見ても海外生産比率というのが減ることはない。高くなることはあっても減ることはないだろう。それから、日本の人口減少社会。それから、生産年齢の減少というようなことになりますと、国内市場は当然のことながら縮小に向かっていく。避けられないということでございますので、やはり企業としましては新たな市場開拓に向けて海外市場の獲得ということを展開していくであろう。

それから、あわせて、国内においては新産業の創出ということと、それから既存産業の高付加価値化、ここは避けて通れない部分で、今後におきましては、製造業においては特に工場を含めてマザー機能の国内の存続ということが非常に重要であるということはいうまでもないと思います。

そんな中で実は浜松市が取り組んでおりますはままつ産業イノベーション構想がございまして、これは3年ほど前に経済環境とか社会環境の変化の中で今後どういう産業政策を進めていったらいいのかということで、行政とそれから経済界の皆さんと一緒につくった構想がございまして、今申し上げたようなこれからの成長市場新産業の創出というのが第1番で、特に浜松地域は成長6分野というのを、ここに書いてあります次世代輸送用機器産業とか健康医療・新農業・光電子産業・環境エネルギー産業・デジタルネットワークコンテンツ産業、これを新産業の6分野と位置づけて、事業化に向けた開発費の助成を実施しております。予算的には年間1億5,000万円ぐらいです。ここの事業化補助金を企業の皆さんに交付しているということです。

戦略の2はオープンイノベーションの推進ということ。オープンイノベーションはいろいろ定義がありますが、企業の皆様方、それから異業種、それから産学官連携等々、そういう皆様がいろいろな課題にみんな取り組んで課題を解決して、新たな産業の事業化につなげるという、イノベーションにつなげていくというようなことを積極的に支援しようというようなことで、医工連携とか光産業を活用したライフフォトニクスイノベーション、こういうことをやっております。

それから、企業力向上支援でございますが、これは中小企業に対する支援でございます。いかに行政としては経営資源の強化を支援するかというところで、大きくは先ほど申し上げたような形で、中小企業も海外進出が元気な中小企業については不可欠でございます。海外展開支援を積極的に実施しようということで、昨年から今年で2年目でございますけれども海外進出のいろいろな調査、それから見本市の出展の支援、それから、今年の4月は1年前から働きかけておりましたが、ジェトロ浜松貿易情報センターを浜松に誘致しまして、事務所が開設されました。今、企業の皆様、それから農業関係者の皆様も今後、農産物の輸出とか、そういうものについていろいろな情報提供をいただいたり、相談をさせていただいたりというようなところで活用をさせていただいております。

それから、人材育成事業とか研究会活動、これは新素材CFRPとかチタン、こういうものを企業の皆様にいろいろ技術を習得していただくというようなことで研究会活動を実施しています。

それから、知的財産というのが非常に重要でございます。これについてもコーディネーターを置いて推進をします。

それから、戦略の4でございますけれども企業立地支援ということで、浜松ものづくり特区ということで認定をいただいております。

これは今、浜松の新東名の浜松インターの近くに 50 ヘクタールぐらいの工業団地を整備するというようなことで進めているところでございます。企業立地についてはいろいろな補助制度を用意して積極的な誘致を行っている。

真ん中にごございます 3 本の矢とかというのがありますが、大きく新産業の創出、それから企業立地の支援、海外進出支援、本年度からさらにもう一つ、創業の支援ということでベンチャー企業を含めて創業者のご支援をさせていただこうというようなことを重点的にやっております。

こちらが大きく広域の連携ということで非常にちょっとわかりにくいですが、点線の丸とピンクの楕円形の丸というのを見ていただくと、ピンクの楕円形の丸は中段のちょっと下にごございます地域イノベーション戦略という、これは三遠南信というよりは浜松、東三河地域が連携している事業。これは国の公募事業に対して共同で申請をしている連携事業です。それから、縦に楕円形になっている点線のブルーの事業がございます。こちらが三遠南信の地域基本計画というのをつくりまして、それに基づいて広域的産業集積活性化補助事業ということで本年度まで実施をしている事業でございます。

そのこの事業の中身については、この中でちょっとご説明申し上げますと、今まで三遠南信地域を含めて取り組んできた事業がちょっと羅列をしておりますけれども、一番最初に知的クラスター創成事業というのがございます。これは実は浜松地域と東三河地域が平成 14 年から光電子を活用した新しい分野へ事業化をしていこうということで、文部科学省の事業として応募し取り組んできて、10 年間実施して、これは終わっております。

2 番目は、はままつ次世代光・健康医療産業創出拠点事業ということで、これは J S T の事業として 10 年度の事業でやっております。

これは申しわけございません。浜松市だけでやっている事業です。

3 番目が浜松・東三河ライフフォトニクスイノベーションと片仮名がたくさん出てきますけれど、これは浜松地域と東三河地域が取り組んでいる、先ほどの事業でございます。これが今、続いている事業です。

それから、一番下に産業クラスター計画事業がございます。これは商工会議所を中心に平成 13 年から三遠南信地域が連携をしてやってきているということで、これもクラスター事業としては終了しておりますけれども、現在は一番下の広域的産業集積活性化補助事業ということで、これが三遠南信連携事業ということで取り組んでいる今、一番の事業でございます。

具体的にはなかなか説明すると長くなりますので、例えばライフフォトニクスイノベーションというのは経産省とか文科省、農水省の 3 省が連携して地域に公募をした事業で、これは産業界と金融機関の皆様、大学はもちろんですけれども行政がそれぞれ、愛知県と静岡県が浜松市と豊橋市ということで、主に四つの分野、健康・医療と光エネルギー産業とか新農業、次世代輸送用機器産業、この四つの分野について光技術を活用して新しい製品とか技術を開発して事業化につなげていこうと、こういうような事業です。

一番下の産業クラスター計画の広域的産業集積活性化補助事業ですけれども、こちらについては、これも行政と商工会議所、それからそれぞれ 3 地域の産業支援機関、例えば豊橋市さんですとサイエンスクリエイティブさん、それから飯田市さんですと南信州飯田産業支援センターです。それと浜松市ですとイノベーション推進機構というような産業支援機関もこの中には入って、行政としては 3 地域がそれぞれ入って、特に会議所がこれの事業については主体になって取り組んでおります。

クラスターということで輸送用機器産業の

プロジェクト、それから光電子産業のプロジェクト、健康医療のプロジェクト、航空宇宙産業のプロジェクト、新農業のプロジェクト等を実施しております、内容については、例えばトヨタとかホンダとかのビジネスマッチングを実施するとか、医療用機器の関係のマッチング事業を進めるとか、それから、いろいろ展示会を共同で行うとか、最近では一歩進んで共同受注組織の設置というようなところまで行っているところがございます。エアロスペース飯田さんとか、例えば「宙へ」という、これは宇宙航空、これは静岡県内ですけれども、あとは医工連携でも「HAMING (ハミング)」とかという、いろいろ組合・組織等をつくって一緒に製品化とか実施していこうというようなことも成果として出てきています。

それから、アジアナンバー1航空宇宙産業クラスター形成特区のエリアに、豊橋市さんは愛知県と従来からやっておりましたけれども、そこに飯田地域と浜松地域の市がこれに加わるというようなことも、この中の一つの成果かなと思っています。しかしながら、これは当初、国の経済産業省の支援事業で実施をしてきましたけれども、平成25年度をもって国の補助金がなくなりましたので、現在はそれぞれの自治体が負担金でこの事業、それから商工会議所さん、あるいは企業さんがご負担をいただいて、この事業を進めているというようなところでございます。

これはクラスターから生まれた一つの参考例として手術ナビゲーション装置とか、超軽量車いすの開発とか、検査装置とか、こういうのがいろいろ生まれております。

これはご参考にとりまして出させていただきましたけれども、遠州地域の8市1町で遠州広域行政推進会議というのをつくっております、ここでそれぞれの市長さん、町長さんが集まって会議をいろいろな分野で進めております。それから、連携をしていくため

のテーマを決めて、担当部局がそれぞれ研究会を始めておまして、今年度については産業政策と公共交通がテーマということで、検討テーマ案、これは研究会でそれぞれこの間、抽出をしたということで、①が地域企業への支援、もう一つが、2番が行政間の連携ということでございます。地域企業への支援については、人材育成とか企業活動の支援、販路開拓、情報発信、こういうことを連携で事業として何かできないだろうかということで、来年7月までにこの遠州地域の連携事業を詰めていくというのが、今、地域でスタートしたということです。

それから、これは浜松市の取り組みで、今後、人材育成とか販路開拓で何か今回のテーマに沿った中で広域連携に結びつく可能性のある事業かなということで出させていただきました。これについては説明を省略させていただきますが、一つのヒントにまたご興味いただければと思っております。

以上、簡単ではございますけれどもご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長

安形部長、ありがとうございました。

それでは、ただいまご報告をいただきまし

た話題に関しましてご質問がありましたら手を挙げてお願いします。ご質問がある方、挙手をお願いできますでしょうか。あとでまた意見交換の場というのを設けておりますので、次に進めさせていただきます。

では、意見交換に移らせていただきます。事前にアンケートという形でご意見をいただいて、事務局でこれを振り分けて発言していただくというようなことを考えております。

時間が実は限られておりまして、それぞれの発言をなるべく3分程度でお願いできればと思っておりますので、ご協力お願いします。コーディネーターのコメントではなく、皆様のご意見をなるべく多くいただきたく存じます。

テーマは三つありまして、そのうちのまず一つ目です。三遠南信地域で行われている新産業創出の取り組み、あるいは既存産業に活力を与える取り組み、または交通基盤の整備が地域の産業にどんな効果があるかということに関して把握したいと思っております。

では、まずご意見をよろしくお願いします。

初めに田原市の商工会会長の河合様、お願いできますでしょうか。

田原市商工会 河合会長

昨年も飯田の方の会議で少し触れさせていただいたのですが、東三河の広域経済連合会という組織の中で三つの重点事業というのがございまして、そのうちの一つであります自動車産業のブランディング化ということを担当させていただいております。

ご存じの方は多いと思っておりますけれども、東三河の地域というのは自動車産業の大変集積された地域でございます。日本の中心地帯にある三河港というのが実は21年間連続で輸入自動車の日本一の港でございます。それから、国産車の輸出でございますけれども、トヨタの田原工場、それから湖西のスズキ自動車さん、それから蒲郡の方から三菱自動車の

輸出ということで、こちらが現在は名古屋港に次いで全国で第2番目の出荷額を記録させていただいております。

そんなわけで、輸入自動車関係は修理とかメンテの関係の中心の産業が集積されているということと、それから生産に関しましては、トヨタの田原工場はレクサスの最高級車ランクル等がございまして、トヨタ自動車等におかれましても先端の工場ということでございます。

そうした自動車産業の集積というのがずっとされているわけですが、いかにせん、知る人ぞ知ると言いますか、それから、港の自動車中心の港であること自体も知っている方は知っているのですけれども、いろいろなところで尋ねてみますとなかなかブランディング化されていないということで、三河港の自動車産業の集積というものをどういう形でブランディング化していくかというのが私どもの委員会の務めでございます。ちょうどこれで2年目になりますけれども、ようやく、まだ段階的には第1段階、10%、第1段階でしかないのですが、この11月24日に三河港の自動車産業の観光ツアーということで、まず第1段階は中部地区を中心とした産業観光、自動車を切り口とした産業観光ツアーを企画させていただきました。

この中で大きな特徴としては、先ほどお話しさせていただきましたトヨタの田原工場の組み立てラインの見学と、それから輸入自動車の、先日、新聞でも発表されましたけれども、メルセデスベンツがデリバリーセンターを開設しまして、その第1号の方が車の受け取りに来られたという記事があったと思いますが、国産の製造工場、それからメルセデスベンツのデリバリーセンターの見学というのを、多分ここでしかできないことだと思いますので、今回第1弾として、それに地域の飲食を兼ねたツアーというのを日帰りですけれども開催させていただきます。

まだ、先ほど言いました第1段階ということで、この産業観光ツアーにつきましては将来というか最終的な目標につきましてはインバウンド、東南アジアを含めた各国からこの自動車産業という切り口で産業観光のブランド化ができれば、この1地域の既存の自動車産業の活性化に対して大きな影響が与えられるのではないかなということ、そうした事業をただいま進めさせていただいております。

**コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長**

ありがとうございます。続きまして、御前崎商工会の阿形様お願いします。

御前崎市商工会 阿形会長

御前崎商工会の阿形でございます。皆さん、ご存じのように御前崎市というのは地図を見ていただければよくわかるように、北には富士山を臨み、東側は駿河湾、南側は太平洋と本当に角度でいえば30度ぐらいの間しかない。皆さんのところはいいところは丸々商圏になるようなところ。海側のところも180度は海でもあとの残りの180度は陸地でございます。我々のところはそうはいきません。左右南北も海ですので、恐らく長野のところと違って、恐らく商圏になるところは4分の1ぐらいと考えられます。

そういう中で、やはり原子力発電所に頼っていた関係で新しい産業も生まれてこないような、ずるくしていたような気がいたします。そういう中でやはり地域産業を集積していくためには、やはり今から頑張っていかなければならない時代ではないかなと。やはり今言ったように、面積的にも、地域的にも4分の1ぐらいですので、人を集めても4分の1からしか募集はできない。産業も同じです。商業圏も同じです。そんなことでなかなか、4分の1あればいいのですけれど、極端に言えば、もっと少ないのではないかなと思われま

す。そういう中で産業の集積を本当にして、やはり遅れているものを取り戻して、これからのものに生かしていかなければならないのではないかなと。ここで皆様方のご意見をお聞きして、勉強して、なるべく早い時期にそういうものが育っていくように努力をしていきたいなど、御前崎市としては考えておりますので、またよろしくこれからもお願いしたいと思っております。

**コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長**

ありがとうございます。

では、続きまして南信州ここだにの木下様お願いします。

**一般社団法人南信州ここだに
木下代表理事**

実は「技」というよりは、ここにいる経過を少し話させてもらいながら、これからの取り組みに関してお話をさせてもらいたいと思います。

実は住民ネットワーク協議会が24年につくられました。3県で住民ネットワーク協議会をつくりましょうということで作り、入ったわけです。もうその時には何かお互いが物をネットワークで売れないかという話もございまして、その中で物流、それから人との交流、先ほど前段のところでは話がありましたが、いずれにしても全国の中でも中山間地が多いこの地域においては、これからどんどん、そういった集落が消えていくという現況があるわけなので、その中で住民は何ができるのだろうかというところで、今、中山間地の例えば地域の振興だとか、そういうことで住民ネットワーク協議会として最小限だけでもできることはないかということで、今取り組んでおります。

南信州「ここだに」が生まれたのは、実は今、それこそ部長さんから話がありましたけ

れど、多分 24 年ごろだったと思うのですけれど、クラスターの中で社団法人、補助金をいただく制度があったので、皆で住民ネットワーク協議会を立ち上げる同時期に制度に応募させていただきまして、社団法人を立ち上げて今に至っております。

今やっていることは、例えばジュビロとの交流だったり、それからスポーツ交流だったり、あとは街道だとか、そういうものをテーマにした住民のネットワークをつくること。あとは地産地消とよく言いますが、地産地消はもう自分のところで自分のものを消費するという時代ではないだろうということで、お互いが助け合って消費をするということで互産互消ということで、地産外消というか、外へ行って物を売るのでなくて、お互いが助け合うというイメージのものを、お互いアンテナショップをつくりましょうということで、実は私も直売所を、飯田市の管理されていたアザレアの指定管理を受けまして、今ここでも運営させていただいております。現在は遠州の「遠江特選市場」、私のところ、それから今、三河地方においては「もっくる新城」の中に何かそういった新しい道の駅に展開できないかということで、今それこそ新城の議会にお願いして、一応そういうスペースをつくってもいいよというところまで話はできていて、あとはどういう形で運営しようかということは今、模索してやっていきたいと思っております。

そんな活動をしながら、今、実は私たちも浜松の軽トラ市とか、それから、当然遠州の方の道の駅とか、そういうところに毎週 1 回、商品を持ち込みながら、逆に 0 メートルから 700 メートルぐらいの地帯なので、夏場は南信州のものを、それから冬場はそれこそ浜松・東三河の野菜を持って、実は活動しております。これもそんなに収益が上がるわけでもないのですけれども、実際にこれからどういう活動ができるのかとか、それが物流としてビジ

ネスになるのかというところの中では、先ほど来からありますけれど、雇用だとか、それから地域振興をどうやって図っていくのか、というところの中で、地域だけでなく、これは行政、それから経済、それから民間の我々が最低限でもそここのところだけはつないでいきたいという思いで、今、やっているところ

です。いずれにしても、いろいろなところにこういった形のを、地域振興の何ができるかということをお願いしながら、今日は行政と経済界の方が非常に多いので、中山間地の本当にいわゆる苦しさなんかもぜひわかっていただいて、農業、それからもちろん恵まれた工業の場所もありますけれども、実はそういった中山間地も忘れないで、ぜひ一緒になって地域づくりができたならありがたいなと思っています。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございました。続いて奥三河自然と歴史にふれあう会代表の加藤様お願いします。

奥三河自然と歴史にふれあう会 加藤代表

愛知県の北東部、俗に言う中山間地、設楽町からやってきました。そして私たちの会は今から 16 年前の平成 10 年に田峯小学校存続活動を機会に結成されました。会の趣旨は、地域の人が主役、地域の自立を目指すことを目的としています。そのためにほとんど表面に出ないというのが私たちの会です。表面に出るというのは、やはりその地域の人たち、そういった人たちが表面に出るということで活動しています。

先ほど安形さんの解説を聞きまして、浜松市と設楽町では規模が全然違うという感覚を受けました。しかし、こういった中山間地の小規模な地域が全国的に多くを占めているこ

とを理解してもらいたいと思います。

そして、私たちの活動内容は、結成されて16年しかたっていないのですが、主なものを4点ほど挙げてみます。一つは田峯小学校の児童数を増やすための活動。これは廃校寸前の学校で、全校生徒が10名のところを、我々がPTAと活動して20名までに盛り返したというのがあります。しかし倍とはいえ、わずか10人しか増えていないというところです。残念ながら、現在はまだどんどんと減りつつあるため、これを解消していかなければならないところです。

2番目は地域を知るためには自分たちの足元から見直す必要があります。当然自然・歴史・文化等の情報です。意外と知られていないもので、私自身余り知らなかったのですが、これを16年かけて全ての動植物、歴史、文化をデータ化しました。道端の石ころから、何千種とある動植物まで、全て電子化してまとめました。

あと、三つ目が地域の希少種の保全や保護をやっております。いろいろな開発がありまして、それとやはり地域を知っているという強みを生かします。どこに何があるかというのを全て把握しています。開発がある場合は安全にそのものを移植とか移転をして保護活動に取り組んでいます。

四つ目が地域の小中学校で出前講座というのを16年間やっています。また、いろいろな植林活動もやっています。例えば小中学校へ行って地元の探鳥会を開いたり、学校へ行き読み聞かせをしたり、あと、いろいろな学校を対象に自然観察、地域の自然・歴史、そういったものの講演・講座を開いています。

中でも植林活動についてはいろいろなことがあって、大学の先生からいろいろアドバイスがあり、決して外から持ち込まないようにしてほしいという条件があり、地域の自然のものを植林しています。

最近の活動として、地域資源の活用という

ことに取り組んでいます。これは観光で取り組む活動で、役場の観光課と連携し各種のイベントの応援やボランティアガイドを盛んに行っています。10月はイベントの多い月で、私も社員なのですが、会社に出られたのは2日だけでした。あとは全てこういったことと呼ばれています。

もう一つ近くにすぐれた産業があります。東栄町の三信鋳工です。これは小さいながらも大変世界的に有名になっています。また、設楽町の関谷醸造さんですね。これも地域資源の水を生かしてたいへんな躍進を遂げています。こういったことで地域資源を活用した産業の取り組みを参考にして、またいろいろと教えてもらっています。

指導されながら地域の商工会と連携して、今、ちょっと別なこともやっています。奥三河地域には多くのカエデの種類がたくさんあります。そのカエデを利用して樹液の加工品の開発、そして煮詰めてシロップにして活用、これに取り組んでいます。ちなみに、カナダから輸入するシロップは日本が一番多いのです。日本でもかなり上質のシロップが生産できるということで注目をして、現在やっているわけですが、これには大変苦戦をしています。しかし、苦戦をすればするほど、いいもの、またやりがいというのが見えてまいります。以上ですよろしくお願いいたします。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございました。続いて湖西市の三上市長お願いいたします。

湖西市 三上市長

先ほど製造品出荷額を聞いていたのですが、全国22位とこの前聞いていたのが23位になっていたのも、ちょっとひょっとしたら最近の数字でどこかに抜かれたのかと思いますが、1兆6,000億円とか1兆7,000億円ぐらいの

製造品出荷額を持っている湖西市でございます。ところが全国的には豊田佐吉と豊田喜一郎が生まれた町という、「ええ、豊田市じゃなかったの」とか「名古屋市じゃなかったの」と言われるのが大変残念な町でございます。

私ども、余り自慢できるほどのものではありませんが、まず産業活性化という点では全ての会社を救うことは私どもにはできません。自由競争だから。やる気があって、海外に進出しようぐらいの気持ちがあるところを支援するのだと言っていて、金利を支援いたします。海外へ進出しようという会社にも金利支援をいたします。最初はうちへ工場をつくってくれるという、当市に進出してくれるところに支援をしましょうという金利の支援だったのですが、それにとどまらず海外に生き残るために進出するのですね。ですから、これも支援しようという形を行っております。

もう一つはビジネスマッチングのコーディネーターを平成23年に1人つくりまして、その人件費を持っているという形を行っております。評判がいいものですから、もう1名増加させました。1年間で280社も訪問してくれるのです。ということは毎日1社ぐらい、250日働くとしたら、毎日1社以上訪問しているというぐらいに足しげくいろいろな会社を訪問してコーディネートを努めることによって活性化をしようという、大変評判がいいものですから2名に増やしたというのが25年、1年前のことでございます。

そして、産業の展示会を開こうというのが25年に開き、今年12月に2回目を開くという形で発展をいたしております。

次は、二つ目の柱は人材の育成なのですが、これは結構、湖西市はひょっとすると皆様方のところよりも一歩先んじているのかなと思ったのは、まず、小学生から活性化をしなければいけないというので、少年少女発明クラブというのに力を入れております。例えば長

野県ですと、少年少女発明クラブは5市だけです。この三遠南信では飯田市だけしかありません。静岡県は湖西、浜松、三島の三つしかないのです。愛知県は22市あるのです。大変多いのです。これはやはりトヨタ系が多いということと、長いこと豊田章一郎さんが全国の少年少女発明クラブの会長をしていたというのがあるのかなと思います。でも、三遠南信の東三河に絞りますと、蒲郡、田原、豊川、豊橋しかないのです。うちは毎年約50～60人の小学校の生徒がいろいろな活動をしております。

そして、高等学校になりますと、職業訓練センターがありますので、それを利用して二つの高校にフォークリフトの実習その他を行っております、たしかこの3年間、湖西高校と新居高校、二つの高校は全員が就職または進学をしているという形になっております。

そして、高等学校、大学生向けに豊田佐吉記念奨学金というのがありまして、これは月々数万円ですが、これは返さなくてもよいという、上げるという形の奨学金があります。毎年5～6人の方を追加して支援をいたしております。

それから、もう一つは新居町の時代から連続しているのですが、経済的に恵まれていない人に月々5万円、これは貸しますという、大学生を支援する、無利子で貸しますという制度がございます。

それから、静岡大学さんをついこの間、協定を改めて結んだのですが、いろいろな有名人も招きますが、若手の研究者でもいいのですが、招いて、いろいろな方に講演をしてもらい、一流の人たちと接する機会を持つということをしています。これは学生さんから一般まで含めて聴いてもらっております。

例えば、ついこの間お亡くなりになった北沢宏一先生、超伝導の世界的権威でノーベル賞候補にもなったと思いますが、3年前の湖

西市に招いて講演をしていただいております。

それから、地域デビューというので、外に出て行って湖西に戻って来てくださいというので、66歳対象に、66歳でもう1回同窓会をやっけてねと、こんなものも行っております。

そんな形で小学生から人材育成に努めている湖西市でございます。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございました。続いて豊橋商工会議所の吉川会頭をお願いします。

豊橋商工会議所 吉川会頭

昨年もお話させていただきましたけれども、東三河全体の商工会議所商工会で東三河広域経済連合会を設立いたしましたして、現在いろいろな取り組みをしているところでございます。産業振興のプロジェクトの中で先ほど田原市商工会の河合会長からお話のありました自動車産業ブランディング化のプロジェクトもその一つであります。

もう一つが、健康な地域社会創造プロジェクトということで、こちらは蒲郡商工会議所の小池会頭に担当していただいております。蒲郡市には先進的な医療分野の企業がありますので、先端医療の皆さん方といろいろと手を携えて、健康な長寿社会を全うするためにはどうしたらいいかということが本プロジェクトのスタートでございます。先日も10月9日から13日までの5日間にわたり「健康『Desing』の探求の旅」というヘルスケアツアーリズムの商品を企画させていただいて、皆さん方にご披露していただいたところがございます。蒲郡市にはラグーナ蒲郡がございますので、その中で健康と観光ということと、交流人口の増加を目指していろいろと取り組んでいるところでございます。

3点目は、三上市長さんからも人材の育成についてお話がございましたけれども、我々

も域内企業の従業員の皆様方を中心に人材を育成していこうということで、技科大や愛知大学、創造大学といった地元の大学などと連携してセミナーを開催しております。いろいろな講座を設けて地域に役立って、地域で卒業した学生を地域で雇っていただけるような仕組みづくりを、今進めているところであります。

それから、もう1点、これはまだ計画段階でございますけれども、私どもの愛知県豊橋市から長野県の飯田まで飯田線が走っております。この飯田線を活用して産業の振興、そして観光の振興、二つをこれから具体的にしていこうということで、今、東三河広域経済連合会内の産業政策企画会議におきまして、今後の事業計画を検討しているところでございます。この計画が具体的になりましたら、皆さん方にご披露させていただきたいと思っております。

それから、「ものづくり博」と「いいもの・うまいものフェア」のチラシを皆さん方のお手元にお配りさせていただいていると思っておりますけれども、こちらは10月31日、11月1日に豊橋の総合体育館で開催させていただきます。過去には豊田章一郎さんも記念講演にお出でいただいたこともございます。

こちらは、豊橋商工会議所の松井副会頭が担当責任者として、いろいろと組み立てをしているところでございます。この中には遠州の皆様方、そして、南信州の皆様方にもご出展、ご協力いただいておりますので、お礼をする一方で、皆様方には当日お越しいたきまして、三遠南信地域の産業の交流、新たなビジネスのきっかけとしていただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

その他何かございますでしょうか。

奥三河自然と歴史にふれあう会 加藤会長

実は設楽町には愛知県唯一の原生林があります。太古から人が入っていない森です。あと豊川の源流があり、豊川は設楽町から始まっているということです。設楽町内では子供たちが普通にその自然の川で泳いだりして遊んでいます。

今、設楽町内に私たちの田峯区があり、私たちの地区と蒲郡市と交流活動を 20 年ほどやっています。毎年 50 人がやって来るのですが、かなりイメージは好感度で、倍率がざっと 10 倍です。募集すると 500 人が集まるのですが、募集人数は 50 人ということです。このような地域ですのでよろしくお願いします。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

それでは、地域産業が持続的に発展するためには、それを支える専門的人材、創造性豊かな人材の育成・確保が必要だと思いますが、そのときの課題と解決策についてご意見をお聞かせください。

奥三河自然と歴史にふれあう会 加藤代表

人材の育成確保を 4 点挙げてみます。一つ目は地元のことを知らない人が多いために地元のよさが今、わからなくなっているのが現実となっています。特に役場等の関係職員の方は余り知らないようで、この人たちにうまく教育をしていただきたい。役場の職員さんたちはなかなか優秀な人が多く、地域のリーダーとなり得る人が大勢いますので、ぜひ地元のことを知っていただきたいと思っています。

二つ目が現在活動している中で公共施設管理協会という部会や、役場の観光課、こういったところと連携をしてボランティアガイドの育成をやっています。去年から始まり、ボランティアガイド養成講座を開いて、2 年を通して講座をやっています。こうしたことで

地域の話をする機会を増やし、特に若い人との話し合いの場を設けることで、非常にいい取組かと思っています。

三つ目が、少し言いにくいのですが補助金です。イベントもよいのですが、補助金に頼るというのはどうかと思っています。補助金が切れても続いていけるような取り組みであるのならいいのですが、補助金が切れたら続かないというのは何の解決にもならないと思っています。地域が潤って自立していくようなことにつなげたいと思っています。

四つ目が、できるだけ若い人の話を聞くというのが大事だと思います。どちらかというと、我々の地域は高齢化が進み、高齢者がいろいろなことをやっているのですが、高齢者が中心ですと、若い人たちはどんどんと都会へ出てしまいます。もっと若い人たちの意見、それと話をどんどんと取り入れて、若い人たちが住みやすい、居心地のいいところをつくらないといけないなと思います。これからこうした取り組みもしたいなと思っています。私も 61 歳になり、高齢の人たちに若い人の意見を聞くようにとということをちょっと言えるようになりましたので、これからそうしたことに取り組んでいきたいと思っています。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

続きましてここだにの木下さんお願いします。

一般社団法人南信州ここだに 木下代表理事

今、加藤さんの話に尽きるのですが、立場が多分かなり近い活動をしているからそう思えるのだと思います。それについてはダブるのを避けたいと思いますので、自分なりに考えている人材育成というところの中では、これはお金ではないだろうと。でもやはり地域が疲弊していく大きな理由というのは、や

はりネットワークというか、要するにコミュニティが崩れていて、それをどうやって、その中で動くお金があれば別段いいわけで、その中で生活できるようなスタイルをみんなが持ち合わせる事が重要なと思います。

先ほど来、飯田も3,000億円ではかのところが1兆円という話なので、要するに経済活動が飯田市は3,000億円とちょっとお話を聞いたので、そうすると、今ここにいらっしゃる湖西市は1兆何千億円、田原ですと1兆何千億円、その違いの中で同じ生活者がいるというのをやはり逆にそういう人たちにもぜひ知ってもらいたいです。地域のそういう人たちがいて、また地域が形成できて、国土が形成できるのだと。先ほど、今、加藤さんからお話がありましたけれど、でもやはり豊川流域の自然は我々が守るのだという意思です。やはりそういう上流の人たちの思いというのを、海辺の人たちにもぜひ知ってもらいたいですし、その反対もあります。

その中で生活スタイルというのは多分一律ではないと思うし、それは重要なことだと思うので、そこに生きる人たちが自信を持ってそこで生きるというメッセージを送らない限り、多分地域は持続しないと思います。そのために何ができるかという、そんなにお金のかかることではないですね。1兆円も2兆円もかかるわけではないし、1億円なのか、1,000万円なのか、100万円なのか。それでも生きていくのだというメッセージを送れる人たちが何人その地域にいるかということが、やはり一番大切なのかなといつも思います。ですから、逆に言うと、身の丈に合った生活をそこでしていくという重要性というのを、やはりお金をもうけるから外へ出るという話ではなくて、ぜひ行政なりもやはりそういう教育をしていってもらいたいと、そういう感じがします。

コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長

続きまして、浅羽町商工会の大石会長お願いします。

浅羽町商工会 大石会長

専門的人材、創造性豊かな人材の育成・確保等につきましてですが、私どもの商工会では当地区に進出された企業と、もともと地元で育った企業との交流を図ることを目的にしまして、平成元年に商工会が事務局を担当いたしましたのでできました団体、浅羽企業交流会というものが設立されております。この団体内では、担当者同士のかかなり緊密な交流が行われておりまして、一部には技術指導とか受・発注が行われていると聞いております。

しかしながら、それらは浅羽企業交流会内部だけのことであり、小規模事業者が多数を占めます商工会員に及んではおりません。そこで、3年ほど前から各商工会でも行われておりますが、静岡県商工会連合会によりまして専門家派遣制度を大いに活用させていただいております。最近では、地元信用金庫さんとの連携も図られまして、信用金庫さんの紹介による案件では企業が負担します派遣費用の一部を信金さんがご負担いただける場合もあるとのことであります。また、本席におられますが、湖西市の三上市長様のおひざ元の湖西商工会はこの点におきまして静岡県ナンバーワンの実績とお伺いいたしております。

湖西市商工会は早くから地元企業を退職した技術者等のOB集団、企業組合、浜名湖エルダークラブを組織されまして、県内外の企業コンサルをされているとのことであります。先ほど申しました浅羽企業交流会所属企業のOBからは、こうしたOB集団設立のお話があるわけではありますが、まだ残念ながら実現には至っておりません。中小零細な事業所でありましては自社で専門的な人材などを育てることは大変難しい状況にありますものです。

から、こうした専門家派遣制度や企業OBのコンサルタント集団の設立は大変有意義であると思いますし、小規模事業者、私ども商工会員にとりまして大変効果的な役割を果たしていただけるものだと思います。

こうしたことから、専門家派遣制度におきましては国からの予算の獲得を、それから、OB集団の設立につきましては設立に向けての研修、またサポートをぜひ実施していただければと考えております。

それから、経営とか技術の革新には大学との連携が必要でありまして、また効果的であると考えます。私ども袋井市では静岡理工科大学との連携を図るため袋井市産学官連携推進協議会が設置されておりますが、大学側からは大学の敷居が高く感じて相談しにくいと思われるかもとのお話もありました。中小の事業者にとりましてはなかなか気軽に相談できる状況にないかもしれません。また、相談内容によりましては、どこの大学に相談すればよいのかもわからない場合もあるかと思われまますので、広域で組織するこの三遠南信推進会議に気軽に相談ができて、大学とのジョイント、橋渡しと言いますか、そのようなものを送っていただければ大変ありがたいと思っております。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

続きまして、磐田商工会議所の高木会頭をお願いします。

磐田商工会議所 高木会頭

磐田市は工業の町でありますので、人材育成といいましても、いわゆる産業人の育成あるいは経営者の育成ということになるかと思っております。磐田のまちの産業の歴史を申し上げますと、かつては木材、お茶という、いわゆる天竜川に筏を組んで木材を流してき

た。そして、天竜市で揚げる、今、浜松市天竜ですね。あるいは掛塚で揚げるというような木材の時代がありましたけれども、その後が繊維の時代になりまして、別珍、コールテンを中心とした繊維関係でありますけれども、かつては全国の90%強を確保していた。そういうシェアを持っていたという時代がありましたけれども、これはもう昭和40年の終わりから50年の初めに中古織機が海外に輸出することによって、繊維は完全に海外に移ってしまったというのが状況だろうと思っております。その後、輸送関連になりました。自動車関連、自動二輪の関係でありますけれども、ヤマハ発動機の本社が磐田市にありますし、またスズキ自動車、トヨタ自動車の下請けというような形で、同じ工業のまちでありますけれどもほとんどがそういう大手企業の下請けの街であります。

それが当然のことながら、大手企業が外国企業との競合が激しくなるにつれて、収益をあげる為にも過去にとらわれず、下請けの、いわゆる垂直分業の時代から水平分業に変わり始めました。我々は、下請けの企業の皆さんにいろいろな形で、私も金融機関に勤める人間でありますから、取引先を含めていろいろなところで話をしてきたのでありますけれども、いわゆる生産効率を高める、技術力を高める、その努力をしないと仕事がなくなりますよということを言い続けてきたのですが、当時は受注量も有り、そういう事が理解されませんでした。最近の状況を申し上げますと、有効求人倍率がこの8月でも、未だ1倍に達していないという状況であります。昨年の12月が0.84倍、そして1月が0.9倍にまで上がりましてけれども、その後0.75倍まで低下しました。そして、やっと今、8月が0.86倍に上がってきたところです。

先ほど三上市長さんから話がありましたけれども、磐田市は製造品出荷額につきましても1兆7,000億円を超しておりますけれど

も、かつてはというよりも平成 24 年には県下で 2 番目、浜松市に次いで 2 番目でありましたけれども、25 年は 3 番目に下がっております。これは静岡市に抜かれているわけでもあります。多分そういうことで湖西市もランクダウンしていると思います。磐田市が 1 兆 7,227 億 9,200 万円ですから、湖西市は大体そのすぐ下ぐらいではないかと思えますけれども、いずれにしても、これはいわゆる水平分業を十分自覚し意識して働いていればこういうことはなかったと思います。掛川市が 1.17 倍、浜松市が 1.14 倍だと思いましたが、そういう中で 0.86 倍という数字はいかに工業、その環境が停滞しているかを示している様に思います。

その理由は大手企業が生産拠点を海外へ移しております。スズキ自動車につきましても 3 分の 1 は国内でつくるけれども、3 分の 2 は海外ですね。そして、磐田に本社があるヤマハ発動機では前年の決算が 1 兆 4,100 億円程度だったと思いましたが、国内で売っている金額はその 10 分の 1 だということですから、当然その下請けには仕事が減ってきているということでもありますし、もう一つの理由は津波の問題。どうしても沿岸の下請けには仕事が出にくくなっているという状況。そういうようなこともありまして、大変厳しい状況が続いているというのが現状であります。

ですから、これをどういう形で直すのか。大手企業に海外までついて行くという一つのやり方があります。特に最近では東南アジアへの進出企業が多くなってきてはいますが、経営上の問題もあり、なかなかそうはいかないのが多くの企業のおもいだろうと思っております。

商工会議所としては「産業振興フェア」を過去 3 回開催しております。今年が 4 回目になります。11 月 12 日でありますけれども、かつては 40 社から 50 社程度の出展でありま

したけれども、今年は 103 社になりました。そのうち大手企業、スズキ、ヤマハ発動機、浜松ホトニクス、ブリジストン、NTN、高砂香料工業、天龍製鋸というような大手企業の出展により、地元中小企業との連携に期待が持てます。大手企業との連携の実例を少し申し上げますと、大手企業の浜松ホトニクスさんのレーザー光線を使って金属に焼を入れるという例です。金属を焼くというのは、金属を堅くするため、強くするためには全体を焼いていたのですけれども、ホトニクスさんのレーザー光線を使って、ベアリングが載る部分だけをピンポイントで焼くという方法を中小企業が開発いたしました。こういう形で大手企業の技術を中小零細企業が必要とする。あるいは、逆に中小零細企業が大手企業といろいろな形で取り組むことができるということであろうかと思ひまして、実は産業振興フェアの出展を前年度の倍にして、今進めているところであります。

そういう中でもう一つは、いわゆる新産業の創出の問題でありまして、これにつきましては以前から磐田では「磐田新産業創出協議会」を 2011 年の 10 月に発足しており、現在では 60 団体ほどになっております。先日も本年度の新産業の創出協議会を開きましたけれども、50 社ほど出席しております。また、別に 3D プリンターの研究会も開催しました。これにつきましても、40 社ほど出席して熱心に討論しております。これからはいろいろな形で産業というのは生まれてくるだろうと思ひます。そして、大手企業だけでなく中小企業も自分たちでもつくることのできる、そういう時代だろうと思ひますので、我々が支援していくことがこれから一番大事だろうと思ひています。

これは会議所とそれから私どもの金融機関と一緒にやってる事でもありますけれども、ビジネスコンテストをもう 13 年続けております。応募が 880 件を超しております。

最優秀には100万円を報奨金として贈呈しておりますけれども、すでに事業を起こしている企業も何社かあります。

もう一つは大手企業が持っている特許で死蔵しているものが沢山ありますが、これを開放してもらえないか、ということです。大企業では使えないが中小企業ならば使えるものがあるはずです。今、私どものところは富士通さんと一緒になって研究しております。

これを地元の企業の、ヤマハ発動機さんやヤマハさんにもお願いしているところです。そういうことを含めて現在、人材育成というよりも、こういう企業家を育成するという動きの中で進めているというのが現状であります。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

三上湖西市長 お願いします。

湖西市 三上市長

さっき二つのテーマでしゃべってしまいましたが、予定していたのは終わったのですが、実は話を聞いていて、浅羽商工会の方からエルダークラブは湖西市のほうが進んでいるというお褒めの言葉をいただきましてありがとうございます。

実は毎年8月に豊田佐吉奨学金をもらっている学生さんたちと昼飯を食べるのですが、豊田章一郎名誉会長と豊田章男社長が学生さんと私を交えて昼飯を一緒に食ってくれるのですね。こんな円卓で。そのときに、去年、「皆さん方は海外留学したいですか」ということを豊田章男社長がいちいち語りかけたのです。「手を挙げてください」と言ったら、奨学金をもらっているそこそこの人にもかかわらず、半分ぐらいしか手が挙がらないのですね。「これから世界にどんどん出ていってくださいね」と章男さんはおっしゃったのです。

そのことで今、うちは海外に留学する人に

対する奨学金制度がないので、それをきちんとつくろうということ、今、検討中でございます。やはり人材の育成という点、日本全体の留学生が、海外に出ていく人が減っているというのは、もう製造業はどう考えても世界がマーケットですから、英語ぐらいできなければビジネスができないような時代に間もなくなると僕は言っているわけですが、コミュニケーションの道具として、インターネットも英語で行うわけです。全世界の情報が入ってきます。そういう意味では、留学をしてほしいという制度をつくりたいなということも今、思っている次第で、つけ加えさせていただきます。ありがとうございました。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

人材の育成・確保を目指した取り組みが既にいくつもされています。ただし、より広域的・分野横断的に情報収集・発信をしていく仕組みづくりが急務となっている、ということだと思います。

それでは、三遠南信地域の競争力を高めるために今後SENA構成員および関連組織が広域的に連携して取り組むべき事業は何であるかご意見をお聞かせください。

それでは、菊川市商工会 鈴木会長お願いします。

菊川市商工会 鈴木会長

三遠南信地域の競争力、これを私は思うのですが、先ほどのいろいろな方のお話を聞いていても世界は自由経済だと。資本主義経済の自由経済だと。いろいろなところで海外へ進出するところもあるし、行政でも支援しているところもある。でも、支援してやらなかったら中小零細企業が生き延びていけないということに対しては、私もよく理解できるのです。先ほどから皆さんの意見が出るように、日本の今の出荷額は、製造出荷額

が県下でも非常に減っていると。

ただ、今のとらえた何兆円を見れば何かすばらしく思うのですけれど、下がりがたがひどいのだということは、皆さんはもちろん承知だと思います。これも今の世界が自由主義経済だからしょうがないと言えば、それで私もある程度は我慢ができるのですけれど、では、こういった今の厳しい世界情勢の中で三遠南信がこれからどうやって競争力を強めていくかということに対して、これは私の今ここで聞いていて思いつきなのですけれど、やはり三つの地域がお互いに地域を活用して、鎖国ではないですけれど、今までの貿易と同じように私たちの海岸沿いのないものを自然豊かな長野県の方からたくさん買う。例えばリンゴの美味しいものがあつたらたくさん買う。三河のすばらしい観光的なものがあれば、そちらへ皆さんで行く。そうやって、せめて私たちは井の中の蛙の中で経済を回してもたかが知れていますが、三つのところをうまく経済の発展の拠点としてやる。この3地区が交通の便もよくなれば、すばらしい三つの連携がとれるのではないかなと思いました。

とにかく今の経済は、行政の方、いろいろな方ともお話をしますが、私も中小零細企業の創業者で社長をやっておりまして、息子らにある程度任しておりますが、それでももう五十何年やっているのですけれど、昔と今は経済が非常に違っていると。行政の方は、割と新聞を見ていても、アベノミクスで地方がよくなってきたではないですかなんて言う。冗談ではないですよ。とにかく今の日本の経済はどんどん悪くなっているということで、アベノミクスの地方創生のことも私はこの前、県知事の前で言わせてもらいました。やはりこれから地方を元気づけていくためには、自由経済の厳しい空洞化していく日本の現状を知り、地方の中小零細企業、商店が生き延びていく方法を考え、地域がまとまって何か競争力をつけていかないといけない、というよ

うな考えを今、皆さんのお話を聞いていて、自分の考え方も同じだと思って聞かせていただきました。

この三遠南信というのは三河のいいところ、景観のいいところ、長野県の空気のきれいなところ、それと静岡県の遠州の浜松は昔から技術の立国だといってオートバイから楽器メーカーがありものづくりのところなどいいところがある。せっかくこの地域にある工業試験場を、ぜひ生かしてもらいたいという思いがあるのと一緒に、昔から支えた遠州のこの地区を三遠南信3地区が一緒になって、ぜひ復活してもらえればなと考えております。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございました。続きまして新城市商工会の本多会長お願いします。

新城市商工会 本多会長

ものづくりの製造業の立場でしか物が見えないので申しわけないのですけれど、昨年資料で「ヒト・モノ・カネが集まる魅力的な新産業を積極的に生み出していく必要性がある」。「技」の部会でこういう結論が出た。また、「経済・社会・環境などの状況が急速に変化している中で新産業の創出に向けた集積化と連携した展開を具体的に進めていくべきである」と。なのに、内容がちょっと今回違うのかなと。僕も技の分野か、何の分野だったのかなと思いましたけれど。

実は、新城市、東三河、特に私が言っているのはものづくりの立場で見ている、やはり遠州浜松の「やらまいか精神」に学べと言うのです。何で浜松市のようなまちからビッグカンパニーが生まれ、何社かですが中小企業でありながら世界に冠たる浜松を基盤にして世界に打って出ていくという企業があるのか。こんな地域は世界的にもないです。これはやはり浜松の伝統的なやらまいか精神。これは

浜っ風とか何かということが言われますけれど。

やはりそれは、一つは浜松高等専門学校があったからです。私も兄も本多電子、豊橋の本多電子、浜高の出身で、浜松ホトニクスの晝馬社長とか、平安テックの社長とか、それから、いろいろな人に私も会う機会がありました。やはりそういう人たち、先輩に会って、多くの刺激を受けました。やはり、これは浜高の存在。今は静大の工学部になったためにちょっと昔の浜高の復活というOBの運動もいつときありましたけれど、やはりそういう意味で、私の兄も豊橋市が発展するためには技術系大学がぜひ必要ということで技科大の誘致運動に変わってきて実現したと思います。やはり、やらまいか精神、これは世界に冠たるものが私はあると思います。

そういう意味で、先ほど安形産業部長からのお話は大変いいお話で、今日の「技」に関係すると思いますが、要するにビジネスもそうですがうまくやっているところを真似すればいいのです。世界中探してやはりうまくやっている場所がいろいろ、日本でもあるだろうし、そういった意味で私は浜松遠州の人に学ばなければいけないと常日頃言って、吉川さんによく怒られますけれども、私は製造業の立場ですから、そのような見方をしてはつきり物を言います。

そういう意味で、私は遠州そして浜松に学べと。やらまいか精神を学べと。先ほどのお話の中にあつた、具体的に申しますと、びっくりしたのが産業振興担当職員を置いているということです。そういう役所はないのです。新城を見ても。市長がうまく言いますけれど大したことない。実際にやっていること、明確で具体的なことをやらなければいけない。そういう意味で僕はやはり浜松の産業部長、やっていることがいいではないですか。スライドをどんどん回して、やはりそういううまくやっているところを真似すると。ビジネス

も同じです。うまくやっている。あそこの会社はなぜうまくやっているのだろうと。必ずいいところがあると思います。

それと、大事なことは、やはり「株式会社新城社長と思え」といつも市長に言っているのですけれど、トップセールスなのです。ビジネスもそうなのです。売れなければどうしようもないでしょう。販売でなくして事業なし。売れなければどうしようもない。格好いいことを幾ら言ったってしようがない。現実には厳しいのです。企業が赤字になったら倒産するのです。竹刀競技ではないです。真剣勝負です。だから、そういう意味で行政にもそういう分野が必要だなど。そういう意味で僕は浜松の役所でやっている、市長がやはりそういう考えで、やはり市長を教育というか、かなり強い力で進言する人がいるのではないかなと、産業界にいるのではないかと思います。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

ありがとうございました。続きまして吉川会頭をお願いします。

豊橋商工会議所 吉川会頭

今、本多会長が全部しゃべってくださいましたし、海外に進出している会社の責任者でございまして、私から何も申し上げることはございませんけれども、ちょっと総論型の話をしていただきたいと思います。と思っています。

地域経済の発展とか成長ということを考えて場合には、基幹産業でございまして製造業、また地域の特色を生かした観光などのさらなる集積または高度化を進めていくことが必要ではないかと考えております。そのためにも先ほどの発言でも申し上げましたけれども、地元で根差した人材の育成が大事でございまして、地域間競争に勝っていくためには新たな価値を創造できる力を強化していくことが

必要ではないかと考えているところがございます。そのためには、各地域におきましてそれぞれの得意分野があるわけですから、その得意分野を伸ばして、得意分野同士の連携をしていくことによりまして、新しい産業や技術商品開発を可能にする協力体制を整備することが大切ではないかと考えております。

あわせて、これからの経済状況を考えていきますと、人材を国内だけではなくて海外に求めて、国際市場で打ち勝っていける技術や技術者を育成するための研究・教育体制を整備することが必要ではないかと考えております。

産業競争力の強化の下地といたしまして、三遠南信自動車道の整備とインフラ整備を強力に推進いたしまして、本日、皆様からいろいろ発表がありました素晴らしい取り組みを、有機的に結びつけていけるような仕組みづくりこそが SENA の求められるべき事業ではないかと考えておりますので、よろしく願いを申し上げます。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

吉川会頭ありがとうございます。それでは全体を通してご意見があればお願いします。
安形部長何かございますでしょうか。

浜松市 安形産業部長

ありがとうございます。私、産業部でございます。産業部というのは、実は浜松市の場合は3年ほど前ですが、商工部と農林水産部を統合しまして産業部にしました。ですから、私は農林水産業、それから観光も当然含めまして産業部ということで、どうやったら稼げるかということを中心に考えています。

その中で当然、浜松市はもちろんですが、豊橋市さんも田原市さんも新城市さんも皆さん、農業も非常に盛んな地域でございますので、私どもも六次産業化とか農商工連

携とか、あるいは新農業というようなところを非常に今、力を入れてやっております。

何を言いたいかと言うと、浜松市もたくさんの中山間地域が、先ほどお話がございましたように抱えておりますので、ここの地域振興をどうするか。あるいは全体の観光振興をどうするかというようなことは非常に大きな課題だと思っております。そういうことにも非常に力を入れてやっているわけです。今日は説明できませんでしたが、そういうことも推進しております。

この三遠南信の皆様方の会議の中ではやはり製造業を中心に、先ほど私、報告させていただきましたけれども、やはり世界との競争とか地域間の競争の中では、ここはやはりかなり力を入れないと地域が衰退すると思っております。引き続きこの連携を、産学官も含めて従来、長時間やってまいりましたけれども、更に、やはりまだ足りないところが相当あるのではないかなと思っております。

これをどう強化していくのかというのが一つと、もう一つは中山間地域を含めて、例えば産業観光とか、観光資源というのはたくさんありまして、工業も産業観光ですけれども農業もそうですし、自然も食品も、先ほどの飯田線もそうだと思います。全部観光資源だと思います。ですから、そういうものをまとめて、地域振興というのをどうしていくかというの、大きな一つの議論の柱にさせていただければありがたいかなと思っております。

感想は以上でございます。

コーディネーター／光産業創成大学院大学 江田リエゾンセンター長

安形部長ありがとうございます。その他の方はいかがですか。

三上市長お願いします。

湖西市 三上市長

日本は森林がいっぱいあるが、今、木造住

宅がかなりできるのですけれど、どうも外国の材料を持ってくる住宅がすごく多いというように聞いています。考えてみたら、このエリアは森林の宝庫ではないですかと思うのです。あるいは間伐材をうまく使ったバイオマス発電とか、ボイラーに使うとか、いろいろなエネルギーを使えるのですが、もう少しこの木材を、森林を活用した産業をもっとうまくできないのかなと思う次第でございます。

ほとんど木材産業のない湖西市の市長が言うというのも変なのだけれども、我々、木材とまるで関係ない産業ばかりがある町なのですが、もっと活用してほしいなと思います。

**コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長**

三上市長ありがとうございました。田原市商工会の河合会長お願いします。

田原市商工会 河合会長

人材育成というところで一つ気になったのですけれども、「一流に学べ」という言葉がいろいろありました。

実は田原市の商工会の中でも、先ほどの自動車の関係があって、トヨタ自動車の田原工場というのがあります。近くにあるのですけれども、私どもの商工会だと5人以下の小さな商店とか20人以下の小さな企業ということもあり、トヨタさんが持っているノウハウというのをいかに取り込めるかというところがあります。今年、少し工夫をさせていただきました。お願いしまして、「改善の心」とか「見える化」ということに関してのセミナーを5人以下の小規模の事業者向けにつくってくださいという話をさせていただきました。今度11月6日ですけれども、200人ぐらいの方が入ります。そのために何回も打ち合わせをさせていただきました。こんなことも初めてなものですから。

この中で一つだけ気になった言葉がありま

した。トヨタの今の章男社長さんですけれども、改善のところで、「こんなにみんなよく頑張ってくれたね。でも、今よりもっといい方法があるはずだよ」という、ただその言葉だけであれだけの大きな企業が一つの方向にどんどん進んでいくという、その一番のエキスを教えてくれました。

一例なのですけれども、そうした一流を学ぶというところで、多分身近に一流があれば、お願いをして、そのノウハウを地域に生かしてもらえるのではないかなと。お願いをして、やってよかったということでありましたので、1点だけ報告をさせていただきます。

**コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田リエゾンセンター長**

ありがとうございました。本日皆様からのご発言をもとに、「技」分科会の結論として次の3点にまとめをさせていただきます。

一点目として各構成の取り組みとして、国内外からヒト・モノ・カネが集まるような魅力ある新産業および環境の創出・集積を図る。

二点目としてこれを更に発展・拡大させるために必要な人材をどうやって育成するか、県境連携あるいは大学、行政、企業、市民団体の連携という点から仕組みづくりを検討する。

三点目として環境を創出する取り組みの一環として、SENAの事業をどんどん実施していく。

以上です。皆様のご協力により円滑でかつ内容の濃い意見交換を行うことができました。ありがとうございました。以上を持ちまして、「技」分科会を閉会いたします。

7 「風土」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

「風土」分科会では、「塩の道エコミュージアムの形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	NPO 法人三遠南信アミ	理事長	黍嶋 久好
報告者	三遠南信住民ネットワーク協議会	代表世話人	田中 孝治
行政	飯田市	市長	牧野 光朗
行政	田原市	市長	鈴木 克幸
行政	松川町	町長	深津 徹
行政	阿智村	村長	熊谷 秀樹
行政	天龍村	村長	大平 巖
行政	大鹿村	村長	柳島 貞康
行政	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
経済	磐田市商工会	会長	野寄 宏之
住民	みなと塾	代表	加藤 正敏
住民	みらい企画 律	代表	矢澤 律子

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長



皆様、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました、三遠南信アミの黍嶋と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、飯田市長をはじめ田原市長、各町

村長、商工会長、住民団体の代表の方々と三遠南信住民ネットワーク協議会の田中さんにご参加をいただきまして、この分科会を始めさせていただきます。

先の全体会で、新しい SENA の組織についてはご報告があったと思いますが、今回、南信州から駒ヶ根市、飯島町、中川村、宮田村が、西遠から掛川市、菊川市、御前崎市、牧之原市が、商工会では南信州の飯島町、中川村、宮田村の商工会が正規なメンバーとして加わっていただき新たな出発ができたとの報告がございましたので、よろしくお願いいたしますと思います。

本日の分科会には、駒ヶ根の市長さんにおいていただきましたので、また後ほどご報告やご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、進め方でありませけれども、最初に、昨年度の「風土」分科会の報告を事務局からさせていただきます。

続いて、三遠南信住民ネットワーク協議会の田中孝治様から、「祭り街道を活かす活動について」ご報告をいただきたいと思います。

その後に、地域資源の活用事例ですとか工夫されていること、今後の事業にどうつなげていくかということも含めて意見を賜りたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたしたいと思います。

それでは事務局から、昨年度の分科会の報告をさせていただきますので、お聞き取りください。よろしく願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論についておさらいしたいと思います。

前年度、風土分科会では、あるもの探しの三遠南信の底力を探そう、使おうということで、議論がなされました。

1点目としまして、フレッシュな感覚で資源をさらに発展させていくことが必要、そういったものを体系化して、まずは小さな地域ブランドをつくり、そして最後には全体として三遠南信のブランドとして確立していくような整備が必要ではないかということ。

2点目といたしまして、それらをただ並べるだけではなくて、時間軸を追って、いつどのように誰がどうやっていくのかという、そのプロセスを組み立てていく必要があるのではないかということ。

3点目といたしまして、今までつくり上げてきたすばらしい計画をチェック・アンド・トライしていくということがこの次の方向として大事になってくるのではないかという、以上3点が前年度の議論としてまとめたものとなります。

今回の議論のテーマでございますが、塩の道エコミュージアムの形成に向け、自然、歴

史、文化、産物など地域資源を見つめ直し、それらを生かした三遠南信の魅力の発信力を高め、地域固有の商品、サービスの提供により、三遠南信地域における持続的な観光客誘致等を推進する塩の道エコミュージアムの形成をどのように進めるかを、テーマとして設定をいたしました。

事務局からの説明を終わらせていただきます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

昨年度の振り返りと今回のサミットの分科会との接点が難しいかもしれませんが、今、報告がありました三つの視点を少し頭の中に入れていただきまして、今後の議論と合わせていただければと思っております。

最初に三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人の田中孝治様より、「祭り街道を活かす活動」ということで、この三遠南信地域の活動状況等の報告をいただきます。

午前中に住民セッションが行われておりますので、その中のお話ともかぶるかと思いますが、田中さんどうぞよろしく願いいたします。

■報告

三遠南信住民ネットワーク協議会

田中代表世話人

ご紹介いただきました三遠南信住民ネットワーク協議会の代表世話人をやっている田中です。

サミットの開催地が代表世話人になるルールで、私は来年3月末まで。来年度は、三河に変わるという仕組みです。

「風土千年、風景百年、景観十年」という言葉がございます。ここは風土の分科会ですので、千年の人々の暮らしの重み踏まえての議論になりますので、少々重いテーマと感じ

ています。

「交流」「発酵」「熟成」と書きました。上の写真は、先月（平成26年9月14日）開催された「祭り街道の会」の15周年記念のときのイベントの写真です。上の二つ、左が「遠州大念仏」、右が今回、国の重要無形民俗文化財になりました「和合の念仏踊り」です。

実は、二つを見てもみますと似ているところがあります。詳しいことはよく知りませんが、聞くところによりますと現在、「和合の念仏踊り」が踊られている宮下さんの御先祖は遠州のご出身で、その縁で「遠州大念仏」に近いお祭りが和合のほうでもやられているというお話しです。

それから、この二つは「花祭り」ですが、これは伊勢流の雅楽の流れをくんでおり、静岡県北部、愛知県奥三河に非常に広く伝わっているお祭りです。古代、平安時代、室町時代にも、この三遠南信地域は、孤立した山間地でなく、行く筋もの街道を介して京大阪、あるいは東海地域の文化が非常にたくさん流入していました。その中で交流した文化が、時を経て「発酵」「熟成」されてきているものが、これらのお祭りになっているのではないかと思います。

三遠南信地域というのは、今でこそ山間の地であるのですが、我々が考え、想像する以上に外との交流の多かった地域ではないでしょうか。それは今でも変わらないのではないのでしょうか。この地域は、孤立した山間地ではなく、むしろ交流の中でこそ成り立っている地域なのだということが重要なのではないかなと思います。

それから、先ほどから皆さんの話題に出ている新東名は、静岡県内が既に開通、さらに西に伸びてくる。三遠南信道も北に伸びてくる。リニア新幹線の話も出てきます。これから新しい道が出来てきます。ますます交流が活発になりますし、活発にしていかなければなりません。

道をつくるということも非常に重要で、我々住民の立場からも道づくりに協力、参加して行かなければなりません。しかし、さらに大切なことは、新しい道を如何に使いこなしていくか、「道使い」が問われる時代ではないかと思っています。ですから、「道づくり」と「道使い」はセットで考えなくてはなりません。

その中で、私はこう考えています。「人」「物」「情報」の交流がよく出てくるキーワードなのですが、「人が動けば物と情報が動く」、「物が動けば、人と情報が動く」、「情報が動けば人と物も動く」ということで、人、物、情報というものは非常に密接な関係で動いている。物の話、人の話、情報の話を分けないで、この三つを関連させながら、どこか一つを動かすとほかのものが動いていくという関係で、交流というのを考える必要があると思っています。

「道使い」、道を如何に賢く使っていくかということは、道路行政に携わる国交省道路局の方たちとお話をすると、「道をつくりたいのは分かりましたけれど、つくった道をどうやってお使いになるのかも考えて欲しい」といいます。つまり、地域の「道使い力」が問われてくる時代です。道使いの提案如何によって、道路の建設が遅くなったり早くなったりということも出てくるような時代になっているのではないかなと思います。

それからもう一つ、高速道路、高規格道路というのは、交通圏、交流圏を飛躍的に拡大させる力を持っています。地域にとって非常に重要な社会インフラですが、私たち沿道住民の立場からすると、高速道路や高規格道路などの下にある既存の旧道、街道、枝道をセットにして道使いしていくことが、とても大事だと考えています。そうでないと、折角道路が出来ても、むしろ通過地帯になってしまうという心配が無いわけではありません。

ですから、高速道路つくる、高規格道路を

つくる、と同時にバイウェイと呼ばれる下道の利用というものを真剣に考える必要があるのです。むしろ、高速道路ができることによって、下道の価値が下がるのではなく、新しい価値と魅力が創造できると考える必要があります。ハイウェイが広域性、利便性、時間短縮の効果があるのだとしたら、その効果を下道が如何に受けとめるかを考えないと、通過地帯になってしまうという心配があるのではないかなと思っています。我々は、下道をどうやって活かしていくか、これを重点に考え、活動しようとして考えております。

先ほど SENA の説明の中で、SENA は行政と経済界を中心に構成されるという話がありました。SENA の組織構成という点では、それでいいのですが、地域の担い手という点では、「行政セクター」があり、経済界の「企業セクター」があり、さらに地域に住んでいる「住民セクター」が加わって、この三位一体で地域を支えていく必要があると思います。と同時に、「住民セクター」の役割の重要性を我々自身も考えなくてはいけないなということ常々考えているところです。

「地域活性化」という言葉が頻繁に出てきます。我々も地域活性化を目的に組織をつくり、活動しているのですが、では「地域活性化とは何なのか」と改めて考えると、人によって解釈が違います。私は自己流に、「住みたいと思う人が住み続けられること」、そのための諸条件を整えていくということが、実は活性化ではないのかなと思っています。

住みたいという方が住み続けられる条件を、この三位一体のセクターで整えていくと。その中で、我々「住民セクター」の役割があるのではないかと考えております。

「三遠南信住民ネットワーク協議会」の話になるのですが、2005 年の 13 回サミットの時に、住民セッションが始まりました。それ以来、皆様のご支援をいただいてサミットの度に住民セッションを開いてきましたが、

七夕様のように 1 年に 1 回会ってまた別れるという状況でした。2011 年、前回の浜松大会の時に、参加者の中から「1 年 1 回では話がなかなか前に進まない」とい意見が強く出てきました。もう少し日常的に相談ができたり、顔を合わせたり、出来ることがあれば具体化していく、そういう仕組みが欲しいという声が出まして、2012 年に三遠南信住民ネットワーク協議会が発足しました。

発足から 3 年が経過しました。この間、協議会を構成する団体や個人の活動を基本に、協議会自体はプラットフォームの役割で、個々の団体の活動を紹介し、連携の手助けをしてきました。これからも個々の活動や事業を基本にすることは変わりませんが、もう少し協議会自体の方針、活動テーマ、取り組みを整理していかないと力が分散してしまうということで、2013 年、前回の 21 回、飯田大会の折りに「三遠南信『地縁店』の展開」、「三遠南信『祭り街道』の連携」、「三遠南信『芸術・文化・スポーツ街道』の展開」という三つの基本方針というのを打ち出しました。今、掲げた三つのテーマへ向かって動き出しているところです。

現在、協議会加盟は 51 団体・個人です。入退会自由の組織なものですから、正確にははっきり掴みきれないところがあります。会費もありませんので、事務局運営は各当番地区の手弁当で運営しています。

これは設立総会の模様です。今のところ協議会として独自事業をやるだけの事業費がありませんので、仲間を増やししながら、各方面からの支援、協力を仰ぎ、個々の団体の活動や事業を“寄って集って、盛り上げよう”を協議会活動の中心にしています。

それからもう一つ。私自身もそうですが、地域づくりに携わっている間に年をとってしまったという人も結構たくさんいます。そうした方々の貴重な体験、経験、知恵というのは、やはり非常に大切です。

しかし、それだけですと違った感性、新しい発想、新しい知恵も出てきません。そこで、年長者の経験、知恵と、若者の感性と行動力をこの協議会の場でうまくコラボレーションしよう、協働しようということが一つの大きな目標です。

人口減少、高齢化という話も多いのですが、地域の中をよく見ると新しいタイプの若い方たちが増えているのも事実です。IターンだったりUターンだったりいろいろですけれども、その方たちとうまく連携をして、新しい切り口とか知恵を見つけながら前に進んでいこうと考えております。

今年度打ち出した三本の柱は、新規のものというわけではなく、協議会が取り組んできたこと、あるいは個々の活動団体がやってきたことを整理し、三つのプロジェクトにまとめました。

一つは、「三遠南信地縁店」の展開。地域と地域の地縁、歴史的な出来事の地縁、人と人の地縁とか、地域にはいろいろなご縁があります。三遠南信地域の中でいろいろな地縁を探し、いろいろな地縁で結ぶ「地縁店」のアンテナショップを三河地区、信州地区、遠州地区に一店つくっていこうというのが当面の目標です。将来は、地縁展開という形で、各地域に「三遠南信地縁店」を拡大できればいいと思います。

三河店については今、道の駅「もっくる新城」が建設中です。新城市の穂積市長さんからお話がありましたように、私たちも新東名の新城 IC は、三遠南信地域にとって大きなゲートウェイの一つになると期待しています。建設中の道の駅は、ぜひ三遠南信地域、特に三県境に近い中山間地域へのゲートウェイとしての機能、役割を担った拠点にして欲しいと、穂積市長さんと市議会へ要望を出しました。

新城市議会からは採択との通知をもらいました。具体的には、設置者や指定管理者とい

う相手さんがありますので、これから相談させてもらいたいと考えています。いずれにしても「もっくる新城」は、三県境中山間地域の大きな拠点になるのと思っています。

それから遠州店については「まちなか軽トラ市」をやっております。これはもう何年も前から三遠南信地域の特産品を月2回の軽トラ市で販売しています。

また、南信州店については、この席に飯田市の牧野市長さんがいらっしゃいますが、協議会メンバーが天龍峡活性化センター「あざれあ」の指定管理をさせていただいているものですから、その中に三遠南信コーナーも設けています。一応各地区のアンテナショップ的なものができ上がりつつある状況です。

「地産池消」という言葉がありますが、「互産互消」、つまり自信を持ってつくったものをほかの土地の方にも味わってもらおうという意味で、「地産池消」と同時に「互産互消」という圏域循環が必要ではないかと考えています。「地縁店」のを展開は、圏域循環の核になります。

それから、「祭り街道」については、中日新聞さん非常に大きく取り上げてもらいました。「祭り街道」は、遠州街道と呼ばれる国道151号を中心に、秋葉街道の国道152号、それから遠州側の姫街道の三つあわせて「祭り街道」というコンセプトで三遠南信地域の連携を図ろうというものです。

特に、三遠南信地域のDNA、遺伝子は何かと考え、千年の歴史、風土を何で表現するかといたら、やはり一つは“祭り”だと思います。ですから、“祭り”をキーワードにして三遠南信地域がまとまっていく、大方のご賛成を得られる一つのコンセプトになってくると考えています。

ここに遠州街道とか秋葉街道とありますが、街道名というのは一般に向かって行く方向に名前をつけるものですから、例えば信州の方にとっては遠州に向かうときに遠州街道とい

ういい方をします。いずれにしても現在の国道 151 号、国道 152 号が中心になります。また、この「祭り街道」は新東名、三遠南信道のバイウェイ、下道に当たり、沿道連携による下道の新しい価値創造の材料になります。

「祭り街道」は、情報が動けば人と物が動くということで、道の駅を一つのステージに考えています。三河の拠点、遠州の拠点、信州の拠点ということで、各地の祭り関係の施設、あるいは道の駅に三遠南信の祭り情報コーナーみたいなものをつくらせていただいて、この圏域の中のお祭りを紹介しながら、地域活性化に結び付け、あるいは出来ればその地域のお祭りを継続できるような、何らかのお手伝いをしていけないかなと思っています。

特に、「道の駅の連携」を非常に重視しております。ご存じのように、道の駅というのは自動車利用者の休憩やトイレ、道路情報や地域情報提供、特産品の販売という機能を備えています。もう一つ、私はこれからの道の駅というのは地域創成の拠点、道論ではゲートウェイ、下道創成の拠点の役割、機能を担っていくべきではないかと思っています。

しかし、最近の道の駅はともすると物を売ることだけに熱心になってしまって、他の機能のことが少ないがしろになっている感じもしないわけでもありません。道の駅も道路の性格で様々です。三遠南信県境部の道の駅は、大幹線道路の道の駅とは違います。道路利用者と共に、地域の人々が集い、活動する拠点になってもいいはずですが。

道の駅は、災害対応拠点になるという面がありますが、いつも非常時というわけではありません。やはり地域を創成していくための拠点という役割を道の駅に担っていただけるとありがたいと思います。

最後に「芸術・文化・スポーツ」ですが、協議会として事業を直接やるというより、催しやイベントへの後援依頼があればどんどん後援を出しています。また切符販売や誘客の

手伝いが欲しいといわれれば、相互にパンフレットを持ち寄っていただいて宣伝し、お互いに紹介し、チケットを売り、客さんをお互いに増やす応援をしています。「寄ってたかって、盛り上げる」です。催し物応援団という形で広げつつあります。

この芸術・文化・スポーツは若い担い手が多いので、協議会を通して知り合った若手には、他のテーマにもご参加をいただき、若い感性、発想、手法でやってもらいたいと期待し、働き掛けています。

この三本柱が協議会の今年度の事業方針です。来年度は、幹事が三河地区の当番になりますが、具体化の段階で修正を加えながら、何年か繰り返していった内容を充実していこうと思っています。

住民組織のことで、組織力や資金力があるわけではありません。どうしても歩きながら考え、行動していくしかありません。それでも半歩、一歩、少しずつやっっていこうというのが、今の協議会の方針です。

先ほど言いましたように行政、それから経済界、住民というのが三位一体になって地域を支えていくということしかないかと思えます。お集まりの皆さんにもぜひ私たちの考え方や活動をご理解いただき、一緒にやれることがあったらぜひ一緒にやらせていただければなと思っています。

以後の意見交換の材料にさせていただければありがたいと思います。ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

田中さん、ありがとうございます。

お手元の三遠南信サミットの資料集に田中さんの資料がございますのでお目通しをいただきたいと存じます。

今、田中さんから五つほどのご提案をいただきました。新しい道をつくるということとその道を使うという視点では、この三遠南信地域にあります、国道、県道、市町村道、農道、林道を含めた幹線道路とか下道、脇道等の、新しい使い方が生まれてくるのかなと感じました。

何かご質問がございますれば、いかがでしょうか。では、ないということで、進行させていただきます。

それでは意見交換に入らせていただきます。

私からご指名をさせていただきます。12名の方に1人1回は、ご発言いただくということになりますので、発言時間を3分程度ということで、短くて申しわけないのですが進めさせていただきます。

最初の発言は、地域の特色、特長を生かした物産、行事等活用した地域おこし、地域づくりの取り組みと地域資源を使ったプロモーション活動も含めて、ご発表いただきながら情報を共有していきたいと思っております。

では最初に、飯田の市長さんからお願いいたします。

飯田市 牧野市長

それでは、私から口火を切らせていただきます。

ちょうど昨日なのですけれども、テレビでもごらんになった方もいるかと思いますが、浜松市と私ども飯田市との境にあります兵越峠におきまして、峠の国盗り綱引き合戦が行われました。

4年ぶりに信州軍が負けまして、今日ここ

に私はさらし首をさらしに来たという話もあるのですけれども、そのぐらい盛り上がっております。

この峠の国盗り綱引き、今年で28回目を迎え、それだけ長く続いてきたというのも大変意義があることかと思うのですが、もともとの始まりは南信濃村と水窪町の商工会青年部の皆さん方が、お酒を飲み交わしているうちに綱引きでもやりましょうかみたいな話を始めたのがきっかけと聞いております。

それがどんどん話が大きくなって今に至っているわけでありまして、昨日も、それこそテレビ局各局がカメラを並べて、わずか、時間にしてみれば恐らく10分間ぐらいの三本勝負をずっとテレビに収録されていたというような状況でありました。それが、言ってみればこの時期の風物詩として全国に放送されるというようなことになったわけでありまして。

そうした発信力を持ってきたことによりまして、今年度はサントリー文化財団が主催いたしますサントリー地域文化賞まで受賞するというようなお話になったわけでありまして。

やはり、始まりは非常に小さなアイデアだったかもしれませんが、それが先ほどの田中代表世話人のお話の寄って、たかってではありませんが、どんどん盛り上げていくうちに全国クラスの行事に成長していった。第28回ということで、28年続けていくとこれだけのものにもなり得るということを思ったところでありまして。

そういった、最初は小さなアイデアでもみんなで寄って、たかって盛り上げていくうちにきっと大きな流れをつくることもできるのではないかと、そんなふう考えているところでありまして。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

今までの通算で見ますと、信州の国が15勝

でしょうか。

飯田市 牧野市長

15勝13敗。まだ2勝勝っています。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ということですので、ぜひ頑張っていたきたいと思います。

では続きまして、松川の町長さん、よろしくお願いいたします。

松川町 深津町長

私どもの町は、ちょうど南信州の、今日出席をされております飯田市さんと駒ヶ根市さんのちょうど中間に位置をいたしております。人口1万3,500人の町でございます。中山間の町でございますけれども、果物で非常に売り出しております、非常においしい木、果物で、サクランボからスタートして桃、貴陽、ブルーベリー、梨、桃、リンゴということで、年間を通じて果物の、果物狩りで町を非常に売り出しております。

町でございますけれども、直営の温泉がございます。それを単に温泉だけで終わらせないように、その周囲一帯を滞在型にしたいという思いで、清流が流れておりますので、河川敷の公園、それから温水プール、それからパターゴルフ場、マレットゴルフ場、テニスコートというスポーツ施設、そして奥にセラピー基地の認定をいただきまして、癒しの空間ということで森を整備し、それから奥地へ入りますとダムがあるという形。

それから、森林を生かして里山を生かしていきたいということで、フォレストアドベンチャーという木の上、おおむね10メートルぐらいの高さのところをずっと歩く施設を今年整備をいたしまして、その辺一帯を歩いて癒しの空間として楽しんでいただけるということを目指しております。

それから、観光地、観光客を誘客するについて着地型観光を目指していきたいという思いを持っておりまして、農村の空き家の利用、それから昨年からは地域案内人講座というのを設けまして、ボランティアで参加をいただいて、今、地域案内人の皆さんが、今年に入りましてもう1年がたちましたので、今、実験的に地域の案内をするということを始めつつあります。

地域が観光地で来ていただいた方たちへ提案のできる、地元の人たちが考える食、あるいは文化というものを、地元の人たちが提案できる形態をつくっていきたくて思っております。

課題としては、先ほど道使い力という言葉が出ておりましたけれども、三遠南信、リニアの時代を迎える中で、やはりどうしても単体の町村ではキャパシティが知れております。どうやって連携をとっていくか、これが大きな課題ではないかなと思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

今、お話にありました着地型観光に皆様は、どのようなイメージをお持ちになるでしょうか。私は、常在観光だろうと思っております。要するに、あるものを使っていくということですから、あえて着地というのでなくても松川町さんにあるものを使うことが常在観光であって、農村観光になっている。結果的には、地域発の観光になるという筋書きなのかなと思います。その意味では、農業や地場のものを使って新しい観光の展開をしているというご発言だったと思います。

では続いて天龍村の村長さん、よろしくお願いいたします。

天龍村 大平村長

祭り街道弁当の表紙に大きなナスがござい

ますが、これは天龍村特産のテイザナスですが、ナスの事業は12月でございまして、今回は取りやめます。

温泉の話をするようにということで来ましたので、温泉の話を少しさせていただきます。

ご多聞に漏れず、1億円のときに温泉を掘りまして、出まして、天龍村では土地の祭りの名前をつけておきよめの湯という温泉を、今、経営しております。

そこで、単なる温泉だけではということで、村の若い人たちが、ほかへ持って行って温泉をつくったらどうかと。つくるということはできないので、足湯をほかへ持って行って、運んで皆さんに楽しんでもらったらどうかという案が出まして、一部の者たちが足湯の装置をつくりまして、あちらこちらへ今持って行って、足湯を楽しんでいただいておりますが、きっかけは豊橋市の動植物園との話で、豊橋へ一番持って行ってありますが、動植物園に来るお客さんに楽しんでもらうと。同時に村の特産品もその場所で販売させてもらうというような条件のもとで、足湯の事業をしております。

これも、本来ならば湯を運ぶというのは大変なのですけれども、ご存じのように天龍村は中央を飯田線という電車が通っておりまして、その飯田線に混ざって駅がございまして、その駅にステーションビルをつくりました。そのステーションビルの中に温泉をつくって、ちょっと離れた、十四、五キロ離れたところがそのおきよめの湯の場所でございますが、温泉を運んで、駅でも温泉を始めております。

そのためにはどうしても輸送をしなければならぬということで、温泉を運ぶタンクローリーも持っておりますので、いずれの場所へ行ってもそういった足湯ができるということで、豊橋の動植物園を初め、例えば有名な名古屋のマラソン、シティマラソンにも持って行って、走った方に楽しんでもらったと、癒してもらっていると、こういうことを今や

っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございました。

では続きまして駒ケ根の市長様、よろしく願いいたします。

駒ケ根市 杉本市長

今まではオブザーバーということでございましたけれども、正規のメンバーにさせていただいて、今日は初めて出席をさせていただきました。

駒ケ根市、この三遠地区との縁は、実はお隣の磐田市さんと友好都市を結んでおります。これも早太郎伝説という伝説がありまして、うちでは早太郎、磐田市さんでは悉平太郎といいますが、駒ケ根市にある光前寺の早太郎という犬が、見付神社の人身御供のかわりになってヒヒ退治をしたという、そういう伝説に基づいてうちと友好都市関係をしております。

青崩れの途中にも、その早太郎のお墓がありますので、そういう意味でいきますと、まさにこの三遠南信との、古い昔からそういう縁があるのかなと思いますし、今回できる三遠南信道路というのは、私から見ればその早太郎伝説の道かなと、そんなことを思いますと、当時から人々が一番短い道としてこの秋葉街道を中心とした道で生活していたのかなと、そんな感じがしております。

そうした中で、駒ケ根市、これからいよいよ市制60周年を迎えました。新たな、これから第4次総等の作成をさせていただきまして、その中の大きなキーワードの一つの三遠南信自動車道がいよいよ現実のものとなったということ。

それから、リニアの中央新幹線も現実のものになった。これから多分13年、リニアが13年後です。三遠南信道路も多分そのころには

開くのではないかと考えておまして、いろいろな意味で少子高齢化と言われておりますけれども、そういう中であってもこの三遠南信、230万の規模の中の一員となることによって、経済効果等を生かして地域の発展を図っていきたく、今、そう考えておまして、実は具体的には交流人口を新たに200万人増やそう、それで1人1万円お金を落とすとしていただこうと、そんなことを思っています。

そのキーワードが、二つありますけれども、一つ一番大きいところは駒ヶ根市青年海外協力隊の訓練所、JICAの訓練所が日本に二つあるのですけれども、駒ヶ根市と二本松市、その訓練所を生かした国際交流のできる場所をつくっていきたく、今、大使村構想といったようなことを立ち上げておりますけれども、JICAボランティアは全体で4万人近くが発展途上国に行っておりますので、そういう人たちの活動や、いろいろな国の食とか文化とか、そういったことに触れられるような、そういうことをしてまた新たな発展基盤をつくりたいというのが一つあります。

あとはやはり健康ですね、健康長寿といったことをキーワードにして、そこに来て、やはり自然環境の中にいるだけで健康になれると、そのようなことを、二つを大きなキーワードとして新たな発展基盤をつくっていきたく、今、そう考えておまして。

こういったことは、先ほど松川町の町長さんからも出ておりました。1市町村のみでやってもなかなか魅力は高まりません。そういうことになると、私はぜひストーリー性を持ったような物語を必ずつくっていくことが一番重要なことだと思っています。

今回、塩の道ということですので、今、駒ヶ根市はゴマをつくっていますので、第6次産業化でゴマをつくり出して6年目で、今、今年8トンぐらいできましたかね。塩にゴマを入れて、ごま塩になりますかね。そんなこともできるかなと思いますし、今の、あ

とは、町おこしといえばソースかつ井でB-1グランプリに出ておまして、先週ですか、秘密のケンミンショーで長野県、福井県、群馬県のどこがかつ井かと、取り上げていただいたりしましたので、先ほど、ちょうどこのソースかつ井も取り組んで20年になったのです。やはりそういった20年、着実に取り組んできたことがやはりマスメディアにも取り上げてもらったのかなと思いますと、やはり地道な取り組みがまた一方では必要なのかなと、そんな思いがしておりますので、そんな町おこしをしていくためにも、よりよい、この三遠南信の中での連携ということをしていければいいのかなと思っています。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。すばらしいメッセージを送っていただきまして、ありがとうございます。後ほどご議論いただきたいと思っております。それでは、磐田市の商工会長さん、よろしく願いいたします。

磐田市商工会 野寄会長

奇遇といえば奇遇で、駒ヶ根市さんと初めて正会員になられてお隣に座らせていただいて、本当に奇遇で、これを機にますます連携を深めていきたく、今、そう考えておまして。

それから、先ほど、我々は「しっぺい」というのですが、去年の「ゆるキャラグランプリ」に出まして9位ということで、参考に浜松は2位ということだったので、今年も磐田市はチャレンジをしておりますので、ぜひ1票を入れていただいて、2位といわずにぜひ優勝をしてみたいなと思っています。よろしく願い申し上げます。

それから、我々磐田市商工会は6年前に4商工会が合併をいたしました。合併区域は、海岸部と山間に接する農村部の豊岡、豊田、竜洋、福田という形で合併をいたしました。

その4商工会の合併効果をどのような形で具現化をしようかということの企画として、何があるのだろうと考えてきたわけですが、その検討した結果、磐田スイーツを開発しようじゃないかということで、第1回を平成23年度に実施をし、本年度は第4回目となっているのですが、戻りまして、その目的は何なのだということをお話しますと、第一に、商工会が合併をして統一事業をすることによって従前の商工会の垣根を取り外すためのきっかけづくりにしたいなという思いがまずありました。それから第2番目に、先ほどから申し上げましたように農商工連携、6次産業化事業の一環として取り組んでまいりたいと。それから、その実行委員会には行政から磐田市、磐田市商工会議所、それからJA遠州中央、それから磐田市菓子組合、加えてまして産学共同事業との思いも込めまして静岡農業大学、それから磐田農業高校も参加をいただいております。

それから、そのスイーツコンテストをすることによって地元の農産物の確認と広報を市内外に発信をする、コンテストを活用して、ツールとしてそれを利用してまいりたかったということがありました。

それから、第4点目としまして参加型イベントをつくりたかったわけです。観衆になるだけではなくてイベントに参加をしていただいて、それを大きな一つの事業にしたかったということ。市民が参加をしていただく、将来的には審査も皆さんにお願いをする企画も考えております。

それから、今まで使用されておりました農水産物は、やはり我々は磐田地区なものですから、エビイモがやはり多く素材として使われました。それからチンゲンサイであるとか、長ネギ、トマト、メロン、そのようなものがありましたし、水産物もシラスが一時入ったことがあります。

3回開催しましたが、1回目は磐田トマト

の輝き、これはババロアのようなものでした。第2回目の優勝は、磐田の味をそのままにということで、これはエビイモを使ったパウンドケーキのようなものでした。それから第3回目、去年ですが、エビイモチップス、これはやはりエビイモなのですけれども、ポテトフライふうにやったのが最優秀ということで、かなり市民の皆さん、それから市内外の皆さんも参加をしていただいて、3回目であるのですが、先ほど言われたようにこれを20回、30回と開催し、メディアにも取り上げていただけるような事業にしていきたいと努力をしているところです。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

後ほど議論で振りかえりをさせていただきます。

続いてもう御一方、住民団体から参加いただいております、みらい企画・律の矢澤さんお願いいたします。

みらい企画 律 矢澤代表

お手元に資料と冊子を2冊お配りしてありますが、それに基づきまして説明させていただきたいと思います。

一昨年、三遠南信エリアの文化を全部網羅した本を5シリーズ発刊しました。その2冊、祭り事典と特産事典が今日関係しておりますので、それをご覧いただきまして、非常に、この本に紹介されていますように、三遠南信地域の文化は豊富でしかもバリエーション豊かです。南信州だけで見ますと、長野県内には国指定の祭りが九つあります。そのうちの五つが南信州の祭りで指定されていますので、とにかく伝統ある祭りを全国の人たちに発信し、ここに来ていただきたい。そして、お金を落としていっていただきたい。それにはやはり、新鮮な感動や喜びが大切に

す。

そこで、私は南信州交流の輪というところの会員ですけれども、この一番の強みである祭りとバリエーション豊かな食を融合させた祭り街道弁当を開発し、南信州のブランドにして全国に発信しようと考えたのです。これは、全国でも初の企画だということで非常に期待されております。

そのプロジェクトを昨年発足し、3カ年を第1ステップとして、今年は試作の年としました。まつりは春夏秋冬、それぞれの祈りのテーマがあります。その中から第1弾として選んだのが、冬の霜月神楽です。霜月神楽は、南信州では飯田市上村、南信濃、天龍村で12月から1月にかけて行われます。

この霜月まつりは、新しい命をいただく祭りとして有名です。湯立てを行い、その神聖な湯を神様がいただき、そして人もいただくということで、生まれ清まるということです。

では、それを食にどのように演出するか。さらに、祭り食は神仏への供え物でもあり、その土地の旬の食材を使った伝統食でもあり、和食です。最後にチラシをつけておきましたが、いよいよ来月11月8日に阿南町かじかの湯でお披露目されます。霜月神楽を代表して、天龍村坂部の冬まつりを鑑賞した後、オール竹の器です。神楽舞と名付けた祭り街道弁当を食べていただきます。80食限定ですが、既に地元や浜松、豊橋、東京からのお客様で完売となっております。

食の全てに霜月神楽のキーワードを盛り込みました。食事が終わった最後に清め湯を飲んでいただき、生まれ清まりを体感していただくという、そういった趣向にもなっております。

お客様の反応がどうでしょうかということで、楽しみにしております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございます。

一巡目のご発言をいただきました。地域資源をどう使ってどのような地域おこしを取り組んできたのかのご発表をいただきました。共通しているところは、20年ですとか28年とかかなりの年数をかさねてというのでしょうか。

お聞きいただいたように、イベントがあったり農産物があったり、それからJICAや海外との交流の事例が紹介されました。それぞれの取り組みの中から、地域の資源を使って工夫をされたということがお聞きいただけたと思います。

では、これをどのように繋ぐのか、広げるのか、掘り下げるのかが課題となってくると思います。それぞれの方がおっしゃったように、基本的には主要な道路や道という交通基盤がやはり必要なのかなと思います。三遠南信道路という新しい道と生活しているこの地域の中の道という地域資源を使って新たな知恵を出し、外との交流をしながら地域へ人を呼び込むことも一つの手立てになるのかなと受けとめました。

各市町村さんからは、事例を出していただきましたので、これを受けとめていただき、それぞれの工夫、知恵をぜひ共有していただければと思っております。

では、次に進めさせていただきます。地域資源を使って、具体的に外に向かってのプロモーションや交流者・ファンづくりをした視点から、どのような工夫をされたのか、手立てをしてきたのかを含めてご発言をいただきたいと思います。

発言順でございますが、田原の市長さん、阿智の村長さん、天龍の村長さん、大鹿の村長さんと民間団体のみなと塾さんの順でお願いしたいと思います。

では最初に、田原の市長さんから、ファン

獲得のための工夫と併せて事例のご報告をお願いいたします。

田原市 鈴木市長

愛知県が一番南端の渥美半島の田原市でございます。

さきほど、矢澤さんが紹介された特産辞典の10ページに渥美半島どんぶり街道の大変おいしそうな写真を掲載していただきまして、ありがとうございます。私ども地域、渥美半島は何ととっても農業産出額日本一でございます、キャベツ・ブロッコリー・トマト・セロリなどいろいろな野菜が生産されていますし、畜産物も非常に豊富でございます。三方を海に囲まれて海の幸にも恵まれております。

渥美半島が一つになったのが平成17年、何か地域資源を使って特産品を開発しようじゃないかという動きの中で、国土交通省が取り組む日本風景街道に渥美半島は菜の花浪漫街道という形で登録することとしました。また3町が合併したことで道の駅も3か所ございました。この菜の花浪漫街道の道、道の駅を使った形で何ができるのかを話し合い、渥美半島の豊富な食材を活かした手軽な「どんぶり」がいいということになり、平成21年1月にどんぶり街道がスタートしました。

当初、募集したところ全体で22店舗でございましたが、非常に好評のため、2年ごとのサイクルでリニューアルしようということとなり、平成23年には30店舗に増えました。これも一般公募をしながら、審査をして、選んだ店舗数でございます。また2年後の25年1月からは43店舗に増えています。よりどりみどりのどんぶり、テレビなどのメディアに度々紹介されており、非常に好評であります。今では、年間約12万食、月に約1万食が渥美半島で消費されております。シーズンとしては、菜の花まつりを開催する冬の時期と夏が中心となり、ずいぶん定着してきたのか

など。

ただ、やはりこういった事業というのは継続性が必要です。どんぶり街道の手形をつくって、スタンプを集めていただくと記念のどんぶりがもらえる。今はもっとリピーターを獲得しようということで景品、半分達成するとメロン狩りの券、あるいはイチゴ狩りの券をお渡しし、また渥美半島に訪れてもらおうとか、そういった工夫も凝らしています。来年1月から新しいスタートとなりますが、半分の店舗で新メニューに変更するなどして、リピーター客を獲得していこうとしているところでございます。

一方、全国展開のPRとしては、東京の百貨店に一部店舗が行き、どんぶりを売り出しています。さらに、全国井サミットというのが平成22年から開かれておりまして、これにも参加しております。近いうちには、この渥美半島田原で全国井サミットを開催してみたいと思っております。

また、渥美半島の太平洋岸は、サーフィンのメッカにもなっております。年間を通じて15回ぐらいの大会があり、本当に大勢のサーファーが訪れております。このサーファーに手軽などんぶりが人気であるということで、全国から来た若者たちが、全国各地に戻ることで、ロコミの宣伝をしていただいているのではないかと考えております。

コーディネーターノ

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

では続きまして阿智の村長さん、お願いいたします。

阿智村 熊谷村長

では、南信州の昼神温泉があります、阿智村でございます。

もうまさに、先ほどからいただいております地域資源のこととか、やはり祭り街道のこ

とという、伝統文化というのは非常に大切な三遠南信のキーワードだと思います。

私もみらい企画さんが編集していただいた祭り辞典の中の、51 ページに、阿智村に清内路というところがありまして、その手作り花火がありまして、これが280年間も続いている伝統行事でございまして、これが本当に、全国からこれを見たいと来てくださる方が多くおりまして、もう日も10月6日と、10月上旬の日曜日と決まっていますが、土曜日かな、決まっています、本当にこういった伝統文化をやはり続けることというのはすごく大事だなと思いつつながら、私も実感をしています。

そうやって、その中でやはり地域資源とか伝統文化をどう生かすかという、プロモーションとか、どう広告宣伝していくかということが重要だと思いますので、非常にそこがどんなことでも悩ましいことだと思うのですが、そこで、私も阿智村なのですが、全体会でも発表会させていただいたのですが、例えば星がきれいとかいろいろとあるのですが、阿智村も、先ほど松川町長さんとお話いただいたように、全村博物館構想というような構想をつくって、要は滞在型で、村の中どこへ行っても観光、いろいろな面で勉強ができるし観光もできますよというような思想で、うたい文句でやっているのですが、そこをどうプロデュースしていくかということが、やはり温泉もありますので、自分たちの力でいろいろなところに、こうやってキャラバンを組んだりいろいろやっているのですが、ただそれだけではやはり追いつかないものですから、私も、温泉もあるということでございまして、JTBさん、大手旅行代理店さんと提携を結ばせていただいたり、あとは広告代理店さんと結ばせていただいたり、あとは企業さんと結ばせていただいて、実はプロデュースとかプロモーションを行っております。例えば、星の関係もJTBさんと組んでそ

ういったことで広告をしっかりと打って、もうターゲットは中京圏とかそういったところにしっかりとやりました。あと、毛利衛さんという宇宙飛行士を呼んでそういった企画もやり、要は温泉とセットでそういうのに来てもらいましょう、温泉とセットでこういう伝統文化を見てもらいましょうというような企画を、地域型観光ということでJTBさんも思想と一緒に組んでいただいて、やっております。

また、広告代理店さんともお願いをしまして、この前なのですが、ダイハツさんと組ませていただいて、オープンカーの新車の発表会をさせていただいたものですから、それを、オープンカーを開けると要は星が見えるとか、そんなようなことで全国のオープンカーの持ち主を募集いたしました、阿智村に来ていただいて、阿智村を走り回ってもらったという、そういうようなことで、ちょっと一風変わった戦略でできたのかなと思っています。

もちろん、自分たちの足でしっかり宣伝とか観光をしていかななくてはいけないと思いますが、やはりそういったこと、借りることも一つの重要なことかと思っておりますし、そういったことでこの三遠南信も連携してやるということも大事だと思いますので、一つ、これもやっていたことの例でございまして、報告させていただきます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

ときには、企業さんとの連携が必要であると強調されたと思います。JTBさんとの連携での新たな地域型観光をつくり出していることのお話だったと思います。

では続きまして、大鹿の村長さん、お願いいたします。

大鹿村 柳島村長

大鹿村は、南信地域では一番北だったので

すが、今度は広くなりまして、駒ヶ根さんとか宮田村さんが加わられましたので一番北だと言えなくなってしまうのですが、南アルプス赤石岳のふもとにあります。人口1,100人ほどの小さな村でございます。

地域の行事としては、大鹿歌舞伎があります。春と秋の2回の定期公演が行われておりまして、お客様が大体村の人口以上に集まっていただけという文化を継承してきているところがございます。

この大鹿歌舞伎を題材に、大鹿村騒動記という映画をつくっていただきました。これで大鹿村の名前が非常にメジャーになったのかなと思っております。

この歌舞伎なのですが、いわゆる農村歌舞伎ということで、やはりこの祭り辞典の中の目次を見ていただくと、この中だけでもそれぞれの地域の歌舞伎が四つほど載っております。この地域の歌舞伎の交流会をもう20年近くやっておりまして、毎年3地域を持ち回りで演じているところがございます。今年も11月の終わりでしたか、佐久間町だったかと思えますけれども、行われるようになっております。そんなつながりがこの地域の中にあるのかなと思っております。

大鹿村の特徴ですけれども、1,000人の村に博物館かよということはよく言われるのですが、地質学上、中央構造線という大きな断層が村を縦断しております。それを題材とした中央構造線博物館というものがあります。地質を主体とした南アルプスのエリアを、ジオパークの認定を受けております。今年はこのジオパークについて伊那市と一緒にやっておりますので、全国大会が開かれたということもありますし、ユネスコのエコパークの指定も受けました。そのように、貴重な地質、また動植物の存在する場所として非常に注目されてきております。

こういうことになりますと、表現はよくないのですが、比較のおたくっぽい方は、よく

お見えになるということで、このような面での興味を持たれている方の来訪が増えていると思っております。

そんな点を含めまして、大鹿のサポーターとして現在募集を始めたところでございます。登録者にはいろいろな情報を流して、広めていただきたいと考えて、今年度からの取り組みになっております。

最後に、ちょっと的外れになるかもしれませんが、大鹿村からすると、皆さん力を入れておられる三遠南信自動車道がずっと、152号を併用しながら飯田市上村までずっと北上してきます。そこからなぜかずっと西の方へそれていきまして、大鹿村の方には近づいてこないというのが現状でございます。今でもこの国道152号は冬季閉鎖になっているというような状況でございますので、今後、今度は駒ヶ根市さん、それから伊那市さん、さらには地の諏訪の方へつながっていくためには、この152号が国道で通年の通行ができるようになるというのが、我が村の夢であり望みであり、また皆さんのご協力をお願いしたい部分かなと思っております。よろしく願いいたします。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

天龍村の村長さん。

天龍村 大平村長

先ほど、私は温泉のことを言いました。

温泉もやはりいい湯ということで、宣伝のために足湯を運んでおります。大変、皆さんに好評をいただいておりますし、ある道路地図の会社が全国でベスト10をやったときにも、中部、南信、北陸の温泉の中でナンバーワンの名称をいただきました。

そういういいお湯ですから、皆さんに知っていただいてぜひ来ていただきたいというこ

ともあって、足湯を運んでおりますが、ただ私は天龍村のお湯だけではやはり自分だけでございますので、近辺のそれぞれの温泉を交互に運んで、それぞれ紹介をしたいという、そういうことも企画しておりますので、ぜひご希望の温泉がありましたら一緒に運んで、一緒にといても一緒にするわけにはいきませんので、それぞれ運んでその線でも努めさせていただくと、こういう企画もしておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。

では、みなと塾の加藤さん、お願いいたします。

みなと塾 加藤代表

みなと塾は、地元のこと、三河湾のこと、豊川のことなど身近なところを勉強してみようと定年になってから始めました。

私は三河湾に面し、豊川の河口にある前芝に住んでおまして、学校を出てから5年間ほど家業の海苔養殖業をやっていたのですが、昭和の40年当時、いわゆるあの頃は工業化というか新産都市がどうかという、そういう時代で、漁業補償の話が出てきたので、陸へ上がったわけなのですが、定年になってから改めて海岸を見てみると、私が当時浜に出て海苔を採り、アサリを採っていた浜と大分様子が変わっていました。

愛知大学で豊川流域圏講座というのがありまして、それに参加させてもらっているうちにいろいろ仲間ができて、そこから具体的に活動を始めたわけなのです。

まず、第一番に始めたのは地元を知ろうということでした。地元を知らずに外のことをせつせとやっておられる方が割合多いのですが、みなと塾は地元の昔のこと、歴史から今現在のことまで含めて、得た情報を「みな

と塾」という機関誌に掲載しまして、広くお配りをして目を通してもらっております。

今、65号を発行しました。創刊号は7部だったわけなのですが、今回は600部を印刷しました。それをお配りさせてもらっています。

三河湾については昔とは大きく変わっているわけですが、今の三河湾しか知らない人には昔の三河湾の様子を知ってもらわないと、今の三河湾がいかに汚れているかということがわかりません。昔と今を比較して、これではいけないと認識してもらうために、昔、きれいであった頃の三河湾の資料を集め、写真を集め、お年寄りから昔の浜の様子を聞き取りし「みなと塾」で発表しています。ということで、現在「みなと塾」を通して、このままの三河湾でいいのですかというところからスタートしております。

その中の一環として、南信の関係でいきますと、前芝海岸へ当時遊びに来ていただいた方にアンケートをとらせてもらっております。アンケートをとるについては、ピンポイントになるわけですが、その結果を「みなと塾」で発表しています。

飯田市の方だとか下伊那郡の売木村の方だとか、阿南町の方だとか、ここにお見えの矢澤さんも、私は子供のころ前芝海岸へ行きましたよという返事をもらっております。

そういった材料を寄せ集めて、昔の三河湾はきれいで、前芝海岸はこれほどにぎわっていたのだよということを、今、証明をしている最中です。

具体的には、飯田市のあるグループと交流会をする、豊川流域の関係の方との上下流の交流会をする、それから昔の海苔づくりの道具づくりをしてみようとか、昔の古い写真を集めて前芝海岸の写真展をすとか、できるだけ、みなさんに三河湾に関心を持ってもらおうという取り組みをしております。

この三河湾で現在とても貴重になった地域資源、地元では種子アサリと言っていますが、

アサリの稚貝が注目されています。この種子アサリが六条潟の浜で湧くように採れています。このアサリの稚貝を採り、愛知県内の各浜へばらまいて養殖をし、各浜で潮干狩りを行なうとか、生アサリを採って販売ルートに乗せるなどしているわけですが、その愛知県のアサリが全国生産の6~7割を占めているのです。この現実をみなさん承知しておいて下さい。三河湾はこれだけの地域資源を持っているところなのです。

それから、昔は海水浴、潮干狩りで年間10万人も人を集めた浜なのです。それが今は泥の浜になっているということで、人が寄りつかないようになってきました。

しかし昨年、どこからどう現れたのかわからないのですが、40年余消えてしまっていた幻のハマグリが、突然10センチメートルもあるような大きなハマグリがひょこひょこ出てきて、前芝の浜はどうなっているのだというのが、去年、今年の状態です。

ですから、地域資源は確かにみんなで創り出すことも大事なのですが、昔からある自然のものを大事に保全する、うまく使う。それが本当の意味での地域資源の活用になるのではと思うところです。ということで、三河湾をできるだけ守っていきこうと活動をしております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございました。皆様には、もっとお話いただきたいと思うのですが、この会場は5時迄との制限を受けていますので、ご協力をいただきたいと存じます。

今、地域資源を使って村おこし、地域づくりをする中で、そのファンをどのように確保したのか、その仕組み、知恵についてご発言をいただきました。それぞれの市長さん、村長さんともユニークな取り組みというのをされていることお披露がございました。

行政の役割、企業さんの役割、地元の人たちが絡み合っていないとうまくいかないことの指摘が、それぞれのご発言の中にあつたと思います。こうした取り組みの情報を広域のあるいは小域で束ねていく仕組みや組織が必要であろうし、それがSENAさんであり、市町村さんであり、観光協会さんかもしれません。いずれにしても束ねる機能がないとすればご発言にあつたネットワーク化ができないのではないかと思います。一つの課題として、提起をされたら受けとめたわけでございます。

それでは、最後の発言となりますが、事前に発言の方々からアンケートに回答をいただいております。その中の「地域連携」について伺います。連携というものが必要なのか、方向はどうなのか、課題は何なのかということをご発言いただけて締めたいと思います。

6名の方を指名させていただきますが、3分以内でのご発言をお願いいたします。

では、飯田の市長さんから、お願いいたします。

飯田市 牧野市長

この後どういうふうにごこうした地域資源をしっかりと守り育てていくために連携していくかという、そんな話になっていくかと思いますが、ちょうどSENAも新しい組織に衣がえして、SENAの構成員自体が拡充されたということもあるかと思います。そうした中で、外部への発信力も当然高めていかなければならないわけでありましてけれども、それとともに三遠南信のお互いのことをお互いに学び合うと、そういう意味でこのみらい企画さんがやっていただいたこういった祭り辞典やこのような辞典シリーズ、こうしたものは大変有効な試みではないかと思うのですけれども、かなりそうした、それぞれの地域の皆さん方が一生懸命いろいろなことをやって成果を出しているわけでありましてけれども、やはり三遠南信

の中でそうした情報を共有し合う、そういった仕組みというものをますます充実させるために、うまく SENA の組織も使っていくことができると、そんなことを思っております。

それを通した中で、内外の発信力を強めていく。三遠南信といってもまだまだ、外に向かって見ますと三遠南信って何と、それってどこという感じのところがあるわけですが、やはりこうした三遠南信というこの地域、圏域自体も外へ向かっての発信力を同時に高めていくということがやはり大事ではないかなと思います。

そのために、行政、あるいは三遠南信住民ネットワーク協議会、あるいは産業界の皆さん方、それぞれの個々の努力だけではどうしても足りないところがあると思いますので、いかにこの連携した仕組みをつくっていくか、そのための SENA の役割というのは相当大的なものになっていくかなと、そのように思っております。

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございます。

では続きまして、田原の市長さん、よろしくお願いいたします。

田原市 鈴木市長

冒頭にネットワークの田中世話人の基本となるお話、報告がございまして、そこで思いましたのが、地域の活性化を図るため国を挙げて6次産業化を進めているけれども、それぞれ道の駅にある山や海の特産品が6次産業化の産品ではないかということ。そうした中で、やはり道の駅をどう活用していくか。三遠南信には道の駅がたくさんあり、海の幸、山の幸がいっぱいありますので、道の駅のネットワークを構築することでうまく進めることができるのではないかと思います。まさに地縁店というのはそういう発想ですよ。

地域の中でお互いを知り、お互いで支え合うという仕組みができるのではないかと。これは全体でやると大変かもしれませんが、個別で道の駅同士で行う方法もあるし、SENA でコーディネートしていただくこともあるかと思っています。

昨年も紹介させていただいたのですけれども、貧しいときの渥美半島の農家は芋をつくっておりました。今となり、昔ながらの芋を育て、亀若という芋焼酎にしています。田原市内で醸造ができないため、飯田市の喜久水酒造にてお願いしております。残念ながら、去年は2,000本で今年は5,500本の販売ですので、田原市内と一部豊橋ぐらしか販売されておられません。非常に好評のため来年はさらに倍増しようとしています。このように、三遠南信地域の中で6次産業化という芽もまだまだあるのではないかと思います。

今日は、亀若という芋焼酎を持ってまいりましたので、ぜひ交流会で味わっていただきたいと思います。できたら、ロックでちょっと水を入れると芋の味がしておいしゅうございます。

いろいろな道の駅や販売店で、三遠南信の美味しいお酒を販売しています。三遠南信の中で自分たちの圏域ではこんなおいしいものがいっぱいあるじゃないかというような情報の共有化、あるいはその販売を行っていくためのネットワークやアンテナショップの仕組みをつくっていくとおもしろいのではないかなと思っています。具体的にやれるところから行動することが一番、今は大事じゃないかなと思っています。

コーディネーター／

NPO 法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、どうもありがとうございます。

続いて、松川の町長さん、お願いいたします。

松川町 深津町長

今までのお話の中にもちよくちよく出てきましたけれども、どうプロデュースしてどう連携をとっていかということに尽きるのではないかなと思っております。

それぞれの地域にはそれぞれの宝があり、今もお話をお聞きしておりますと、皆さんそれぞれに、一生懸命それを発信して何とかやっていこうと。それらがどう連携していくか。

まずはやはり、基盤整備をきちんとする中、三遠南信、あるいはリニアのみならず、今度はそれぞれの県道、町村道、どこをどのようにお客さんに通ってもらって、どのように動いてもらうかということプロデュースしていく、連携をとっていくことが非常に大切ではないかなと思っております。

それがこの三遠南信サミットの関係の中で、一歩でも二歩でも前進をしていけばいいなと感じております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

ありがとうございました。

では、駒ヶ根の市長さん、お願いいたします。

駒ヶ根市 杉本市長

いずれにしても、情報発信をしっかりしていかないことには興味を持ってもらえないわけです。

個別の基礎自治体など、地域では、今、頑張っているというお話がございました。そういう中に、先ほど田中さんからもお話がありましたけれども、やはりその地域における歴史とか風土とかかわりというのですか、そのようなことにどう位置づけるか、それをさらに、何かストーリー性を持たせてどのように情報発信をしていくかが非常に大事ななと思います。

そういう点で言いますと、昔は何とかあれ

ば秋葉街道とか何とか街道とか、連携づけるのは152号とか151号ではおもしろくないので、何とか街道とか何とかの道とか、そういうのはアイデアだと思うのですよ。みんなが興味を持ってもらえると、自然とその道を行けばいろいろな地域の中を回って行って、それぞれの地域の歴史とか伝統文化、また食、そういうことに行き会えるとなればおもしろいかなと。

私はそんな感じがしていますので、ぜひ何かストーリー性を持たせ、またそれぞれが連携する三遠南信というのを、何か新しい言葉があるのか、その言葉がいいのかどうかわかりませんが、みんな発信するというのをこのSENAの中で十分みんなが話し合い、魅力を持たせていければ、いよいよ三遠南信道路が開きますし、そのインフラに合わせておくれられないように前々からそういう発信をしていくことが、開けばこうなるよという、そういう情報発信をしていくことがこのSENAの果たす大きな役割かなと、そのように思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

三遠南信道路を新たな街道として使う手立ても必要であると受け止めました。

では、磐田市の商工会長さん、よろしく申し上げます。

磐田市商工会 野寄会長

私は、マーケティングの側面から言わせていただきますと、今、先ほどのシンポジウムにも言っていましたけれども、少子高齢化が非常に急スピード進む中、ターゲットを国内だけでいいのかと。

やはり、ここは外国人にも、来ていただいて、魅力ある三遠南信の素材を堪能していただくという努力もしていただきたいと思います

思っております。

たまたま、私、昨日台湾から帰ってきたのですけれども、そこでいろいろな観光業者の方にも会ったのですけれども、中国人も韓国も台湾も、特に台湾の人は日本が大好きだそうです。何回も来たいという気持ちがすごくあるのだそうです。

そういった意味では、ものすごい将来性を日本、特に三遠南信は持っているのではないかと思いますので、そこらも切り口のの一つとして考えていただければなと思っております。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

では、最後に民間団体のみらい企画・律の矢澤さん、お願いいたします。

みらい企画 律 矢澤代表

さっきのチラシの前のところ、A4判の横位置でプリントしたものがあつたのですけれども、私はこれをしみじみと見て、こうしたいと、このようにしていきたいというのが強い思いです。

やはり、昔飯田は山の都と言われていたのですけれども、山の都の復活、このためにどういうふうにしていこうかなということで、それで駒ヶ根の市長さんからもストーリー性とか物語ということのお話が出たのですけれども、やはり発信力の一つというのは物語性というのは非常に重要な要素だと考えております。

その物語の中に人々を呼び込んでいくと。だから、祭り街道弁当もその一つだと考えております。

物語というのは無限大にありますから、人々の感性とか知恵とかアイデアでどんどん膨らんでいきます。祭りや食文化は歴史ある伝統文化ですので、その基本はきちんと学習する、そしてさまざまな人のかかわり方は多

様ですから、その斬新な考えも取り入れて、その人たちと一緒に活動を広めていく。

今回、11月8日は阿南町かじかの湯の温泉施設で天龍村坂部の冬まつりを鑑賞します。このように、行政枠を取っ払った一体化した取り組みでこの地域全体を文化面で底上げしていくということは、経済効果にもつながると思います。その一步を11月8日だと考えております。

飯田市長さんもいらっしゃいますけれども、リニアの飯田駅ができます、13年後に。そのときをイメージすれば、世界中から訪れるお客様にすばらしい町だと言ってもらいたい。ですので、駅近くに365日、欠かすことなくお祭りやイベントが楽しめ、食事もでき、買い物もできる、そういった集客型のホールがあつて、まずそこで地域文化を満喫してもらおう。そこからまた次の喜びにつながっていく。そういうおもてなしがこれからはすごく大切だろうと思います。

コーディネーター／

NPO法人三遠南信アミ 黍嶋理事長

はい、ありがとうございました。

終了時間まで、あと10分ということで制約を受けています。本来ですともう一巡ご発言をいただくところですが、できなくなつてしまいましたのでお詫びをさせていただきたいと思います。

それで、分科会のまとめとして次の要点に整理したいと思います。

一つは、各市町村長さんからは、地域資源を使った地域の取り組みとその事例をご披露いただきました。具体的なプロモーション、外のファンをどう獲得するか、その工夫について明らかにしていただきました。個々の市町村さんの取り組みが大事であることは、重々分かるのですけれども、境を越えて連携やネットワークを図るためには、具体的なもの・ことをどのようにつくり出すのか、繋いで行

くのか、中間的な支援組織等の在り方が問われると思います。

二つは、三遠南信の広域と小域での連携です。私たちは、住んでいる隣の市町のことを意外と知らない。連携というのであれば、市町のことをきちんと学んでおくことも大事であるとの議論もありました。具体的には、飯田市さんと田原市さんのお酒の関係ですとか、磐田市さんと駒ヶ根市さんのごま塩の関係ですとか、小さなことかもしれませんが、その小さなことが意外と見過ごされているのかなと受けとめました。

そのことを踏まえて、自分たちの足元をきちんと見て、小域で何ができるのか、広域での役割分担を意識し、担い手は誰なのかを絶えず問うことで連携の実体ができてくるのではないかとのイメージを持ちました。連携の実とは、何かです。

三つは、確かに道路ができるということによって生活も文化も変わっていくだろうということは、皆さんがおっしゃるとおりかもしれませんが、それはどのように実証していくのかはこれからの課題かもしれません。やはりその場に住むことが、歴史や風土をつくっていくと思いますので、自分たちの住んでいる場をきちんと見ることも大事であるということでした。

意見交換の中で出されたアイデアとか知恵とか資源の使い方というのは、確かに多様な事業を体系化していくことだと思います。そのことが、観光、農業、交流事業等の地域づくりの展開になろうかと思えます。いずれにしても、個々の市町村の発信と併せて、何との連携を組むのか、その体制は、誰がやるのか等が課題として挙げられました。

それから、地域資源の活用は、行政、産業界、民間団体でも多様な取り組み方をすると思えますので、相互連携を強化する具体的な仕組みなり手立てを出していただきたいと思えます。そして、毎年開催されるサミットで

の議論として、広域的な事業、活動の点検評価を加味してほしいと思えます。やはり広域連携を進めていくための下支えを担う新生 SENA の組織に期待したいと思えます。

最初に、ご報告いただいた三遠南信住民ネットワーク協議会田中さん、各市町村さん、商工会長さん、住民団体の方を含めて「街道(塩の道)を活かす」ことへのご示唆がありました。やはり自分たちが住んでいる地域の歴史とか風土の時間軸をきちんと見据えて、10年、50年、あるいは100年、また1,000年というお話もありましたが、自分たちなりに物語をつくり観光の形成、交流人口の拡大、広域的な観光へと展開することか必要と感じました。

今、申し上げましたことを「風土」分科会の要点として、次のようにまとめ、報告会で発表させていただきたいと思しますので、ご確認をお願いいたします。

1. 意見交換で出されたアイデアやそれぞれの地域が持つ資源を認識し合い、それを体系化して、持続的に観光客誘致できるよう情報の発信力を高めてゆくこと。
2. 地域資源の活用には、民間団体、企業との取り組み、連携を強化する。
3. 三遠南信地域の歴史や風土を学び、それに結びつけたストーリーを持った広域観光の推進し交流人口を増やすことをめざす。

ご確認、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

分科会では、お一人3分という短い発言でストレスもあったかと存じますが、後ほどの交流会で田原市のお酒をいただきながら解していただければと思えます。

皆様方のご協力をいただきまして無事に終わることができましたことに感謝を申し上げて、「風土」分科会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

8 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

「山・住」合同分科会では、「中山間地を活かす流域モデルの形成」、「広域連携による安全・安心な地域の形成」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	副学長	大貝 彰
報告者	浜松市	市民部長	岩井 正次
行政	豊橋市	市長	佐原 光一
行政	豊川市	市長	山脇 実
行政	新城市	市長	穂積 亮次
行政	設楽町	町長	横山 光明
行政	平谷村	村長	小池 正充
行政	根羽村	村長	大久保 憲一
行政	売木村	村長	清水 秀樹
行政	喬木村	村長	市瀬 直史
経済	森町商工会	会長	山本 充喜
経済	東栄町商工会	会長	井筒 睦治
住民	愛知大学総合郷土研究所	研究員	平川 雄一
住民	川名ひよんどり保存会	会長	前嶋 功

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長



ご紹介いただきました大貝と申します。
よろしくお願いたします。

今回のサミットが第22回目ということで、初めて気づいたのですが、私が豊橋の大学に来たのが平成5年で、ちょうどそのとき第1回のサミットがあったのだということを今、知りました。私自身は、このサミットに10年前ぐらいから参加させていただいております。ここ最近では、この「山・住」分科会のコーディネーターを連続して務めさせていただいております。

何回もこの三遠南信地域の皆様からいろいろな取り組みの状況とか、あるいはこれからあるべき姿についてご発言いただいて、着実に少しずつ前に進んでいるのかなと感じております。ただ、年1回のサミットということで、議論が一気に進むというのはなか

なかできないのですけれども、着実に進んでいるのかなという印象を持っております。さらに、今年度 SENA が新しい体制になったということで、その中で具体的なこの中山間地域の取り組みが具体化していけばなと思えますので、皆様、よろしく願いいたします。

座らせていただきまして進めさせていただきます。よろしく願いいたします。

本日は、豊橋市の佐原市長様はじめ、先ほどの全体会でパネリストとして参加された新城市の穂積市長さん、また、この場に参加されている皆様、どうかよろしく願いいたします。

それでは、進行についてお話をします。

最初に、前年度のサミットの議論、この「山・住」分科会の議論のまとめを行い、その後、今回の「山・住」分科会のテーマについて、事務局から説明をいたします。

次に、浜松市市民部の岩井正次部長さんから、「浜松市の中山間地域振興」について、ご報告をいただくことになっております。

このご報告を踏まえまして、今回、テーマとしては、これはビジョンの中に掲げられているテーマでありますけれども、「中山間地を活かす流域モデルの形成」、そして、「広域連携による安全・安心な地域の形成」という、こういうテーマで、今後推進をしていく事業等についてご意見をいただけたらと思っております。

それでは、早速ですが、事務局から、先ほども申しました昨年度のおさらいと今回のテーマについて、説明をお願いしたいと思います。よろしく願いします。

事務局

それでは、前年度の議論のまとめと今回のテーマについて、ご説明申し上げます。

前年度の「山・住」合同分科会では、参加者による取り組み事例などをもとに、さまざまな議論がなされました。

内容は、まとめると次の2点となります。

1点目としましては、中山間地域の定住促進には、人やものの交流、連携を図ることが重要であり、そのためには、それぞれの地域での雇用の場をどのように創出していくかがポイントとなります。

そこで、既に小さな取り組みはなされていますので、それらを広げ、人をつなぐ、あるいは仕組みでつないでいく、そうした取り組みが三遠南信地域の中で必要になるのではないのかというのが1点目です。

2点目としましては、この地域の持っている資源を活かした取り組みをより活性化させ、定住促進や、この地域の活力の向上につなげていくには、情報発信が欠かせません。そのために、SENA を中心として、体制の強化、整備をする必要があるのではないのかというのが2点目でございます。

そして、今回の議論のテーマについてです。

「中山間地を活かす流域モデルの形成」に向けては、各地域の定住促進施策などの推進のため、人、ものの交流、連携を図るとともに、情報発信体制の整備・強化を進めることが重要であります。

また、地震や台風などによる広域的または局地的な災害に対応するため、県境を越える防災体制の強化について相互に連携して取り組み、そうしたことをする必要があります。

そこで、ビジョンに掲げます重点プロジェクトの推進状況の確認・評価とともに、次年度以降、どのように進めるかを議論するため、ビジョンの「山・住」分野の基本方針であります「中山間地を活かす流域モデルの形成」、そして、「広域連携による安全・安心な地域の形成」を今回のテーマとして設定いたしました。

以上で説明を終わらせていただきます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今回のテーマというのは、いわゆる、この「山・住」の分野の基本方針である、ビジョンの基本方針となっている部分について議論するということでもあります。そういう意味においては、かなり幅が広いわけですが、具体的なそれぞれの取り組み等について、ご報告をいただけたらと思います。

それでは、その意見交換の前に、話題提供という形になるかと思いますが、「浜松市の中山間地域振興」という題で、浜松市の市民部長岩井正次様よりご報告をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

■報告

浜松市 岩井市民部長

ただいまご紹介いただきました浜松市市民部長の岩井でございます。今日は、このようなサミットの席上で我々の浜松市の中山間地域の施策を発表する機会をいただきまして、どうもありがとうございました。

これは、御存じのとおり、浜松市の地図でございまして、皆さん、本当に、もうおわかりになっていると思いますが、浜松市は広うございまして、東西で52キロメートル、南北で73キロメートルという大変広い土地でございます。その上の北側のところが中山間地域ということで、天竜区の5地区と北区の引佐町の北部、これを中山間地域と言っております。そして、特に天竜の上の北の方の4地域は、これは過疎地域に指定されているという、こういう状況でございます。よく我々申しておりますが、国土縮図型政令指定都市と言っている、山あり、川あり、湖あり、海ありと、そういうような土地柄でございます。

これが、数値で見る浜松の中山間地域ということでございまして、市域面積、先ほど申しましたが、1,558.04平方キロメートル、全

国2位でございまして、わかりやすく言うと、伊豆半島より広いと、そういう土地柄でございます。

そのうちの中山間地域は1,022.81平方キロメートルですので、65.65%。そして、人口ですけれども、浜松市の人口は81万人ですが、中山間地域は3万5,817人、4.42%ですけれども、実は15年前、平成12年は4万5,977人。ですから、15年で22%、人口が減したと。そして、ここに記載してございせんけれども、世帯数につきましては、横ばい、むしろ増加傾向にあるという、それはどちらの地域も同じかと思っております。そして、高齢化率39.1%、市域全体の24.5%と比べかなり高うございます。そして、この中山間地域には337の集落があるのですが、そのうちの128集落が高齢化率50%以上という状況でございます。

これは、中山間地域の一つですけれども、北区の引佐町渋川というところ。これは盆地でして、非常にのどかな田園風景が広がっているところでございます。シブカワツツジという静岡県指定の天然記念物のツツジが有名なところで、キャンプ場があります。そして、世帯数254世帯に665人が住んでいるというような地区でございますが、実は、新東名が開通しまして、浜松いなさインターから車でわずか15分でこういうのどかなところに来られるというようなことでございます。

これは、天竜区の水窪町大沢というところ。茶園等がございまして、これは、標高740メートルほどございまして、「天空の里」と言われております。6世帯8人がこの大沢地区に住んでおります。そして、ここでは農家民宿などもございまして、このような地域が点在しているというところでございます。

そして、中山間地域、現状と課題というところで、まずは、よいところが果たしている役割。これは、もう皆様御存じのとおりでございます。自然が豊かであるとか、心のふる

さととか、そして、何よりも古きよい伝統文化が残されているというところがございます。そして、こちらにございますように、水や電気の供給源、さらには森林が防災機能を担っていると。それから、自然の二酸化炭素を吸収しているというような、その役割、これを十分皆様も認識されていることだと思います。

どちらの地域でも同じだと思いますけれども、特に古きよい伝統文化。私も、こういう伝統文化を中山間地域に特に残していこうということで、無形民俗文化財保護団体連絡会ということで、19の団体。これは、田楽とか、おくないとか、ひよんどり、歌舞伎等々を保存されている皆様方を守るような連絡会を平成25年3月につくりました。今日ご出席の前嶋さんに会長をお願いしているところがございます。そして、地域全体でこういう無形民俗文化財を保存して守っていこうという連絡会を立ち上げたところがございます。

そういういいところの反面、困っているところ、課題でございます。どちらも同じだと思います。過疎化、高齢化。先ほど言いましたが、高齢化率39%。それから、ひとり暮らしの高齢者の方々の生活支援をどうするか。あとはインフラ整備、これも重要なことですが、なかなか思うようにいっていないと。そして、近隣の集落機能が低下してきている。集落機能が低下しているということ、これは大きな問題でございます。例えば、浜松には736の自治会があるのですが、そのうちの10は、若干少ないと思うのですが、10は1桁の世帯しかない。つまり、5世帯とか6世帯とか。なお、50世帯以下のところもまたかなりあると。ということは、近隣の自治会組織がなかなか維持していけないということ、これは大変重要な問題があるかと思っております。それともう一つは、先ほど少し触れました。伝統文化の跡継ぎがいないと、こうい

う現状もございます。

字が小さくて恐縮ですが、それで私たち、今、平成22年から平成26年の5年間の中山間地域振興計画というのを進行しております。そして、来年度からの新たな振興計画を今、作成中でございます。この中にいろいろな事業、例えば、計画掲載では236の事業を掲載してございます。そのうちのインフラ整備とか施設維持管理等の投資的事業を除くと137事業、これが庁内でいいますと31課にわたる、そういう事業を展開しております。

例えば、ここでは交流・居住促進事業。これは、具体的には67の事業がございます。そして、次の生活支援事業、これは46の事業を行っております。あとはハード的なものとして地域公共交通維持事業とか、移動手段の交通関係とか森林管理維持事業等々を行っております。

その計画を今、進めているわけですが、そのうちの代表的なものとして一つ。こちらに「山里いきいき応援隊」の活用と。これは、総務省がやっていた地域おこし協力隊というのがございました。緑のふるさと協力隊という制度もありましたが、こちらが1年でしたので、その隊員の任期といいますか、これを最長3年まで延ばせるように衣がえしたのが「山里いきいき応援隊」というものでございまして、各地域に一人ずつ、若者を公募したところ来ていただいて、このピンク色のところは、女性が4人行っているんですね。それと男性が2人と。今、そこで活躍していただいております。それで、こここのところに、小さい文字で申しわけございませんが、中山間地域アドバイザーというのを3名、今、委嘱しております。お一人は地元の文化芸術大学の先生です。もうお二人は、この地域に入った隊員のOBとOG、男性1人と女性1人。ここにその隊員から定住された方がいらっしゃいます。そういう方々を、今、活躍されている応援隊の皆さんの相談員、アドバイ

ザーとして委嘱してございます。

ここでたまたまお二人を紹介させていただきます。水窪町にいらっしゃいます佐藤さんという方。埼玉県出身です。埼玉県から出たことがなかったけれども、まず浜松だということに来ていただいて、今、地域に溶け込んで、お祭りとか、行事とか、農作業とか、一生懸命頑張っていてやってくれています。

もうお一人も、これは龍山に堀田さんという方が入っています。この方は県内の藤枝市の出身です。この方は山が大好きだと。天竜美林に恋い焦がれてこちらに来たと、そう言っていていただいております。

全部で6人の皆さん、非常にその地域に溶け込んで、地域の皆さんと一緒に、いろいろな作業、お祭りとか、そういうことをやっていていただいております。

もう一つ、我々が今行っている事業で、「中山間地域まちづくり事業」というのがございます。これは、中山間地域内に所在するNPO法人、NPO法人を新規に立ち上げて結構でございますけれども、地域の課題とか、その地域振興のために事業をご提案いただきます。そして、ここで我々が市で審査、これは公開プレゼンテーションで審査いたします。これを交付決定いたしますと、そこに基金ということで、ある程度の金額を交付金として支出し、何年か事業を地元で行っていただくということで、今、我々の総額は6億円を用意しております。そして、これは平成33年までの事業で実施しています。受け付けは平成24年度から行いまして、平成28年度までを予定していて、事業期間は平成33年までということです。

平成24年のときに、この三つをまず採択しました。

「WEB版道の駅による天竜区観光産業活性化事業」。これは、実は、現地にライブカメラを定点で置きまして、水窪ですが、水窪地域を常に映すのですね。これは東京とか、全

国の水窪出身の方などがWEBで見られるのですね。そうすると、「あっ、懐かしい」とか、出身でない方も見て、懐かしいと思えば、通販サイトを持っていますので、そこで物産を売ったりするというような、そういうご提案があったものですから、今、事業を進めているところでございます。

一つ飛ばしまして、この「水窪の自然と文化を活かしたまちづくり事業」。これは、地元の山でいろいろな作業をされている方々がNPOを起こしまして、地元の100名山整備で、案内とか山道を整備しまして、そこでヤマビル退治とか、そういうこともやっけていらっしゃるというふうな試みでございます。

それで、平成25年度は、この四つの事業を採択しました。

「元気シニアによる地域資産継承・活用事業」。これを遊休の茶畑を、遊んでいる茶畑を今、借り上げまして、その耕作を始める。それから、阿多古和紙という和紙を復活させようという試みをしていただいております。

次の、こちらの「遊休農地を活用したそばの里づくり事業」。ここも遊休農地にソバの種をまいて、ソバを収穫し、そして、そば打ちでそれを販売しているというところでございます。

そして、次の「田舎ゆったりプロジェクト」。ここも遊休農地。やはりどうしても人が足りない遊休農地が増えるのですけれども、そこを何とかしようということで、田んぼを今、一生懸命若者たちを呼び込んだりして、田植えから稲刈りまでずっとやっております。そして、田畑のオーナー制度なども設けているところでございます。

そして、最後のところ。これは、「地域文化を核に都市間交流」ということで、地元の地域の自然を撮影して暦をつくったのです。それで、その暦を売っていきこうと。それと、東京との交流を地域だけでやっています。短い期間でしたけれども、先日も東京の中野プロ

ードウェイにブースを出しました。

こういうことを地元から提案いただいて、そういう事業に対して、我々が金銭的な支援をしていこうというものでございます。

次は、「市内間交流を核とした中山間地域の定住・交流促進事業」ということで、浜松市は、先ほどから言っているように、非常に大きな市でございますので、市内の都市部と中山間部の交流を図ろうではないかということで、今、いろいろな事業を各層、高齢者からお子様までの幅広い層をターゲットとしております。

まず、第1の「交流情報の拡散」ということで、何をしているかということ、中山間地域のPR。この浜松の駅前でイベントを行ったり、東京で先ほど言ったようなポスターを出したり、相談会を行ったり、いろいろなことを今、行っているものでございます。

そして、2番目。こちらですが、「中山間地域めぐりツアー」。小学生の親子交流バスツアーを今、企画して、これは、旅行会社に少し委託しようかなと思っております。

次、「子ども中山間地域交流」。これは、小・中・高の部活動とかスポーツ少年団等々を初めとしたそういう団体を対象に、山と都市部のところの交流を図りたいと思っております。実際今年は小学校の交流を始めました。

そして、次の4番目、こちらが「地域づくりインターン」。これは市内、市外の大学生が2週間くらい、体験でそこに少し住んでいただいて、宿泊等をしていただいて、若者たちを取り込んで、その情報発信をしようかなと思ってます。

最後の五つ目、「交流ネットワーク事業」ですが、これは、農作業とか祭りとか、先ほど言いましたが、人手不足の場合はボランティアで一回入り込んでみようという都市部から来てくれる人たちにつなごうと。お互いに希望があるのだったら、そこをコーディネートしようということで、昨年ですが、六つ

らしい事例がございました。こういうことも進めていこうと、今、思っているところでございます。

これが、市内間交流をまずやってみようということでございます。

これは、そういう事例ということで、こういう農作業に若い方たちが来たり、お祭りとかイベントで来たり、これは、からくり人形ですが、こういったところに来たりしています。いずれにしても、こういう都市部と中山間地域が市内交流をしたらどうかということでございます。

まずそこから始めて、我々も今、こういう三遠南信全体で交流も始めておりますので、とにかくいろいろなことを仕掛けてやってみよう。中山間地域をまず知っていただく。都市部の人たちに知っていただくのだと。

「浜松にもこういうところがあるよ」と。これは三遠南信相互に広げられれば、なおよろしいかと思っております。

昨日、峠の国盗り綱引きがございまして、これは、飯田市の南信濃地区と、我々浜松市の水窪地区とで、もう28回を数える峠の綱引き。4年ぶりで浜松が勝ちましたので、ほっと胸をなでおろしているところでございます。でも、まだ2メートルばかり、向こうは陣地があるものですから、「何とか諏訪湖までたどり着きたい」と市長が言っております。これも一つの大きな地域の交流だと思えます。

それで、もう一つ。今度、11月30日に「三遠南信ふるさと歌舞伎交流浜松・佐久間大会」というのがございます。これも、もう21回を数える歌舞伎の交流ですが、豊橋市、湖西市、下條村、大鹿村、そういったところの皆さんとの交流を図って農村歌舞伎をやっている。

いずれにしましても、そういうような地道な交流を通じて、我々中山間地域を知って、そして、お互いにいいところを取り入れなが

ら進めていきたいというのが我々の考えでございますので、今後とも我々をはじめとして、皆さんと一緒に頑張って勉強したいと思っておりますので、ぜひともよろしくお願ひしたいと思ひます。

私からの説明は以上でございます。どうもありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

どうもありがとうございました。

ただいま報告いただきました内容について、何かご質問、あるいはご意見でもよろしいかと思ひますが、もしございましたら挙手をお願いいたします。

非常に魅力的な取り組みをされているなと感じながら聞いておりました。よろしいでしょうか。

それでは、ここからは、今の浜松市の岩井様の報告も踏まえながら、意見交換に移ってまいりたいと思ひます。

時間が非常に限られた中での意見交換となります。毎回ですが、1人当たりの発言を3分程度ということでお願いをいたします。円滑な進行にご協力をお願いします。

それでは、ご参加されている皆様に通ひ、最低一度はご発言をいただきたいということで、まず、それぞれの団体が定住促進、あるいは地域の活力の維持のために取り組ん

でおられる具体的な事例について、ご紹介をいただきたいと思ひます。

それで、トップバッターは、先ほど全体会でもパネラーを務められました新城市の穂積市長から、お願いいたします。

新城市 穂積市長

すみません、恐縮です。大分しゃべりましたので、ほかの方に時間は譲らせていただきたいと思ひます。簡単に、今、新城市で取り組んでいる定住、若者関係の政策だけを紹介させていただきます。

まず、そのものストレートにずばりですけれども、若者政策のワーキングチームというのを立ち上げまして、これは、若者政策というのは言葉として余りまだこなれていない、認知が広がっていないものですが、国でも若者政策という言葉が少し出てきております。

要は、日本創成会議の増田レポートで、東京一極集中からの転換、地方の再生というもの、の要というのは、やはり若者や女性が活躍できる社会をどうつくるかということです。新城市も御多分に漏れず、人口の流出が続いておひまして、特に若い世代の人口流出が他の世代に比べて大きい。その上さらに、いわゆる出産適齢期にある女性の転出が非常に強いという実情がございます。

そういう中からいかに転換をしていくのかということですが、やはり我々の世代は、現在の若者が抱える問題というのを、実はわかっているようでわかっていない面がたくさんございます。現代の雇用情勢、あるいはさまざまな経済環境の激変の中で、若者たちが抱える課題を市全体が世代を超えて共有して、若者のための政策、総合的な政策づくりを始めていこうということで、若い人を中心に、今、そのワーキングチームをつくり、来年には若者の総合政策の策定と若者議会の創設に向かつて一歩を進めていき

いと考えています。都市的な基盤の充実とともに、いろいろな雇用の場の創出などたくさんの要望がありますけれども、若者目線で見たまちづくりについての意見集約をしながら、必要な対策を講じていきたいということでございます。

それとあわせまして、新東名のインターチェンジができますので、もちろん雇用の場の確保、あるいは観光交流拠点としての道の駅の整備などを進めております。また、新規就農の方の受け入れがこここのところかなり進んでいまして、市内の作手地区というところを中心に、年間4人から5人の都市部からの移住者による新規就農が、ここ二、三年続いております。それにはJAと、それから、農林業公社といひまして、農地の保有の合理化を行う中間管理機構ですけれども、それと市の農業政策部門がワンフロアで一つになって、今、事務所をつくりまして、さまざまな受入体制の整備や情報提供などをしております。

その体制が比較的スムーズにいったことから、さまざまな農協の部会の方々にお願いをしながら、さまざまな施設園芸などについて、都市部から移住してきた若い人たちが農業で希望を持って暮らせるような仕組みづくりをしていますが、その中でも一つの大きなネックになるのが、やはり住宅の確保でございまして、今、市内全域挙げて、空き家の調査に入り、空き家対策に向かって一歩を進めていかなければならないのかなと思っているところです。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

非常にさまざまな角度からいろいろな定住、あるいは雇用の創出に向けた取り組みがなされていると伺いました。

それでは、売木村の清水村長さん、お願い

いたします。

売木村 清水村長

私は、人が訪れる村、訪れたい村をつくりたいなということで、今、村長になって2年少々であります。積極的にイベントの開催をしております。以前より、「うるぎ米そだて隊」というようなイベントもやっておりました。これは、売木村に7回、農作業に来ていただいて、「7回皆勤をすると、米1俵60キログラムを皆勤賞として渡します」というような大盤振る舞いなイベントで、これは赤字ではありますけれども、7回来ると、本当に売木村が身近になるということで、そんなイベントもやっておりました。それに年間通して、春色感謝祭とか秋色感謝祭、また、溪流釣り祭り等は以前やらやっていたのですが、昨年、「田舎暮らしすすめ塾」という塾を始めました。これは、売木村に1ターンされた方がコーディネーターになりまして、その都度募集をしまして、これも年6回ほど開催するイベントであります。非常に人気がありまして、キャンセル待ちというような状況ではあるのですが、その中からまた定住につながってきてもおりますので、始めてよかったです。

また、今年は「うるぎ星の森音楽祭」といって、売木村に県のオートキャンプ場がありますので、その芝生広場を使って1,000人規模のイベントをしたいなということで、売木村の人口は600人です。その倍に近い人口を集めたいということで、浜松市、豊橋市や、そこらじゅう回って、イベントに参加のお願いをしまいたったわけです。1,000人は達しなかったわけですが、それでも人口に近い550名が音楽祭に集まってくれたということで、売木村に来ていただいて、売木村を知っていただくと、「ほんにいいところがあるな」と思っただけということで、いろいろ進めております。

また、売木村は標高が1,000メートルから1,300メートルの山に囲まれた盆地であります。そして、村の中心地が820メートルといったような準高令地でありますので、そこを利用して合宿地にしたいということで、今、進めております。

そんな中に、私、実業団でマラソンをしていた選手と知り合うことができまして、それこそ先ほども出ておりました地域おこし協力隊ということで、3年間の任期で、今、売木村の臨時職員として勤めていただいております。彼は愛知県岡崎市の出身ですが、フルマラソンとか駅伝の選手で、実業団で活躍していました。もうフルマラソン、スピードにはついていけないということで、自分の勝負できるのは、今度は長い距離だということで、ウルトラマラソンに転向しました。

そのウルトラマラソンに転向したことによって、それぞれの大会に活躍をしてくれまして、100キロメートルのウルトラマラソンの部では、今、世界ランク5位です。それで、24時間耐久マラソンという種目がございまして、それですと、今、世界ランク2位ということです。それによりまして、売木村に合宿に訪れる人が非常に多くなってきてまして、去年は300人余でしたけれども、今年はもう1,000人を超す皆さんが合宿地として売木村に来ていただけるようになったということです。

それもNHKの番組で取り上げていただいたということで、関ジャニの番組で、「明日はどっちだ」という番組がございまして、それで9回ばかり取り上げていただきました。そして今度、タイで12時間のマラソンがありまして、それは11月1日・2日とやりますので、それに密着して、またNHKがついていってくれと。NHKも、その「明日はどっちだ」という番組で、売木村の崖っぶちのランナーを取り上げたということで、崖っぶちの村と崖っぶちのランナーを取り上げた

ということで非常に視聴率が上がりました。今年の3月に、もしかしたら終わるかという番組が、売木村を放送することによりまして、その都度、視聴率が上がるということで、いまだに番組が続いております。時たま売木村を取り上げていただいているということで、本当にありがたいことでもあります。

そんなことで、何とか人に来てもらいたいなということで、いろいろ取り組んでおります。そんな状況であります。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

本当に小さな取り組みがうまい循環を生んで、非常に具体的な取り組みに発展しているということだと思います。

それでは、続いて、東栄町商工会の会長、井筒様より、取り組みについてご紹介いただけたらと思います。

東栄町商工会 井筒会長

私どもの町では、平成24年度から総務省の補助制度を活用して、毎年3戸の空き家を町が借り上げて、水回りであるとか、そういう生活の中心になるところをリフォームして、月額3万2,000円という格安な値段で、また、子供のいる家庭については、さらに2割を引いた額で貸与し、空き家の有効活用を通して町と都市の住民との交流を拡大し、定住促進を促し地域の活性化を図るための空き家情報活用制度を創設しております。これは、行政のほうを中心になっている事業でございまして。

そして、私どもは、商工会という立場で、経済的な部分を地域でどう活性化させていくかということでございまして、これにつきましては、商工会が中心になりまして、農地の活用をすることによって、それを経済発展につなげることはできないだろうかというこ

とで、いろいろ意見をまとめたところ、私どもの地域には自然に自生しているものも数多くあるわけですが、山菜を使ってビジネスにつなげていこうということで、この平成 26 年度にはさまざまな実証実験を行いました。例えば、山菜を使った料理をするツアーであるとか、これは、豊橋市にあります豊橋鉄道にお話をしまして、その協力を得ながら、観光バス等も回してもらうということで、これから山菜を使った経済的な底上げをしていきたいということで取り組んでおります。

それから、行政からは地域おこし協力隊を 5 名雇用しております。その 5 名の方にも全面的な協力を得ながら、いろいろな商品開発であるとか、商品開発というのは、今言ったツアーとか、そういうものも商品の一つとして、いろいろな提案や実際に行うときの手助け、いろいろなところで活躍をしていただいております。

それから、商工会独自としては、青年部が少子高齢化の中、若者の嫁不足が深刻となっておりますので、婚活イベントなどを開催して、本年は 4 組のカップルが誕生し、これまでに 3 組が結婚に至っているということで、着実に、少しずつですが成果を上げています。

そのようなことが今、東栄町では促進事業の事例としてあると思います。

また、「住」のほうですが、民間の住宅開発と、それから、行政が手助けをしてインフラの整備をすることによって、東栄町の中に 18 戸の区画を整備して、今、売り出しをしております。これも定住を進めて、やはり住むところの確保ということです。都市の人に空気や水のきれいな東栄町に住んでいただきたい。浜松、新城等にも通勤可能な地域になってまいりましたので、ぜひ三遠南信サミットの中でも、そういう部分も取り上げていただけたらと思います。

それから、昨年度の飯田市でのサミットで

私が発言したことを思い出しているわけですが、この地域の背骨の一つとして三遠南進自動車道が着実に整備されているということとともに、飯田線の活用を真剣に取り組むべきではないかと思います。特に高齢者が多くなる中で、車を運転しなくても、癒しであるとか、ゆったりとした日を過ごすということについては、鉄道をうまく活用することによって、そういうものが開けてくるのではないかと考えております。

また、平成 26 年度からは東三河広域経済連合会という商工会議所、商工会の構成でできているわけですが、これには各市町村長も参加をしてくれ、色々なところで助言をいただいているわけですが。この中で、飯田線の活性化を図るために、今後、研究会を設置して、提言を取りまとめ、JR 等に提案をしていこうということで発足をすする運びとなっております。そのような状況で今、進めております。

そして、今日ここで、私が一番お願いをしておきたいと思っております。やはり中山間地で、それぞれの形で自分たちの力でやれることはそれなりに努力をどこの市町もしていると思う。ところが、やはりこの三遠南信サミットの一番の仕事というのは、ここの地域に住んでいるどこの人にも何らかのいい意味での影響、そういうものがなければいけないのではないかとということで、私ども東栄町のような地域には、積極的な都市に住んでいる人たちの理解というものが必要になるのではないかなと思います。

先ほどからの報告の中でも、さまざまな形でイベントとかいうものに通じて努力をしているわけですが。そういうものは、あくまでいわば宣伝の段階であって、中身を特化するということはなかなか難しいということでございます。そういう種をせっかく今まいてくれている中で、田舎の特徴、田舎のよさをしっかり見ていただきたいと思

ます。例えば、安い土地の利用。一つの例を言いますと、例えば福祉施設のようなものは、山間地で広い土地にゆったりとした施設をつくることによって、三遠南信地域の全ての人を対象にした受け入れができ、雇用も生まれ、人口の減少も少しでも食いとめることができると思います。それから、消費も拡大するというところで、イベント的なものばかりではなくて、定着するものを真剣に考えてもらうことによって、町の人にもいろいろな意味でメリットを感じてもらえるようなものが皆さんの工夫によってできるのではないかなということをおは常々考えているわけでございます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

あとお二人の方に具体的な取り組みをご紹介いただきたいと思います。続いて、森町商工会会長山本様から、ご紹介をお願いします。

森町商工会 山本会長

私のところは、一昨年の新東名の開通以来、大変多くの方に、この森町に来ていただいております。30%ぐらい従来より多くなっています。

そういう中での経済効果はということですが、余り期待できなかった。何とかしなくてはという思いの中で、本年3月末に、「もりまち志農工商サミット」というものを開きました。「しのう」の「し」は志す。農業と商業、工業を含めた、全ての産業を網羅した中で、色々な思いをここに集めて議論しようということ、皆に呼びかけ議論しました。小國神社の門前町ということ、お店ができていたわけですが、そこを中心とした話が中心になりましたが、そういうことが発端で、「では」という話になったときになかなか

話が進んでいかない。

森町は小國神社を中心に、大変神社仏閣等が昔からたくさんございました。また、四季折々にはいろいろな花が見られる。紅葉しかり、そして農産物。トウモロコシや次郎柿、そして、お茶、レタスと、大変豊富な農産物がありまして、「これらを観光に活かすことが」というような話も出ておりました。これからこういった問題をどういう具合に利用しながらお客を呼び込めるかということ、議論はすれども具体的な例が出てこないということ、その後、もう一度そういうことを議論したわけですが、実を結んでこない。

やはり森町も御多分に漏れず、人口もどんどん減っているという中での取り組みとして、それぞれの思いの中で、例えば婚活事業ですね。七、八年前にやったときに失敗しました。男性30人に対して女性2人だけでした。これは大変なことだからと思って、失敗を例にして取りやめたことをお話ししましたら、近隣の商工会が、「では、一緒にやろうよ」というようなことで、そういう取り組みも今は行っております。

また、独自に青年部の人たちが、「森町、人が減っては大変だから、我々の仲間をつくらう」ということで、婚活事業も今、計画中でございます。これが実を結んでくれることを祈りながら今いるわけです。これからこの森町にどういう方に来ていただいて、どういう方に頑張ってもらって、どういう方に住んでもらう、こういういろいろな思いの中での取り組みをしております。すなわち、森町は静岡県の内陸フロンティアの構想のもとに、三つの種類の特区の認可をいただいておりますが、これは国も理解していただいているわけで、それぞれの特区の目的に向かって、これからどういう展開していけばいいかということ、今、行政とともに議論している最中でございます。皆さん方のまたいろいろな意味でのご支援、ご示唆をいただければあり

がたいなと思っております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

それでは、あとお一人、根羽村の大久保村長からご発言をお願いします。

根羽村 大久保村長

私どもの村、ちょうど愛知県で一番高い山が1,415メートル、茶臼山になります。そこが根羽村と愛知県の豊根村の山頂になりまして、そこから源流となって矢作川が一色町まで流れている。そんな私どもの村でありまして、やはり日本の国土といいますか、地域は、山、川、海、上流、中流、それから下流という、そういう流域で昔から生活圏が形成されている。

そうした中で、どの地域にも、やはり人が住み続けられることがないと、例えば、上流でだれも住めなくなってしまったとなると、もう当然山が荒れて、土砂が出てきて、あるいは川とかの保水機能が全部なくなって、流域全体がだめになってしまうのではないかと、そのような気持ちで、私どもは今住んでいる地域、昔から住んでいる上流、中流、下流、どの地域にも人が住み続けなくては安全な国土を守れないのではなかいかという、そんな地域づくりをしているところであります。

その中で、村の中では三つの循環。

まず、その地域、小さな地域、根羽村が住む地域づくりと、根羽村だけでは住めませんので、それを流域圏ですとか、こういった三遠南信とか、そういう大きな圏域で応援してもらいながら住み続ける、そんな仕組みをつくりたいと思っております。

まず、小さな循環といいますか、村づくりでは、一つは、やはり先ほども出ていましたけれども、働く機会だとか働く場所、それからあと、小さな地域内の経済の循環、それか

ら、小さなサービスの循環というのをそれぞれの地域に残しておかないと、やはり生活できないと思います。

まず、一つは働く場所、雇用の循環については、先ほど新城の穂積市長もおっしゃっていましたが、私どもも92%が山でありますので、その森林に付加価値をつけて、それで働く機会、雇用のチャンスをつくる、また収入を得るといような形で、丸太に付加価値をつけて住宅用材、あるいは建築用材として、直接現場までお届けする、そういったトータル林業の仕組みを、今、取り組んでいるわけでありまして。

これについても、先ほどの話の中でも、今、公共建築に非常に木材が使われる仕組みができてきました。ただし、公共建築で木材が使われるというだけで、それが地域材とか、そういったものはほとんど使えないような状況。それは、先ほど穂積市長も言われていましたけれども、山元の小さなところでは、例えば公共事業は1年単位でやりますので、発注したときにすぐに材料を納められない仕組みであれば、それはできせませんので、それについては、私どもとしては、きちんと公共団体で事前にもう発注情報を出していただいて、2年、3年前にも出していただいて、それを私ども山元といいますか、できれば流域の中の地域材をそこへ使っていただくというのが地域づくりになりますので、そういった制度改正は何としてもお願いしたいといえますか、つくっていただきたいというのは国へも要望しております。

もう一点、分離発注について。私ども、たまたま去年、高齢者の大きな福祉施設をつくりました。これについても、私どもJASの工場を森林組合が持っております、建物を一本で発注してしまいますと、本当に部品の一部にしかありませんので、これは分離発注をさせていただきました。やはりこれも、制度的に木材は地域づくりの一つの手段とし

て分離発注ができるというのも公共建築にはぜひ取り入れていただきたい制度改正であります。そのような動きもしております。

それとあと、高齢者福祉施設の中でエネルギーをどう使うかというお話もありました。私どもは山ですので、端材とかがいっぱい出てきます。それを使ってボイラーでくべるような形。ボイラーでくべるには、木を乾燥させるなどいろいろな問題が出てきますので、では、それをくべるNPO、小さな会社を立ち上げようというような形で若い人に立ち上げていただいて、それで地域の中で一つの新しい雇用とか、働く場所のチャンスもできた、そんな林業に取り組んでいる部分もあります。

それから、あと、小さな農業をやりながら、小さな林業をやりながら、また、小さな観光のコーディネーターをやり、一人でいろいろな職業を持ちながら、ハイブリッド的に働いてもらって、それで生活できる。全員というわけにはいきませんが、そんな私ども山の中の取り組みも、そんな働き方も、今、提唱しているところであります。

もう一つは、地域内で経済の循環といえますか、地元にあるガソリンスタンドだとか、商店だとか、床屋さんだとか、生きるための最低限のそういった経済の循環は残しておかなければいけないと思います。それがなくなったら、やはりだめですので、なるべく地元のお金を地域の中で動かせる仕組みというような形を考えております。

たまたま今、東栄町もやられておりますが、全国で40ぐらい、「木の駅プロジェクト」というような形で、木を出してきて、それを地域通貨にかえて、その地域通貨を地元の中でぐるぐる回すという仕組みがあるのです。田舎は当然、例えば、ガソリンは高いのも当たり前ですが、それを地域通貨みたいなもので補ってやれば、地元で最低限のものが回りますので、特に商工会の行うプレミアつき商品

券ですとか、それも地元で絶対回りますので、そういったものは必ず残したいなというか、今、一生懸命取り組んでいるところであります。

もう一つは、サービスの循環ということですね。これはいろいろなサービスがありますけれども、教育、医療、福祉、さまざまなサービスがあります。私どもはやはり保育園、小学校、中学校は、小さくても一つの自治体の中で何としても踏ん張らせたいという形。それから、特に小さくてできるというのは、保育園、小学校、中学校が連携したいろいろな教育ができますので、非常に特色的な教育ができます。それを逆に都市部の皆さんにもPRできればと思っているところであります。

特に医療についても、うちも開業医の先生がお一人おられますけれども、今は、やはり人口がある程度ないと開業していくのは非常に難しい制度になっております。今、地元からお医者がなくなってしまうたら、生きるためにも大変というようなこともありますので、私どもは、開業医の先生に器具を応援させていただいております。ある程度の医療機械は村で先生にお貸しするとか、そのような形で医療を支えております。これについても、やはり国へ、地域の開業医が何とか生きられる制度改正をお願いしております。

そのような取り組みをしながら、最終的には、私たちが自分たちの住むその地域に、我々がといいますか、住んでいる人が自信と誇りを持っていなければ次の子供たちは絶対出ていってしまいますので、何とかそこでしっかりと自信と誇りを持って、そのことを子供たちといいますか、次世代につないでいくのが我々の役目かなと思ひながら頑張っております。現実にはなかなか厳しいものがありますが、そんな取り組みをしているところであります。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

今、五つの団体、自治体あるいは商工会の方からご発言いただきました。

これは私の感想になりますけれども、しばらく前に比べると、それぞれの自治体なり商工会なりで積極的にいろいろな取り組みをされている。それが具体的に新規就業であったり、あるいは定住であったり、Iターン者が出てきたり。本当に具体的な成果がそれぞれ個々のところで出てきているのだなと素直な感想として持っております。

これも、もちろん国の政策、先ほどから出ています総務省の地域おこし隊の長い間の取り組みであるとか、あるいは今の社会の大きな流れとして、若者がかなり自然志向といえますか、都会からちょっと離れて自然に戻ってみようかという、流れがややできつつあるのかなと。

そういうことも踏まえながら、この三遠南信地域というのは、今日の最初の全体会の議論にもありましたように、新東名が供用開始され、あるいは三遠南信自動車の一部供用開始ということで、この地域全体の、いわゆるフットワークというか、アクセスが非常に容易になってきた、時間距離が非常に短くなってきたということとうまく相まって、いろいろな成果が出てきているのかなというのを感じました。

もう一つ気になったのは、JR飯田線の活性化の話であります。これは、豊橋市長も以前、そういう話をされていましたが、私もこの間、JR東海の新幹線の開業 50 周年ということで中日新聞がインタビューに来たときに、「いわゆる交流人口を増やすためのこの地域の方策として、飯田線を活用すべきではないか。リニアと東海道新幹線とつなぐ、いわゆる在来の鉄道として飯田線というのは重要ではないか。飯田線を観光列車にした

らどうか」という発言もしたのですけれども、これは、JRから見てなかなか難しい問題のようです。

時間が少し押していますが、次は、今、いろいろな取り組みがなされているということで、もともとこの地域には、特に中山間地域にはいろいろな魅力であるとか、さまざまな森林資源であるとか、非常に数多くあるわけです。こういった魅力である資源について、改めてもう一度ここで確認をさせていただきたいと思います。

魅力、資源というものを、この中山間地域の中から見ると、魅力、資源を外から見る視点と、それぞれ二つあるかと思えます。それぞれの立場からのご意見を伺えればと思います。

それでは、最初に、これは外からか、内からか、両方なのかもしれません。豊川市長の山脇様から、お願いします。

豊川市 山脇市長

今、中山間地域を外からか、内からか、というお話がありましたが、ちょっと微妙なところですね。豊川市は、平成 18 年から平成 22 年にかけて、3 回、周辺の町と合併しました。それによりまして、約 160 平方キロメートル、人口が 18 万人を超える規模になりました。北は本宮山という 789 メートルの山、そして、南は三河湾に面して、海、山、川のバランスのとれた地域になったと思っております。

先ほどの浜松市のお話を聞きますと、面積ですと豊川の 10 倍、人口ですと 5 倍という状況で、浜松市の中山間地域は大変厳しい状況であると認識をしたところです。豊川市はそれほど広くもありませんし、また、市内を約 30 分で通り抜けることができますので、そういう状況のところはないかと思えます。

ただ、今、東三河では東三河広域連合を設置する方向で、いろいろ議論をしているとこ

ろであります。やはり東三河の北部の方々といろいろな交流をしっかりとしていこうと思っています。これは、設楽町への設楽ダム建設に向けて、下流地域が大変恩恵を受けるということで、山村都市交流拠点施設を計画しております。

このようなことで、地域の皆さんや下流地域の皆さんとのいろいろな交流ができれば、いい機会になると思っています。

既に豊川市は、平成 12 年から野外センターとして設楽町に「きららの里」を設置して、小学生の野外教育をはじめ多くの方が利用しておりますが、これも設楽町には人の面でのいろいろご配慮いただいております、良い交流になっていると思っています。

そのようなことで、人口減少で山間地が大変厳しい状況であると聞いておりますが、我々としみしても、ここでしっかりと手を結んで、いろいろなところで中山間地域との交流を進めていきたいと思っています。

さらに、豊川市では今、校舎の建て替え時期が来ておまして、毎年順次行っている状況であります。木造校舎とまではいきませんが、内装においてふんだんに木を使った校舎を、建設しているということで、これも木材の有効利用で中山間地域に貢献ができるかなと思っています。

いずれにしても、豊川市は、ちょうど中間のような地域だと思いますが、しっかりと東三河地域が結束して、この人口減少社会をのり超えていかなければならないと思っています。

最後に、豊川市は平成 28 年度に向けて第 6 次総合計画を、策定中であります。その中で、今、「訪れたいまち、住みたいまち」ということで、いろいろな計画をしているところです。豊川市では、観光ボランティアの養成に力をいれておまして、大勢の市民の皆さんに参加していただいております。豊川市には 373 の NPO、およびボランティア団体が

あります。そのようなことで、地域の人たちも一緒になって、この人口減少社会をのり超えていきたいと思っています。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

次は平谷村の村長小池様。これは内から資源を見るという立場だと思います。

平谷村 小池村長

平谷村は全国でも十の指に入るぐらい人口の少ない村で、現在では 480 人台という総人口でございます。以前からは林業中心の村でございました。林業といっても、焚き木と木炭中心の村で、根羽村みたいな青い葉っぱの杉やヒノキのない村でございました。林業の衰退と同時に、前人が観光で生きるしかないということで、村の役場の位置というか、中心の位置の標高が 922 メートルぐらいでございますが、自然条件を活かす中での観光事業ということで、一番簡単には、避暑地にということで考えたわけでございますけれども、それにはやはりいろいろな施設が必要ということで、民間業者によるゴルフ場開発、村によるスキー場、温泉、フィッシングスポットというような開発を行い、今現在では 30 万人前後が年間に訪れてくれている村になりました。30 万人というと、平谷村の今の人口でいくと、1 日に倍の人口が村に訪れてくれているのだなと思っています。衰退した村ではございますけれども、訪れる人が、この人口を聞いて、「そんなに少ない人口の村か」というようなふうに錯覚されるような村でございます。ここに観光客が来てくれるということで、それをいかに利用するかということで、高原野菜を栽培し、それを還元しながら、村民が豊かに暮らそうということで進めてまいりました。

ただ、標高が高いということで、非常に農

業の品目が限定される中で、夏場のトウモロコシとか、秋の白菜とかキャベツ、そこらに限定されてくるわけです。最近では夏のトマトということで、大変好評を得ております。農作物にも品目が少ない中で取り組んできております。そういうものをいかに活かしていくかということで、今年度から、地域協力隊2名を採用し、これからの高原野菜をいかに有効に活かされるかなという研究等を今、させているわけでございます。

今年は、少ない水田の中に酒米をつくりました。標高900メートル以上のところにつくった酒米で、魅力ある酒ができるのではないかということで、今、取り組みを行っております。多分12月くらいになると、酒が作製されて味わうことができると思います。そのような取り組みを行いながら、500人弱の村民がいかに生きていこうかということを経験しながら過ごしているのが現状でございます。

魅力ある村をということでございますけれども、数少ない魅力でございますけれども、そんなことで頑張っておりますので、また、今後とも皆様のご助言やら進言をお願いしたいなと思っております。

コーディネーター

／豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

やはり、自然が最大の強みであるということだと思います。

それでは、続いて、喬木村の村長、市瀬さん、よろしく願いいたします。

喬木村 市瀬村長

喬木村ってどこなのだらうという話なのですが、天竜川の対岸が飯田市でございまして、村の三方を飯田市に囲まれているという、総面積66平方キロメートル、人口は6,700人程度の村になっています。

長らく村は、就業先が飯田市の方で、住むところは喬木村ということであぐらをかいておりましたので、皆さんのような立派な活動ができていないということです。これから喬木村は、今年からですが、三遠南信自動車道の工事も村内区間が始まりまして、村の中に二つのインターチェンジ、それから、リニア中央新幹線につきましては、ほとんどがトンネル区間という中で、うちの村は明るい空間で通過していくわけですが、長野県にできます駅から村の中心部まで5分という立地条件を活かした村づくりを進めていかなければいけないと思っております。

本日、コーディネーターの方からお渡しをいただいた課題が、「中山間地の魅力の再発見」ということですので、村のことはともかくとして、南信州広域連合全体の「こんな魅力があるよ」ということをご紹介させていただきたいと思っております。

先ほどから、それぞれの村長さんからご発言がありましたとおり、南信州の自治体というのは非常に小さな自治体でございまして、自分のところで何かを完結しようと思ってもなかなかうまくいかないということで、それぞれの自治体が協力し合って、お互いの仕事を分かち合って、連携し合って地域全体を盛り上げていく必要があるのではないかなと考えています。

伊那谷を振り返ってみますと、天竜川が築き上げました国内有数の河岸段丘と、中央アルプス、南アルプスに囲まれました圧倒的な自然景観と、きれいな空気と清らかな川が流れている地域でございます。

この非日常的な空間に身を置くことで、都会の方々が感じているストレスからの解消ですとか、リラクゼーションに最適な環境が伊那谷には整っているということで、この魅力ある伊那谷に、リニアを使いますと名古屋から20分、品川からは40分という、非常に近い距離で結ばれるということになります。

伊那谷全体は今までターゲットポイントはどうしても中京圏に、中央自動車道を使った圏域にということになっておりましたが、これから都市圏も含んだ広域の中で、この伊那谷の魅力を訴えることができるということで、潜在的などいいますか、これからこの地域は変わるのではないかなという大きな期待を持っています。

魅力としては、自然はもちろんですが、この地域には、温泉、ゴルフ場、スキー場、キャンプ場、それから、登山、すごく美しい夜空、星空だとか段丘が形成するきれいな夜景等がございます。

その中で、各町村で取り組んでおりますのが、リンゴ狩りですとか、マツタケ観光ですとか、イチゴ狩りですとか、収穫体験型の観光拠点としまして、「お客さんを取り込んでいこうよ」という動きが活発に行われております。

こういう体験を通して、中山間の暮らしですとか、自然を理解しながら、環境保全、産業につながる、昔からずっと言われていますけれども、グリーンツーリズムという言葉がこれからどんどん飯田市とタイアップする中で訴えていかなければいけないのではないかなと思っております。

ある調査によりますと、都市部の方々の4割が田舎志向で、仕事をリタイアした後、静かな田舎で暮らしたいと思っている都市部の方が4割いらっしゃるということなので、これを足がかりに、今、各町村でクラインガルテンですとか、いろいろな滞在型観光・農業について研究を始めているところですが、結果として、何かすごく感触を得ておりますので、これを手がかりにしまして、伊那谷の方に二地域居住の可能性ですとか、週末リゾートの方向ですとか、そんなことをこれからどんどん考えていけたら、この中山間地の魅力をアピールできるのではないかなと思っております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

南信州、伊那谷全体の魅力をご説明いただきました。最近私も飯田には結構頻繁に行っていて、あそこは非常に気に入っております。

次に、NPO法人の川名のひよんどり保存会の前嶋会長さんよろしく申し上げます。

川名のひよんどり保存会 前嶋会長

まず、このパンフレットですが、これは、私ども旧引佐町の周りの6団体が、本当に民間で自分たちの保存会員のお金を集めまして作ったパンフレットです。1団体でこれだけ作るとお金がたくさん掛かりますので、その中で少しずつ出し合って、作っております。

このことでまず申し上げたいのは、先ほど市民部長からお話ございましたように、緑のふるさと協力隊という女性の方が引佐町におみえになります。私どもの中に「はらみの舞」というのがございまして、それをこの緑のふるさと協力隊の方にお願いをしました。これは、どこかの団体が聞きますとおしかりを受けるかとも思いますが、1426年からですので、今年は2014年ですので、この川名のひよんどりが今年でおよそ590年になります。その中で女人禁制というのが約600年の間、守られてきましたが、今年初めて女性をこの舞に登用し、私が決断して舞を舞っていただきました。長老の方からは少しお小言をいただきましたが、そんなことは気にせずに、来年度、正月4日ですが、またそれも女の子の舞をお願いしております。ぜひご覧をいただきたいと思っております。

「元気な浜松！懇談会」というのが浜松市にございます。私が出席をいたしまして、「はい、市長。私どもはこういうものがございまして、浜松市全体で何かいいことはございませんでしょうか」と言ったら、「よし、わかっ

た」と言うものですから、「本当にわかったかな」と思っていましたら、先ほど市民部長からご紹介いただきましたが、浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会というのをつくっていただきました。これは浜松市全体です。ですから 20 団体ございます。でも、1 団体の中に浜松市の大念仏などは 60 組ぐらい入っていますので、本当に浜松市全体の無形民俗文化財がこの中に参集をいたしております。

一つ例を挙げますと、水窪という地域がございしますが、水窪の西浦の田楽。これは、無形民俗文化財の国の指定をするというときに、静岡県ではなくて、日本でも第 1 号として国の指定を受けた西浦の田楽もこの中に含まれております。

これからも活躍しようと考えておりますが、私どもだけではなくて、実は、これも三遠南信ですので、三河の地域でも伝統文化・芸能が非常に盛んだということは私ども承知をいたしております。今年も阿南町の雪まつり、そして、行者まつりなども見学をさせていただきまして、今、阿南町とも交流がございします。

先ほどの会議の中でコーディネーターの方から、世界文化遺産にというとお話が少しございました。私どもも世界文化遺産を目指しております。富士山は山ですが、私どもは、これは人間がもう 500 年、600 年の伝統を引き継いだ伝統文化ですので、ぜひともそういう意味では文化遺産を目指してまいりたいと考えております。文化遺産に登録、そういうことで努力したいと思っております。そうすれば、世界からとは言いませんけれども、それでも日本全国から相当の部分のお客様がお見えになる。私どもは 1 月のお正月から 12 月まで、ずっと伝統文化の行事がございしますので、そういう意味でも日本全国からお客様をお迎えすることができる。そうすると、この伝統文化のよさというものをご理解いただけるのではないかと考えております。

そこで、「では、ここに住もうではないか」、「結婚してここに住もうではないか」という方も出てこられるかと思しますので、そういう意味でも世界の文化遺産を目指していきたいと考えております。

そうしましたら、あそこに三遠南信サミットと書いてありますが、その下に括弧でいいですから、伝統文化圏というような名前でも結構ですが、何か入れていただきたいなど。それほどこの伝統文化というものを重要視していただきたいと考えております。私は民間ですので拙いお話ですが、簡単ですが、そういうことでこれからも頑張ってもらいたいと思っておりますので、三河の方々、あるいは南信の方々、阿南町とかその辺の方々もぜひともお頑張りをいただいて、ご賛同いただきまして、これから交流をしていただきたいと考えておりますので、ひとつよろしくお願い申し上げます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

4 人の方にご発言いただいて、この三遠南信地域の魅力、あるいは資源というものについて語っていただきました。

この点については何回もこの場で議論しておりますし、改めて確認をしたということになるかと思えます。自然景観、そして森林資源、今、ご発言のあった伝統文化、こういったもののまさに宝庫であるということだと思います。こういった資源を活かして、この地域の活性化なり、あるいは雇用の創出、さらには定住促進という形に結びつけていくかということが常に問われています。

それぞれの取り組みとして頑張っておられるわけですが、三遠南信全体として今後どう取り組んでいくかについて、最後に意見交換したいと思います。

一つは、恐らく上流と下流の交流をいかに

進めていくかということだと思いますし、この三遠南信全体として、あるいはもっと外の地域とも連携して、どのように取り組んでいくのかになるかだと思います。これらの点について、まだご発言をいただけていない方に、お願いしたいということで、まずは豊橋市の佐原市長、お願いいたします。

豊橋市 佐原市長

私たちのところは、中山間地ではございませんので、外から見て、外からどうやって中山間地にアプローチするかという立場だと思っています。

今までいろいろな人とお話ししていて、中山間地はなかなか住みにくいかいろいろなことを言われていて、それをインフラの責任にしていたところがかかなりあると思いました。今、お伺いしていたら、私たちの町には高速道路のインターチェンジが一つもないのですけれども、二つもできそうな村がある。実は、東三河というのは高速道路のインターチェンジがある町が、今のところ8市町村のうち2市しかないのですね。ほとんどの町が高速道路と無縁の存在であり続けるという、非常に不思議な産業都市をなしてございます。

そうした町から見ていて、過疎地を抱えた方たちと議論していていつも私が疑問に思うというか、答えが自分に見つけ出せないのが、どうして息子さん、娘さんが帰ってこないのだろうかというところだったのです。これまでは、先ほどインフラの話を見せていただいたように、下水道がないからとか、高速道路が遠いからとか、いろいろなことを言われていたのですけれども、随分その状況は変わりつつある。場合によれば、私たちの町よりいいところがたくさんあるのに、どうして帰らないのか。いろいろ考えてみると、意外や意外、灯台もと暗しで、自分たちの町、村のよさを意外と自分たちで気がつい

ていないのではないかということをおっしゃることがあります。

それは私たち豊橋市でもそうなのです。豊橋市で人口密度の一番薄い、太平洋岸は片浜13里とあって、非常に広大な白砂の海岸になっています。そこに東京から子供たちの塾、理科系の塾をやっているグループの家族連れをウミガメの産卵を見せたくて呼んだのですけれども、今年は残念ながらウミガメがあまり上がってこなかったのを見る機会がなかった。私たちは焦っていたのですけれども、実はその後、海岸をただ歩き、地引き網を行ったところ、大したものはないのです、上がってきた小魚をバーベキューで食べてということをやっただけなのですが、「すごいところですね」と、こう言われたのです。

私たちはそんなことすごいと思っていなくて、ウミガメの産卵を見せられなかったから、もうこれはお叱りを受けるなと思っていたところ、「これでウミガメが見られたら、もう天国ですよ」と、話をされました。きっと皆様方の地域でも気づいていない、思っていないこと、大したことはないと思っただけで、都会の人たちから見て魅力的に映ることはあると思う。だから自分の息子、娘は帰ってこなくても、協力隊で来た人が住みつき、いろいろなことをするのはないかなど。これをいかに上手に自分の息子、娘にも見せるかということも大事なかなと思うのです。孫の顔を見たいなら、息子、娘を東京に出すなど言う時、こういう話でもしてみたらおもしろいなと思っただけのところではあります。

そんなことばかり言っただけです。やはり雇用の場をつくっていくとか、交流というよりも定住の話も大事なのです。その点については、先ほども山村の農業、高原農業のお話がありましたが、里の下の側で私たちが成功している農業の成功体験を、里の上の高原農業に持ち込むということをやりたいと思って、今、そちらにいます設

楽町と私たちは一緒に取り組みをやらうとして、J Aとどうやって上手に連携して理解していただくかということが大変大切だし、難しい問題だと思いますけれども、ここに向けて、頑張っていかななくてはということで、この1年ずっと準備を進めており、実現に持っていきたいと思います。

それから、自然に交流ができる仕組みづくりについて、この東三河広域連合をつくる準備段階でもいろいろなことをやってきましたが、一番わかりやすいものとして、ほの国こどもパスポートというものをつくりました。

これはどういうものかという、中学生までの東三河全ての子供たちにパスポートカードを持たせて、それを持っていくと、子供たちは他の市町村のいろいろな施設をただで入れるのであります。

例えば、私どもでいうと動物園があります。蒲郡市でいうと水族館があります。豊川も水族館があったり、東栄町は温泉があったりします。それぞれのところのいろいろなものを見てもらう。何と、今年からはスキー場のリフトまでただになってしまったんですね。そんなことをやっている、自然と交流が生まれ、子供たちが行きやすくなる。そうすると親は自然とついていく。経済的にも親がついてきてくれればお金がとにかく落ちるだろうということも踏まえてやっていく。

これは今、私たち東三河は広域連合を発足してうまく回り出したら、三遠南信でできないかという話を、多分私どもの事務局の側から持ちかけようとしているのではないかと考えています。

同じように、こんなことをやっていたら、消防団の人たちに対するいろいろなインセンティブを与える手段としても、消防団カードというのも東三河で統一したらおもしろいので、私たちの町だけでいろいろな事業所がサービスを提供しているものを東三河全

体にこれも広げたら、きっと山登りが得意な消防団員は山に登りに行くでしょうし、泳ぎが得意な消防団、水防の得意な人たちは海に泳ぎに行くでしょうし、いろいろなことがまた起きるのではないかと期待をしています。

それから、最後に一つ。これは、どうしてやったらいいか、ちょっと思うのですが、いろいろなツアーを組むとなかなか難しいけれども、路線バスを使ったり、先ほどあった飯田線を使った路線バスツアーみたいなもの、今、路線バスの旅って結構テレビでやっていて、はやっていますよね。ああいうことと、皆様方の様な観光資源、それから、場合によれば旅館であったり、食べ物屋さんであったりやうまくつないでツアーが組めたらと思います。来年に向けて、おもしろいプランをできたらプログラムを立案しようと思っています。

そんなことをやることによって自然と人が動く。そして、それぞれの町の良さを知ってもら。そうすると、山派の人は山に老後住みたいと思うかもしれない、海派の人は海の近くに住みたいと思うかもしれない。いろいろなことが自然と起こってくるのではないかと、それを期待しております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

今は、上下流連携というか、交流をいかに活性化させるかというための方策、一つの提案だと思います。

それでは、今、話の出ました設楽町の横山町長さんからお願いします。

設楽町 横山町長

今度のテーマで、地域資源を活用した新しい上下流の交流促進策はどうかということ、そして、我々が関連組織で連携して取り組むべきことという、そういうテーマですが、設

楽町の地形を若干紹介申し上げると、東三河のエリアの中で一番北に位置をするところにあります。その東側は豊根村ですとか東栄町。そして、浜松市の境へ入っていきますが、どちらかという、豊田市の境側になります。

そうした中で、東三河のど真ん中を縦に豊川という川が一本流れているわけですが、全長が72キロメートルほどの短い川なのですが、その水源町が設楽町です。ほかにも矢作川、また、天竜川の水系にも属しているということで、水源地域の山林を抱えた町ということでございます。

先ほども話がありましたけれども、設楽ダムという国の計画が入っているということで、41年を迎えるわけですが、今年、太田大臣によって、「これを継続するのだ。建設していくよ」という方針が示されました。

我々、このダムが建設されるということであるというと同時に、町の中央部分に湖が出現すると、そんな位置関係になるわけですが、この場所、こうした状況を、やはり将来のためにどう活かせるかということの一つの中に、観光資源として使う、そういうところへおのずから知恵を働かせなければいけないだろうと思っております。

ただ、湖が出現して、多くの人たちが湖だけを見に来るのでは能がないなということも常々思っているところでして、そのために、人の流入というか、来ていただく方が足をとめて見てもらえる、そのような環境を整備したいなとも思っております。

その一環で、新城市側から入ってくる南の玄関口の豊川に面したところに、一つ、清崎というエリアがございます。設楽町は本当に山が多いところで、平場が少ないのですが、唯一平らを保有しているところです。そこへ新たに郷土資料館、これは既存のものがありますけれども、老朽化が進んだということもありまして、これを契機に新しく作り変えようということ、多くの人たちに改めて見て

もらえるような資源として、これをつくり上げたい。その横にコンビニがあり、また、ヤナ組合というか、そういった組合が経営しているアユですとか、そういったものを提供する施設があります。そうしたものを全部一体化して、道の駅構想に持っていこうと。そして、郷土資料館、買い物、それから食材の提供、その中に、また対面側にはアスレチック公園ですとか、子供たちが足をとめて遊んでいけるような、そのような環境を整備したいなど。そして、豊川に一本橋をかけます。その橋をかけた川沿いを約2キロメートル上流に上がりますと、129メートルのダムの堰堤が出現するわけです。

129メートルの堰堤にぶつかってしまうと行き止まりになるわけです。今のダムはこのダムもそうなのですが、そこに管理用のエレベーターがついております。そうしたものを利用させてもらって、そのエレベーターで129メートル上がるとダム湖が出現すると。その右岸側には下流市町で計画してもらう、上下流の交流施設をそこへ整備しよう。この交流施設の用地というのは、ダム本体を掘削したときに出てくる残土を埋めて、約9万平米という平らをつくるわけですが、そこへいろいろな、スポーツ交流ですとか、そういったものを主眼とした交流的な施設をつくっていきなさい。そして、さらにはダム湖周辺を周遊できるような、マラソン大会ですとか、また、秋の紅葉ですとか、春の桜ですとか、そういったようなものを見て楽しめるような環境を整備していきたい。

そして、さらには長尺の、本当に大きな長いレインボーブリッジ、これは宮ヶ瀬ダムというダムにはあるのですけれども、そういう大きな橋が2橋ほどかかり、また、周辺にもそういった橋梁等がかけられる。そんな風景が出現してくる。そうしたものを今後は利用して、観光の資源として、これを活かしていこうと思っております。そして、多くの人た

ちに来ていただき、イベント等を開催することによって、また、今までにない形のものをつくり上げていこうと、そんなことを一つは思っております。

そして、2点目としては、スポーツイベントというものに視点を置いてみてはというふうに思います。奥三河の地形は山岳地帯で、800メートルから1,000メートル級の山岳がずっと連なっています。新城市から始まって、東栄町、豊根村、そして設楽町、そういった、ぐるっと周遊ができるというような山岳があるわけですが、そうしたところを山岳トレイルという、そういったような競技ができるような大会を全国区レベルで押し上げていける、そのような状況をつくり上げてみてはどうかと。

それと同時に、サイクルスポーツロードレース。これは、例えば新城市を拠点として、257号を通過して設楽町、設楽町から一番山岳の高い高原道路を通過して茶臼山高原、そして豊根村へお入りして東栄町へ出て新城へ帰ってくると。これを周遊すると約100キロメートルから150キロメートルぐらいの延長ロードコースになろうかと思いますが、そうしたところをスポーツイベントとして活かす、そして、多くの人たちに来てもらえるような、そんなスポーツ大会を、これも全国区レベルで推し進めていけたらどうかということも思います。

そして、先ほど引佐の伝統芸能等、ご紹介がされましたが、この中部圏の中心地、この三遠南信というのは、昔から各地に伝統芸能というか、伝統で言い伝えられている、そういった行事がずっと盛んに行われています。これをもう一度見直すというか、大きくクローズアップさせるような、この三遠南信地域で押し上げていくような働きかけというものを、これからもう一度目を見開いて、多くの人たち、遠くの人たちもこうした状況がわかるようなPRを進めて、多くの人たちに来

てもらおう中での交流、そして観光につなげていくと。このような働きかけも重要ではないかなとは思っています。

思いつくまま、我々の地域で今後さらにこうした交流促進策ということも踏まえた場合に何ができるかなというようなことの一つの例として考えてみました。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございます。

それでは、最後になりましたが、愛知大学の総合郷土研究所研究員の平川さんから、学の立場から、ご発言をお願いします。

愛知大学総合郷土研究所 平川研究員

学の立場と言われましたが、私は別の組織にも属してまして、御存じの方も多いと思いますが、2年前に三遠南信住民ネットワーク協議会という団体を立ち上げました。その団体は、東三河、遠州、南信州のNPOや任意団体、地域づくりにかかわる団体と個人が50団体集まりして、事業を連携・協働してすすめ、さらに三遠南信地域の交流連携も深めていくために立ち上げた団体です。また、ことし2014年7月から、新SENAが立ち上がりまして、そのオブザーバーという形でもSENAの一員として今後かかわらせていただくことにもなりました。

協議会では毎年、プロジェクトを組んで、我々のできる範囲の中で、そのプロジェクトを進めています。現在は、3つのプロジェクトを立ち上げ、特に力を入れているのは、三遠南信「祭り街道」連携プロジェクトです。

この「祭り街道」というのを、知らない方がいらっしゃると思いますので簡単に説明します。阿南町に「祭り街道の会」という団体が15年前に設立されまして、豊橋市から飯田市まで南北に延び、阿南町も通る国道151号を対象に、沿線自治体を「祭り街道」と

名付け、祭りや伝統芸能を広く認知してもらおうとPRする取り組みを行っています。

現在は、阿南町、豊根村、東栄町の3町村までの国道151号を「祭り街道」と呼んでおり、それをさらに南へ、それから北へ延ばしていこうと三遠南信住民ネットワーク協議会と連携して取り組んでいます。今現在、新城市に「協力をお願いします」ということで、話を進めている段階です。さらに、この後、東三河のほうでいえば、豊川市、豊橋市、さらには渥美半島、南信州のほうに行きますと、飯田市、さらに高森町、松川町、駒ヶ根市というところまで延ばしていければ延ばしていこうと考えているところです。

三遠南信地域の連携ですので、国道151号にとどまらず、遠州側にも広げていくことができます。先ほど前嶋会長から紹介がありましたように、市町村合併によって中山間地域を取り込んだ浜松市は、貴重な国指定重要無形文化財がある自治体になりました。岩井市民部長もこのことについて触れておられました。そのことを広く知ってもらうためにも「祭り街道」の遠州版として延ばしていきたいとも考えています。

さらには、東三河から遠州にかけての道路といえば国道257号があります。遠州側の祭り街道にとどまるだけではなく、国道257号を北上して設楽町まで延ばし、さらには、三遠南信地域の西側（南信州）の谷にある国道153号まで経由して、「祭り街道」をどんどん延ばして、それを面という形で三遠南信地域の「祭り街道」連携をつくり上げていくことも可能です。

これが現在、三遠南信住民ネットワーク協議会が進めているプロジェクトの1つです。

ただ、三遠南信住民ネットワーク協議会といっても、皆さん、本職である自分たちのNPO活動がありますので、協議会のほうに重きを置いて活動することはできないというのが実情です。

しかしながら、SENAの一員として我々協議会もオブザーバーという立場でありますので、何とか活躍していきたい、連携をしたいという強い思いを持って活動をしていますので、要望とは言いませんが、これも住民レベルだけではなくて、行政、それから、経済界を含めた、これまで以上の連携が今後必要になっていくだろうし、ぜひとも協力をしていただきたいと思います。

こうした取り組みは上下流の都市と農山村交流が促進されるという意味でもよいことだと思いますので、その辺のところも一つ、考えていければと思います。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝副学長

ありがとうございました。

伝統文化のネットワーク化を図るということだと思います。

あと1分少々で5時になってしまいます。若干時間配分を間違えましたけれども、最後に私から簡単に、この後の報告会に向けての皆様のご意見の総まとめという形で確認をさせていただきたいと思います。

それぞれの自治体、あるいは商工会等で本当に多様な取り組みをされているということが確認できたと思います。特に私が今回感じたのは、皆様のご発言が、自分の自治体の中だけではなくて、もう既に周りの市町村と連携して何ができるかという観点からご発言をいただいていたというところに非常に感銘を受けたというか、既に広域連携は必須の条件であるという皆様の理解なのかなと思います。

特に東三河はこれから広域連合で、まさに東三河全体でどうしていくべきかという議論が多分進んでいるだろうし、南信州については、もう既に広域連合ができ上がっていて、そこでいろいろな取り組みを進められているし、浜松については、浜松市自身がもう中

山間地域を含む形の自治体ということで、最初にご報告ありましたように、上下流の連携をもう市独自で単独で進められていると。

それぞれができること、また、三遠南信全体で SENA として取り組む事業というのも多分あるのだらうと思います。その辺の整理をしながら、これからそれぞれがやっていく。SENA は SENA、それぞれの三つの県は三つの県、そして各自治体、それはできること、できないことがあると思いますので、そういう形で進めていく必要があるのかなと思います。

そういったことの前提に立って、これまで進んでおります、これからも進むであろう道路基盤整備の効果を活かしながら、やはり雇用創出、あるいは定住促進ということに向けて、産業分野、あるいは観光分野の施策をこれからはしっかりと推進をしていくということが1点だらうということ。

そして、この三遠南信の、特に中山間地域の持つ魅力、先ほどから出ています自然景観、森林資源、あるいは伝統文化、こういったものを、圏域の中はもちろんですけれども、外に対しても効果的な発信をしながら、外部からの交流人口をいかに増やしていくかという、そういう政策の検討を今後していく必要があるのではないということが2点目になります。

そのために、三遠南信地域内の行政、団体、経済界などが広域連携をいかに強化していくことが最も重要。当たり前のことではありますが、広域連携そのものがこれからますます重要になってくるだらうという、その3点で報告会では報告をさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

どうもありがとうございます。

最後、若干時間がオーバーしてしまいましたが、非常に中身の濃い意見交換だったと思います。

これで、「山・住」分科会を閉会させていた

だきます。

どうもありがとうございました。

■ あいさつ

三遠南信住民ネットワーク協議会

代表世話人 田中孝治氏



2005年からサミットの中で住民セッションができ、2巡して住民ネットワーク協議会ができました。そして3年間かけて住民ネットワーク協議会として連携活動をしてきました。このサミットでこれまで3年の活動を整理する形で、特産品の交流、祭り街道と呼んでいるこの地域のDNAとも言える「祭り」による三遠南信の結びつきの活動、新しい動きとして芸術活動やスポーツによる交流も起こってきました。この3つのプロジェクト進めていくことが次の3年に向かっていく活動の目標と考えています。

住民セッションでは、3つのプロジェクトの経過を報告し、その中で何が課題であるか、活動をもっと充実するための解決策、内容の報告より次に向かっていく提案発表をお願いします。3つの報告の後で、それぞれ3つのテーブルに分かれて、参加者のお知恵も借りながら、問題の解決策や、もっとよくなることを話し合っていきたいと思います。

我々は、組織力もお金もありませんが、他の仕事も抱えているので大きなことはできません。その代わり転勤・異動もないからずっと活動をし続けていけます。最近、新しい人（若者）や女性が入ってくれるようになってきました。今日は2時間ほどの短い時間で

すがよろしくお願ひします。



■ 第1部 プロジェクトの現状と課題報告

① 三遠南信「地縁店」展開プロジェクト

報告者：中野 眞氏

(NPO 法人三遠南信アミ)



三遠南信地域のすばらしい農産物・加工品を地域にもっと広くPRして販売していこうという取組みです。三遠南信地域は、天竜川を背骨にして東西南北に広がっています。標高0m～1,000m以上の地域、時間距離は3時間ぐらいでつながっています。三遠南信道路などインフラの整備も進み、時間距離は短くなっている中で、農産物や加工品を地元を広げて買ってもらうことが必要として取り組んでいます。

浜松では平成22年から浜松駅前の商店街「モール街」で軽トラ市が始まりました。そこで毎月1回、三遠南信のものを販売しています。飯田の南信州ここに、売木村、なべくら高原、東栄町のとほへ、設楽町、豊橋市

などから月1回PR販売する機会を作ってきました。そして、「遠江特鮮市場」という店でこの地域の特産品をアンテナショップ的に販売する取組みをしています。

また、三遠南信アミでは3～4年前から売木村の人たちと、浜松の三方原の大根を使って南信州の食文化「凍み大根」を作っています。信州ではたいへん売れるので、浜松には回って来ないのでもっとたくさん作って浜松でも南信州の食文化をPRしていきたいと考えています。

南信州ここにさんが中心になって南北の交流として、里の（遠州の）みかんと山（南信州）のリンゴを物々交換のように南信州でみかんを、遠州でリンゴを売り合うこともやっています。海の家産物を飯田に運ぶことも南信州ここにさんは取り組んでいます。

三遠南信のアンテナショップとしては、平成24年から飯田市の「あざれあ」という農産物の直売所をここにさんが運営されることになったので、そこで遠州や東三河の特産品をアンテナ的に扱っています。東三河では、これから新東名の開通に合わせて新城市が設置する「道の駅」で三遠南信のものを扱ってもらうような働きかけをしています。

課題としては、5つあります。

- ① 自立していくためには稼がないといけない。多品種で少量のモノを運ぶのはなかなかコストがかかり、採算が合わないので、この点をどうしていくかが大きなテーマ。
- ② 作っている側はおいしくてよいものと思っても、これが消費者ニーズに合っているか調査しないとイケない。
- ③ まだすばらしいモノを消費者に届けられていない農産物や加工品の掘り起しもしていかなくてはイケない。
- ④ 新商品の加工品として6次産業化による商品開発も大切になってくる。南信

州の加工品を作る力は実感している。浜松はものづくりのまちと言っても食品のメーカーが少ない。南信州や東三河のメーカーのお願いすることが多い。そんな加工力を持った地域と農家の農産物を連携していくことも大切。

- ⑤ 野菜づくり、果物づくりの名人がたくさんいる。この人たちのノウハウや技術を継承していくことも大切。

今日は、みなさんからの意見や情報をいただいて、連携を深めて「地縁店」のネットワークをもっともっと強固なものにしていきたいと考えています。よろしくお祈りします。

② 三遠南信「祭り街道」連携プロジェクト 報告者：伊東直幸氏（祭り街道の会）



今年は、三遠南信の「祭り街道」を提唱して15周年を迎えました。9月14日に15周年のイベントがあり、遠州の大念仏にも来て盛大な催しことができました。

三遠南信地域は、かつては日本の中から人が行き交い、交流の盛んな地域でありました。こうした賑わいを復活させたいと祭り街道の取組みが始まりました。沿線には国指定の重要無形文化財の祭り（14箇所）があり、今も輝いています。祭り街道があり、国指定だけでなく県指定選択文化財など祭り文化の吹き溜まりの地域であるので、かつてのにぎわいを取り戻したいとして交流を進めている。13年後にはリニアが通り、近く新東名の新城ICができてきます。そのようなことを活かし

ていきたいと考えています。

三遠南信サミットに参加して4年目。協議会では今年は祭り街道の連携という事業を取り上げてもらいました。阿南町から東栄町までのものを新城市まで延長しようという話しが持ち上がりました。

そのことを今年協議会で新城市に祭り街道延長に協力を要請しました。市長や議長にこれから作る「道の駅」もつくるに特産品のコーナーや情報コーナーを設置する要望をしてきました。具体的には、祭り街道マップの作成、道の駅に情報コーナーで祭り文化の発信や特産品を販売するコーナーを設ける話などを行っています。特に、“五平餅”により祭り街道でつなげたらという考えが出てきています。

私たち祭り街道の事業では、祭り街道制定15周年で、前夜祭として1月14日に新野の本物講座・鑑賞会を開催しました。8月14日の盆踊りは、県からの補助金ももらいながら、郷土色ある浴衣を作って、地域の人、帰省客、都会からの人に浴衣を着て楽しんでもらいました。

9月14日に15周年のフェスティバル。3月和合の念仏踊りが重要文化財に昇格し、遠州大念仏、東栄町の花祭りの人たちを集めて、盛大に開催しました。

現在、この151号の祭り街道をさらに遠州祭り街道（152号、257号）につなげる運動が起き始めている。沿線各地域は疲弊しています。祭りが衰退する地域は地域も衰退します、祭りの元気が地域の元気につなげ、交流に話題やソフトを付加し、地域の活性化につなげていきたいと考えています。国がすすめている「地方創生」に手を挙げて、民間でやっていることを支援してもらいたい。

蛇足ですが、下條村では、ローカルヒーロー活性化マンというものを作って、若い人たちが地域にお客を呼び込むよういろいろ取り組んでいます。新野の雪祭りの神様もヒーロー

とは無縁ではなく、遡れば750年ほど前、村人たちがいろいろ考えて、祭りに“神様”を登場させたという気がします。時代ごとにヒーローが存在しますが、子どもから大人も喜ぶものが大事であると思います。

今後、祭り街道をいかに利用し、連携を図るために何をしたらよいかが課題で、この後の分科会で話し合ってもらいたいと思います。

報告者：上嶋裕志氏

(浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会)



遠江のひよんどりとおくないの3つが国指定の無形民俗文化財で、その保存会で協議会を発足しました。そして、同じおくないの祭り6団体で連絡会が構成。相互訪問、民俗芸能サミットもやった。知ってもらうためにガイドブックを作り、舞いの説明をしています。ガイドブックは1部500円で販売し、完売。売上を次の発行の財源として確保してあります。

そもそも浜松市からの働きかけで連絡会を作りました。旧浜松市では無形民俗文化財がありませんでしたが、合併により無形民俗文化財があるまちとなりました。お宝をなんとかしようとなりました。19の団体が集まって連絡会が発足。地域の祭りを結束するためには、いい手段であると考えています。連絡会では、祭りに行ってみてもらうことや年2回の広報誌を発行しています。19団体がそれぞれ特徴ある祭りで、地域が根付いています。歌舞伎、大念仏、おくない、ひよんどりなど。団体が一堂に集まって市全体が無形民俗文化

財の宝庫であることをアピールしていきたいと考えています。

それぞれ文化財指定されている祭りは、1つの指定に複数の祭りを合わせて登録されており、この地域には全国でも珍しい中世の民俗芸能が数多く残されています。

この地域には国・県の選択無形民俗文化財もいくつかあります。祭り街道は、国道151号中心で始まりましたが、東三河にも田楽や鬼祭があります。その鬼祭はいたる所で驚くようなお祭りをやっています。

今後、3つの圏域の連携にもっていくためには、南信州地域をまとめてもらい、東三河地域のまとまりができてくれば、三遠南信の連絡協議会ができ、三遠南信民俗芸能サミットなども行っていけたらと考えています。日本全国から集まってもらえるものになり、地域全体で「世界遺産登録へ」となっていけばよいと思っています。

③ 三遠南信「芸能・スポーツ街道」プロジェクト

報告者：大脇 聡氏（NPO 法人てほへ）



NPO法人てほへの紹介ですが、東栄町の「志多ら」というプロの和太鼓集団が5年前に立ち上げたのがNPO法人てほへであります。今年6月22日の浜松のアクトシティでの公演では、1,000人を超える参加者がありました。ロビーでは住民ネットワーク協議会のパネルや写真の展示を行いました。

てほへは、志多らの公演などの際、奥三河のPR大使として全国の人に奥三河地域を紹介

しています。

「蒼の大地」は、住民ネットワーク協議会でサポートしてもらいました浜松公演以外に飯田でも豊橋でも公演に協力してもらいました。この後、蒼の大地は豊橋と新城で公演をして終える予定であります。

志多らが根づいて25年くらい経過し、私たちは花祭りを住民の1人として舞いをやっています。蒼の大地は、祭りがいかに地域にとって大事で、住民の力の源になっていることを全国の人に知ってもらうことをコンセプトにしています。祭りをやり続けるのは、何百年も祭りがただあるから守るのではなく、地域にとっての役割、暮らしていくノウハウや思いを伝えていくためのツールと考え、1年に1度やるのが地域を維持するのに大切と感じています。

プロの（芸能）集団が未来に向けて新しい作品として芸能を作っていくことが大事であると考えています。ヒーローなども含め、新しい形に変えていき若い人に伝えることができたらと思っています。古くからのものを受け継ぎながら新しいものを入れる。これが何百年もつながるものになると考えています。そのようなことを考えて、試行錯誤しながら新しい作品と新しい人材につなげていく活動をしています。

この三遠南信には、私たち以外にカネトの合唱、果てぬ村のミナなど新しい文化が生まれています。

これからは、若い人が連携していく大切さに気づくことが大事で、そのきっかけがないと難しいと思います。ただし、自分たちの興行がうまくいかないと生きていけないのも事実です。安定していくとそこに余裕が生まれ、少し考えられます。ただ活動団体は損得勘定だけでは動いていないので、そこをサポートしていただきながら、新しい人材を育てていきたい、子どものうちから種をまいていく活動をしていかないといけないと考えています。

若い人が地域を越えてつながっていくこと、それを伝える活動は大事です。若い人が入りやすい取組みは大切だと思います。

てほへの若い人材の育成として、愛知県の緊急雇用対策で4名雇用して、遊休建物の活用に取り組んでいます。しかし、大切な核心となると伝えるには難しいと思います。のめりこんでやっている学生など頭でわかっている人をリアルに引き込んで、自分で動ける人材にしていくためには、地域に入って経験しないとわからないと実感しました。そのような育成のきっかけづくりは大事であるところの1年で思うようになりました。

自分たちの活動だけでなく、連携の必要性に関してモチベーションを上げていくことが課題。そこに若い人を入れ込んで、育てていくことが課題であると思っています。

やってみたいことの提案は募集していますので、よろしくお願いします。

報告者：三宅淳子氏

(NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっと)



新しい連携プロジェクトの1つとして、三遠南信圏域ブランド「三遠南信物語」について提案と情報提供をさせていただきます。先に報告のあった3つのプロジェクトも本事業を活用しながらいろいろな所に発信していけるとと思います。

本事業の圏域ブランド創造のねらいは、地域資源を活用してモノのブランド化と地域イメージのブランド化を図り、発信していくことです。地域資源活用による観光まちづくり

の取組により、いろいろな相乗効果を生み出すことができ、その結果「住んでよし、訪れてよし」の持続可能な地域づくり、地域や経済の活性化が図られると思います。

地域イメージのブランド化のコンセプトとして、わかりやすい呼び名で東三河を「ほの国」、遠州を「いの国」、南信州を「きの国」と3つの国の物語で「三遠南信物語」という新しい形で地域ブランドを構築しようというものです。地域資源を活用した五感に響くブランド化です。言葉の意味としては、南信州は、アルプスの山々の森＝木（き）と神に出会う里・パワースポット＝気（き）、遠州は、天竜川の水の恩恵を受け、水にまつわる伝承が多いことなどから井戸＝井（い）です。

ただし、一般の人にはピンと来ません。何か語っていくきっかけが必要で、いの国の魅力を伝える物として、「いのくに物語」という焼酎を商品化しました。ボトルのラベルに「三遠南信物語」の解説を入れました。この商品は、25日に開催されたしんきんサミットの会場で初売りし、完売しました。

今年度全国商工会連合会の事業採択を受けて、三遠南信地域の観光と・物産の展示販売会と商談会を実施します。NPOでの事業採択は珍しく、商品の販売促進や販路を開拓していくものです。浜松、東京、名古屋で、企業や事業者、商工会・商工会議所、観光協会等と連携しながら実施します。今回報告の連携プロジェクトもこの事業を大いに活用していただければと思います。また、地域住民が参画する仕組みをつくるのが大きなテーマでもあります。本事業を契機として地域力のアップと、三遠南信流域都市圏の創造を目指したいと思います。

■第2部 車座討議／

グループワークショップ

これから3つのプロジェクトに分かれファ

シリテーター（進行役）のもとで、課題解決のための方法や新しい発想、アイデアについて自由活発に話し合います。進行役となるファシリテーターは、三遠南信「地縁店」展開プロジェクトが NPO 法人地域づくりサポートネットの山内秀彦、三遠南信「祭り街道」連携プロジェクトが NPO 法人三遠南信アミの水島加寿代さん、三遠南信「芸能・スポーツ街道」プロジェクトが NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっとの三宅淳子さんが務めます。

（グループに分かれて約 1 時間の話し合い）



グループ報告

- ① 三遠南信「地縁店」展開プロジェクト
報告者：ファシリテーター 山内秀彦
（NPO 法人地域づくりサポートネット）



このグループは、コンパクトな人数で具体的な話し合いになってきました。3つの圏域でのアンテナショップについて話しました。結論から言うと「地縁店」としては、生鮮品ではなく、何か絞り込むことでこの地域に伝わる「五平餅」に絞り込んだ形で展開してい

こうという意見になりました。既に商標登録されている“祭り五平”を売り込んでいく、もの売りではなく、コト売り、あるいは地域売りとして、五平餅で地域を売っていくことが提案されました。祭り街道五平餅として、トッピングや味付けを各地域の特性を出し、新野味とか、飯田味のように各地で販売していき、五平餅のサーティワンなども考えられます。

そして、3つの圏域が一緒になって、東京のデパートなどにもパックにして販売・出店できるのではないかと、家の1軒2軒も立つのではないかとという意見で盛り上がりました。今あるものを売りながら、道の駅にも出店し、食べてもらう。そのように地縁店は実利がある特徴的なプロジェクトにしていくべきだとなりました。

後日、この話をもう少し詰めるためのプロジェクト会議を開催しようということになりました。地縁店展開は、祭り五平の特化した形で進めていくことで一致しました。祭り五平の商標登録している伊東さんにも祭り五平の名前を使うことは了解していただきました。

- ② 三遠南信「祭り街道」連携プロジェクト
報告者：ファシリテーター 水島加寿代
（NPO 法人三遠南信アミ）



祭り街道からスタートした祭りの動きは、これから面にしていき、三遠南信エリアとしてしっかりとPRしていくことになりました。

これから具体的にどうしていこうかと思った時に、これから人がいなくなる、お金もな

い中で、どうやって続けていくかが課題であります。伝統芸能・民俗芸能に興味を持つ人の絶対数は少ないかもしれませんが、確実に全国各地に興味を持つ人いるので、その人たちに発信していく。SNSは若い人は使っていますが、まだ知られていないことがたくさんあります。お金をかけずに私たちは自分たちが知っている祭りを発信していけば、全国又は世界に発信していける。お金をかけずにスタートができます。実際に重要文化財に指定されたところは恵まれたところであり、指定されない本当に小さな小さなお祭りがまだまだ残っているところもあり、その土地の良さ、風習や食などを活かした祭りが存続しており、まだ発掘されていないものもあります。それも見逃してはいけないと話し合いました。文化財指定云々のお墨付きはありがたいが、自分たちが住民ネットワーク協議会としてこの祭りはいいね！すごいね！応援したい！と思える祭りを発掘・発信していこうとなりました。

たとえ情報網としてあるからと言って一緒に抱えていくものではありません。祭りにはよその人に入ってほしくない神事の部分とよその人も入って一緒に盛り上がり、踊りまわってというように分けている部分があります。それらを知って、学んで勉強することをやっていきたいと思いません。三遠南信アミの元理事長であった松田不秋先生が三遠南信を学ぶ会で各地の伝統芸能を見に連れて行きました。私たちはそれを引き継いで講座として祭りを見に行っていないので、協議会の企画などでやりたいと思っています。なにせ祭りは開催時期が重なることが多いので、相手のところに行きたいけど行けないことがあります。時期を外した時に行くであるとか、祭り街道サミットなどで情報交換する機会を企画していきたいなどの意見が出されました。

ただし、話し出したら終わってしまいました。

これをスタートにして、祭りをどうしていくかを第1歩第2歩と進めていきたいと話し合いました。したがって、このプロジェクトも次の集まりを企画したいとなりました。

③ 三遠南信「芸能・スポーツ街道」プロジェクト

報告者：ファシリテーター 三宅淳子
(NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっと)



スポーツと芸能ということで、どうつなげるのか悩んだわけですが、まず芸能の持つ力や魅力をどう感じているか聞いてみました。スポーツと芸能は、地域を軸にして活動しているからこそ地元の人が魅力を伝えることができ、地域の良さや魅力の再発見、いろいろな気づきを得ることができます。また、芸能スポーツはわかりやすいテーマなので、顔の見える関係がつくりやすいといった話ができました。

スポーツを中心に活動している団体からは自己の可能性へのチャレンジ、自己表現ができるといった意見が出ました。課題としては、どういう魅力を発信し、どのように継承していくかが課題であります。

また、若い人の巻き込みも大きな課題です。たとえば、ジュビロ磐田では、若い人たちがボランティアで仲間と一緒に会場でごみ拾いをしています。スポーツ・芸能は、人の心を動かせるパワーがあります。その魅力を伝えながら、若い人を引きつける知恵と工夫が必要です。

さらに、具体的な問題として、新・旧の芸

術活動の情報がバラバラであることがわかりました。これを1つに集約し、情報発信していく、あるいは情報交流していくことが重要です。

芸能・スポーツをテーマとした軸となる連携プロジェクトを進めていくことで、若い人の巻き込み等がうまくいけば明日への架け橋になると思います。



■第3部 まとめ／全体

本日のプロジェクト報告と課題、グループの話し合いの中で、情報発信に課題があります、わかりやすさがキーワードになること。知ってもらうこと、学ぶことも大切であります。新しいものと古いものの情報がバラバラであることが課題である、それを1つに集約していく必要があるという意見が出されました。

その中で、祭り街道五平餅は具体的でコミュニティビジネスになっていく可能性もあり、実利のあがることをやろうというのが住民ネットワーク協議会の元々の発想であり、そんな動きにつながってきました。

■まとめ、閉会あいさつ

三遠南信住民ネットワーク協議会

副代表世話人 木下利春

住民ネットワーク協議会には、副代表世話人が2名いて、東三河と南信州といますが、東三河の世話人が体調不良で欠席なので、昨年度の代表世話人であった木下さんからまとめの挨拶がされました。

この住民セッションも2巡目に入り、やっと何をしなければいけないか、身の丈のことがわかってきました。その中で、やはり若い人たちをどう育てていくか、地域に根おろしていくか、持続性を考えるとそれが我々住民ができることで、一番大きなことであると感じました。

行政や経済界があるが、気持ちは一致しており、お金をかけず活動しているということが大切であります。重要性はお金ばかりでなく、何が大切であるかについて各地域で話し合うことが大事です。そうしないと地域の文化や歴史が埋没してしまいます。これから全国で集落が消えると言われていますが、この地域もいろいろなものを持っているだけでは力にはなりません。一人ひとりの力も大切です。

また、儲かるかどうかもポイントであるけれど、私を含め生きているうちはやるという人がいます。そんな気持ちをもった人が1人でも多くいることだと思っているので、次の世代につなげていくことが課題であります。

住民セッションが2巡・3巡して、ようやく行政からも予算付けしてくれるようになってきました。芸能・スポーツの連携でもSENAが後押ししてくれて、スポーツの交流として静岡県が予算をつけ、ジュビロが三遠南信をテーマに交流しています。飯田でもジュビロの応援もしています。そのような活動をこれからも広めていきたいと思っています。

10 報告会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、浜松市長がサミット宣言を行った。また、豊橋市長が次回開催地域を代表してあいさつをした。

■「道」分科会

コーディネーター／浜松市長 鈴木康友



今回の「道」分科会は、三遠南信自動車道等が部分的にしても供用が開始をされて、それぞれの地域で予想以上にいろいろな整備効果があらわれているということで、今回は各地域で、「こんないい効果が出ている」だとか、「こんないい影響があった」という、具体的な報告をいただくとともに、逆に、そこから見えてきた課題、あるいは、「こうすればもっともっと整備効果が上がるのではないか」、そんな二つのポイントでご意見をいただきました。

分科会における主な議論としては、三遠南信自動車道の供用開始により、救急医療体制の拡充や産業・観光等の活性化のほか、町の知名度アップ等につながるなどさまざまな効果があらわれている。いろいろ具体的な事例も交えてご報告をいただきました。

また、人口減少時代にあって、近隣の自治体の連携を深めるためにも、三遠南信自動車道のように、本当に必要な道路こそしっかり整備を進めるべきであると。あれもこれもというよりも、こうした整備効果の上がる必要

な道路はもっとどんどん整備してくれと、こういうご意見でございます。

あるいは、三遠南信自動車道など基幹道路の整備とあわせて、生活道路やバス路線など整備効果を一層高めるための地域交通体系のあり方についても、今後、研究していく必要があるといったご意見がございました。

こうしたことを受けまして、本日の「道」分科会の結論ですが、1といたしまして、三遠南信自動車道の整備が進み、救急体制の拡充や生活圏の拡大、観光・産業の活性化など本地域の活性化が徐々に図られつつある。2、一方で今なお整備が途上であったり一部遅延するものがあったり、交通基盤の整備における課題は依然として存在する。3、人口減少時代における三遠南信地域のさらなる活性化の基盤づくりとして、三遠南信自動車道を初めとした基幹道路の早期整備を目指し、地域全体が一丸となって国及び県に強く要望する必要があるとの3点でまとめさせていただきました。

基本的な方向性というのは、これまでもろもろ踏襲をしておりましたが、一部供用開始が行われまして、予想以上の効果を実感しているということを踏まえて、なお一層具体的な整備推進に向けた取り組みをしていこうと、まとめさせていただきました。以上、「道」分科会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

■「技」分科会

コーディネーター／光産業創成大学院大学
江田英雄リエゾンセンター長



「技」分科会の報告をいたします。「技」分科会といたしましては、全体の議論の流れとしては、新事業をどうやって創出しようかという話、あとは既存事業をどうやって大きくしていこうかという話、それに加えて、どういふ人財を育てていくのかというような、主にそういう点に関して議論をいただきました。

出た意見といたしましては、やはり人財育成では地域に役立つ、地域に根ざした形の人財育成が必要であろうかという点が出てきました。

それから、各地域の得意分野として、SENAとして得意分野同士で連携していくという、そういう連携が今後必要ではないかと。有機的に連携していこうというような意見が出ました。

それから、大学が人財育成の場として想定されるケースがあるのですけれども、どうも相談しにくいと。大学が何をしているかわからないという意見が出ました。SENAで大学への相談窓口のようなものをつくってもいいのではないかというようなおもしろい意見も出てきました。

以上の意見を踏まえまして、「技」分科会といたしましては、以下の3点の意見をとりまとめさせていただきます。

各構成の取り組みとして、国内外から人・もの・金が集まるような魅力ある新産業及び

環境の創出・集積を図る。以上が1点目です。

2点目は、これをさらに発展・拡大させるために必要な人財をどうやって育成するか。県境連携、あるいは大学、行政、企業、市民団体の連携という点から仕組みづくりを検討する。以上が2点目です。

3点目として、環境を創出する取り組みの一環として、SENAの事業というのをどんどん実施していく。

以上の3点をまとめとして報告させていただきます。

■「風土」分科会

コーディネーター／特定非営利活動法人
三遠南信アミ 黍嶋久好理事長



それでは「風土」分科会のご報告をさせていただきます。分科会には市町村長7名、商工会会長1名、住民団体から2名、の10名で議論が交わされました。分科会のスタートは、三遠南信住民ネットワーク協議会の田中代表世話人より「祭り街道を活かす活動について取り組み」の報告をしていただきました。この中で三遠南信住民ネットワーク協議会が取り組んでいる活動について報告をしていただきました。「人」、「もの」、「情報」の三つのキーワードを使って三つの取り組みについて説明をいただきました。

1つ目の「地縁店」は、東三河、遠州、南信州の3地域のアンテナショップとして「地産地消」を超えた「互産互消」として3地域

の特産品をお互いに紹介・販売をしようとするものです。新城市の「もっくる新城」は、新東名高速道路の新城インターチェンジと一般国道151号新城バイパスとの結節点にできる予定で、現在要望中とのことですが、ぜひ3つの拠点において情報発信や人の交流が生まれることを期待したいと思います。

2つ目は「祭り街道」として、伝統芸能の宝庫である三遠南信地域の至るところで開催されるお祭りを、圏域内にある「道の駅」等で情報発信をしていこうというものです。道の駅は、旅の方が訪れる情報スポットです。こういった場所を活用して、お祭りを求めてまた来てもらうというものです。

3つ目は「芸術」「スポーツ」街道ということで、各地で行われている「芸術」「スポーツ」等の催しを相互に応援し合い、地域交流を行おうというものです。平成24年に設立された三遠南信住民ネットワーク協議会ですが、このように具体的な取り組みがなされています。「人」だけではなく、「情報」や「もの」の交流が進んでおり、今後の取り組みがますます発展されることを期待します。

分科会のテーマは、「塩の道エコミュージアムの形成」とし、それぞれの地域資源を活用した事例紹介、ファン獲得の工夫、連携・ネットワーク化についての課題について、意見交換をしました。

事例の紹介でございます。飯田市と浜松市との「峠の国盗り綱引き合戦」という取り組みがありますが、昨日その戦いが行われたところです。今年は、浜松市が勝利し、1メートル境界が変わりました。この取り組みは今年、サントリー文化財団が主催するサントリー地域文化賞に見事選ばれました。古くは人と物の交流が盛んに行われていましたが、かつての交流を復活させる取り組みとして評価されました。昭和62年から続いている交流イベントです。

磐田市からは、農林水産物を使ったスイー

ツをとという例のない取り組みをご報告いただきました。農林水産物を素材としたスイーツを発掘し、農林水産物の販路拡大及びブランド化に繋げていこうとするものです。将来的には、磐田市の名物となるようなスイーツの創出を目指しており、行政、JA、商工会議所、金融機関が連携した取り組みとしてご紹介いただきました。他にも地域資源を活用した取り組みをご報告いただきました。

更なる連携に向けての意見が出されました。事例に出てきた取り組みを地域資源の情報を体系化し、共有していくことで新たな連携につながるのではないかと。その一例として田原市と飯田市の連携で生まれた焼酎「亀若」はそれぞれの得意な分野で連携した成功事例があります。課題解決によりもっと新しい連携が生まれる可能性が高まるものと思われれます。民間団体との連携によって生まれており、連携の強化がのぞまれます。

広域観光を推進するためには、三遠南信地域の歴史や風土との関わりを共有する必要があると、それらに物語性を付加させて、連携に繋げたらどうかという素晴らしいアイデアもいただきました。

これらの意見を踏まえまして「風土」分科会において3つのポイントでまとめ、ご報告いたしました。

1. 今回の意見交換で出されたアイデアやそれぞれが持つ地域資源を認識し合い、それを体系化し、持続的な観光客誘致に結び付けられるよう情報発信力を高める。
2. 地域資源の活用に取り組む民間団体との連携を強化する。
3. 三遠南信地域の歴史や風土を整備し、それに結びつけたストーリーを持った広域観光の推進による交流人口を増やす。

これらを確認しました。以上をもちまして「風土」分科会の報告とさせていただきます。

■「山・住」合同分科会
コーディネーター／豊橋技術科学大学
大貝 彰副学長



「山・住」分科会の報告をさせていただきます。私、この報告会の壇上に4年か5年、続けて上がっておりますけれども、また改めて、今日の分科会の報告をさせていただきたいと思えます。

初めに、浜松市の市民部長の岩井様から、「浜松市の中山間地域振興」について、ご報告いただきました。御存じのように、浜松市は1,500平方キロメートルという、中山間地域と都市部とを含めた形の非常に広域の自治体であります。そうした中で、都市部と中山間地の交流について、その交流を促進し続けることで持続的な連携を確立して、協働による地域の自立につなげていくということの必要性ということについて提言をいただきました。

引き続き意見交換に入りまして、最初に、各自治体あるいは経済界から、定住促進あるいは地域活力の維持のための取り組みの具体的な事例についてご紹介をいただきました。

それに続いて、中山間地域の活性化に結びつけるため、改めて、またこの場で、この三遠南信地域の中山間地域にはどういった魅力あるいは資源があるのかといったことの確認をさせていただきました。

そこでは、中山間地域をその中から見る視点、一方で、外から、つまり都市部から、あ

るいは東京とか都市圏から見る視点という、そういう立場でご意見をいただきました。

最後に、こういった地域資源を活用しながら、これからの上下流連携を、あるいは交流を促進していくためにはどうすればいいのかといったこと、あるいはこの三遠南信のSENAの構成員、関連する組織が連携して取り組むべき課題は何であるかといったことについてご意見をいただきました。

非常にさまざまな意見が出ましたので個別の事例については差し控えますが、今回、私が特に感じたのは、それぞれの団体の取り組みが、これまでになく非常に活性化しているなということを実感いたしました。新しい就業者が増えたとか、定住が具体的に何人、どこどこの町で進んだ、起こったということですね。あるいは交流人口が圧倒的に増えたんだという報告がございました。そういう意味では、非常に具体的な成果が上がっているのだろうなということが実感できたということです。

これは、当然ながら新東名あるいは三遠南信自動車道の一部供用開始ということによって、この中山間地域へのアクセスが非常に高まってきているということの裏づけかなと思います。もう一方で、最近の若者の価値観が多様化して、いわゆる自然回帰といえますか、自然志向する若者が増えてきているのではないかなと、そういったことも背景の一つあるのかなと思いました。

それから、もう一つ、これは感想になりますが、今回の分科会に参加いただいた皆様の発言が、従来から少し視点に変化してきているというのを私自身感じています。それは何かと申しますと、これまでは、どちらかというとそれぞれ自治体の代表であるとか、経済界の代表の方ですので、それぞれ自分のところでどういう取り組みをしている、どういう成果があったということがほとんどの発言だったのですけれども、今回は、特に東三河、東

三河はこれから広域連合を立ち上げるということもありますけれども、自分の自治体の話ではなく、自分の自治体と周りの自治体がいかに連携して、この地域を活性化させていくか、そういう視点からの発言があったということで、そういったことがこの地域の共通の認識になりつつある、広域連携ということが共通の認識になりつつあるということを非常に感じました。これも恐らく、このサミットを重ね、こういった議論を積み重ねてきた成果かなと感じております。

ということで、最後に、まとめとして三つほど挙げさせていただきました。

一つが、三遠南信自動車道あるいは新東名等の広域の道路基盤整備の効果を活かしながら、雇用創出、そして、定住促進を目的とした産業分野あるいは観光分野の政策をこれからもより一層連携しながら推進していくこと。これが1点であります。

2点目としましては、この中山間地域の持つ魅力、それは自然景観であったり、森林資源であったり、先ほどから出ています祭り街

道等の伝統芸能だと思います。こういった資源を地域内外に発信しながら、この域外からの交流人口を増やしていく。そのための施策を検討するということだと思います。これが2点目です。最後に、3点目としては、こういった施策を推進していくために、この圏域内の行政あるいは経済界など、さまざまな分野で市町村の枠を超えて、広域連携の強化をより一層推進していくということが求められるのだろうということで3点、まとめさせていただきました。

最後、余談ですが、広域連携を強化・推進するため、こういったサミットにおける分科会を年2年ほど開いていただけると、より議論が深まっていくかなと思っているところです。最後は余談です。どうもありがとうございました。



■サミット宣言 浜松市長 鈴木康友

第 22 回三遠南信サミット in 遠州では、「～変わりゆく社会環境のなかで～三遠南信の特色を活かした地域発展を目指して～三遠南信地域連携ビジョンの実現のために～」をテーマとし、各分科会において、現在の状況確認の上、今後の課題解決のための取り組みについて議論をしました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、今年度、連携体制・事業推進体制の強化を図ったところですが、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、県境広域連携の一層の発展を目指して、更なる事業の推進に取り組みます。

- 1 三遠南信自動車道は、地域連携の基軸であり、地域間交流の形成に重要な役割を果たす不可欠なものです。また、大規模災害時には、救援活動、物資の輸送だけでなく、避難路として利用されるなど「命をつなぐ道」として重要な社会基盤であることが確認されています。

今後においても更なる圏域の一体的な振興・発展のため、三遠南信自動車道の早期全線開通を始め、浜松三ヶ日・豊橋道路の早期実現、リニア中央新幹線の着実な整備推進を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一丸となった提言活動を進めます。

- 2 本地域の強みである自動車産業など多様なものづくり産業の集積を維持・強化するとともに、成長が見込まれる航空宇宙産業や健康医療産業など将来を担う新たな産業を、三遠南信地域の産学官金の機関が共創により戦略的に育ててまいります。

また、三遠南信地域内の大学と産官との連携による人財育成については、産学官人財育成円卓会議において確認されたアクションプランを実施してまいります。

- 3 「塩の道エコミュージアム」の形成に向け、自然、歴史、文化、産物など地域資源を活かす事業に取り組む民間団体との連携を強めるとともに、三遠南信の魅力の情報発信力を高め、三遠南信地域における持続的な観光客誘致を進め、また、観光資源や伝統工芸品などの特色ある地域資源を活用し、地域経済の活性化に繋げてまいります。

- 4 中山間地域を活かす流域モデルの形成に向け、都市部と中山間地域間での人・ものの参加・交流・連携事業の推進を図るとともに、情報発信体制の整備・強化を進めます。

また、地震や台風などによる、広域的または局地的な災害に対応するため、県境を越える防災の連携体制の強化に取り組み、安全・安心な地域の形成を推進します。

- 5 三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、本年度の事業部会の設置により、構成員が一丸となり、事業の一層の進捗を図ってまいります。さらに、三遠南信地域の広域観光振興、産業振興、防災、環境保全などについて、平成 28 年度を目途とした広域連合などによる連携体制の整備を目指し、引き続き各自治体間での協議を促進します。

これらの取り組みをここに集うすべての主体が確認し、第 22 回三遠南信サミット 2014in 遠州のサミット宣言といたします。

平成 26 年 10 月 27 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2014in 遠州

○次回開催地域挨拶

豊橋市長 佐原光一



皆さん、大変お疲れさまでございました。

新 SENA に移行しての初のサミットでございます。たくさんの方たちに注目される地域の県境を越えた連携、そして、それを推進する SENA という母体のあり方、応援していただいておりますたくさんの方たちの、その思いがこもった、素晴らしいサミットだったなと思っております。私もこうやって最後の最後までたくさんの方たちにお残りいただいて、とてもうれしく思っております。

さて、この素晴らしい浜松でのサミットを受けまして、来年、東三河ということで、私たちの地域が担当させていただくことになります。私たちの地域、ご案内のとおり、12月の市議会の提出を目指して、広域連合の取り組みを着々と進めさせていただいているところでございます。いろいろな方面から注目を浴びながら、また、総務省においても広域連携の取り組みがターゲットとなっている中で、いろいろな面で調整し、準備しているところでございます。来年は、私たちの広域連合が発足して初めという言い方になるかと思いますが、そうした年にサミットを担わせていただくことになりました。本当にありがとうございます。

今、日本は少子化の急速な進展、そして、それに伴って人口減少という非常にダイナミックな社会構造の変化の中におります。そんな中で注目を浴びているのは、やはり地方の

力をどうやって強くするか。出生率 1.1 の東京に任せてはおけないという強い思いを持って、私たちはこの地域、特に県境を越えても頑張っていこうということで取り組ませていただいております。その強い思いを存分に発揮できるようにしていかなければいけないと思います。

そんな中で、今年は南信地域、そして、遠州地域の新たな参加団体、8市町村、3商工会という仲間が加わりました。東三河は一個も入っていないじゃないかと言われますが、東三河はもう入る余地はございません。全員参加でございます。しからば、西三河に東三河の勢力を広げていかなければいけないのかと、思っているところでありますが、とにかく、みんなの力が一つにまとまることのすばらしさを感じていただける方たちがこんなに増えてきているのだ、そして、その力を私たちは何ともしっかりと実現につなげていかなければいけない、こう強く思っております。

来年のサミットにおきましては、また一歩進展を見ることが出来る素晴らしいサミットにしていくために、精いっぱい準備をして頑張っていきたいと思っております。

来年度のサミットは、みんなの声が大きく届く、そんなサミットにしていきたいと心から願っており、その準備を進めてまいりたいと思っております。

終わりに当たりまして、きょうのこの素晴らしい会をご準備いただきました事務局の皆さん、そして、ご参加いただきました経済界、行政、大学、議会、何よりも住民の皆様、全ての皆様に心から感謝申し上げます、来年もぜひお集まりいただきますように、心からお願い申し上げます。次回開催地を代表してのあいさつとさせていただきます。

来年も皆さんも、一緒に集まりましょう。よろしく願いいたします。

11 交流会

San-En-Nanshin Summit 2014 in Ensyu

■ 交流会の様子



■ 観光連携事業



■ 三遠南信地酒サミット



■ 「ジャズ演奏」



